

## 7-2 区 SX03 (図 129)

7-2 区北西部で検出された土坑である。大半は現代の建物基礎によって削平されており、一部が残存するだけである。平面形は隅丸長方形の可能性が高い。残存部分の長軸は 1.5 m、短軸は 0.4 m、深さは 0.2 m である。遺物は弥生土器片が少量出土した。弥生時代後期前半の壺の口縁部小片がみられることから、SX03 は弥生時代後期前半のものと考えられる。

## 7-7 区 SK01 (図 130)

7-7 区中央部で検出された土坑である。中世の溝 SD0702 と重複し、西端は削平される。SD0702 のほうが新しい。平面形は楕円形で、長軸 2.7 m、短軸 1.8 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 m である。遺物は少量の土器・須恵器片が出土した。1014 は須恵器杯で、8 世紀後半から 9 世紀前半、1012 は土師器甕で 9～10 世紀前半に属することから、SK01 は 9～10 世紀のものと考えられる。

## 7-7 区 SK03 (図 131)

7-7 区東南端から 7-6 区南西端にかけて検出された土坑である。『旧練兵場遺跡Ⅳ』では 7-6 区 SX02 と報告された。古墳時代後期の溝 SD06 の埋土上面から掘られた土坑である。平面形はややいびつな楕円形で、長軸 2.1 m、短軸 1.3 m、深さ 0.5 m である。埋土には炭化物の細片や焼土粒が少量含まれていた。遺物は土器・須恵器の小片が少量出土した。陶器須恵器編年 TK217 型式の須恵器杯(1016)が含まれるが、重複する SD06 の遺物が混入した可能性が高い。SK03 は SD06 より新しいが、古代の遺物が含まれていないことから、SK03 は 7 世紀のものと考えられる。

## 7-7 区 SK04 (図 131)

7-7 区東端で検出された土坑である。東部は攪乱を受けて削平されている。残存部分の長軸は 1.5 m、短軸 0.5 m、断面形は浅い逆台形状で、深さ 0.1 m である。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。出土遺物は小片ばかりであるが、古墳時代後期のものと思われる。

## 7-7 区 SK05 (図 132)

7-7 区東部で検出された土坑である。SX04 と重複するが、SK05 のほうが新しい。平面形はいびつな楕円形で、長軸 1.8 m、短軸 0.9 m である。断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 m である。埋土中には土器破片がぎっしり詰まっていた。いずれも小破片であることから、これらの土器は廃棄された可能性が高い。土器量は整理箱半分程度である。これらは弥生時代後期後半に属することから、SK05 は弥生時代後期後半のものと考えられる。

## 7-7 区 SK06 (図 133)

7-7 区南東部、古墳時代の溝 SD0704 の底面で検出された土坑である。平面形は円形で、径 0.5～0.6 m、断面形は浅い皿状、深さ 0.1 m である。埋土に炭化物・焼土を含む。付近は攪乱や古墳時代の溝に削平されているが、SK06 は堅穴建物の施設の一部である可能性が高い。出土遺物はごく少量であるが、弥生土器片がみられることから、弥生時代のものと考えられる。

## 7-7 区 SK08 (図 133)

7-7 区東部で検出された遺構である。弥生時代の堅穴建物 SH01 と重複する。柱穴 SP214・SP165 と重複し、一部を削平される。また、古墳時代の溝 SD0713、弥生時代の堅穴建物 SH01 と重複するが、SK08 のほうが新しい。長軸 1.2 m 以上、短軸 0.6 m である。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.2 m である。SK08 は当初土坑と考えて調査をしたが、SD0709 の南に位置し、延長上にあることから、SD0709 に関連する遺構の可能性もある。遺物は須恵器片・弥生片が少量出土した。須恵器が出土していることから、古墳時

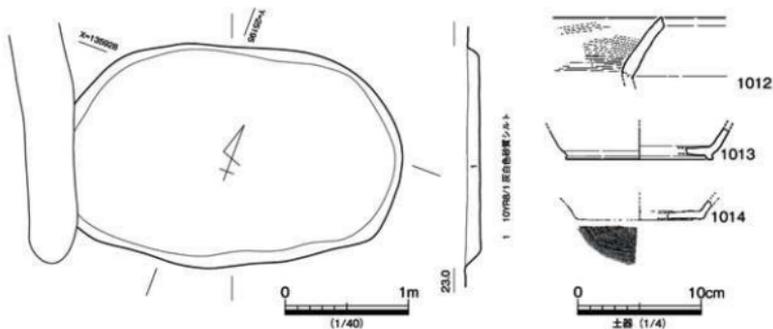


図 130 7-7 区 SK01

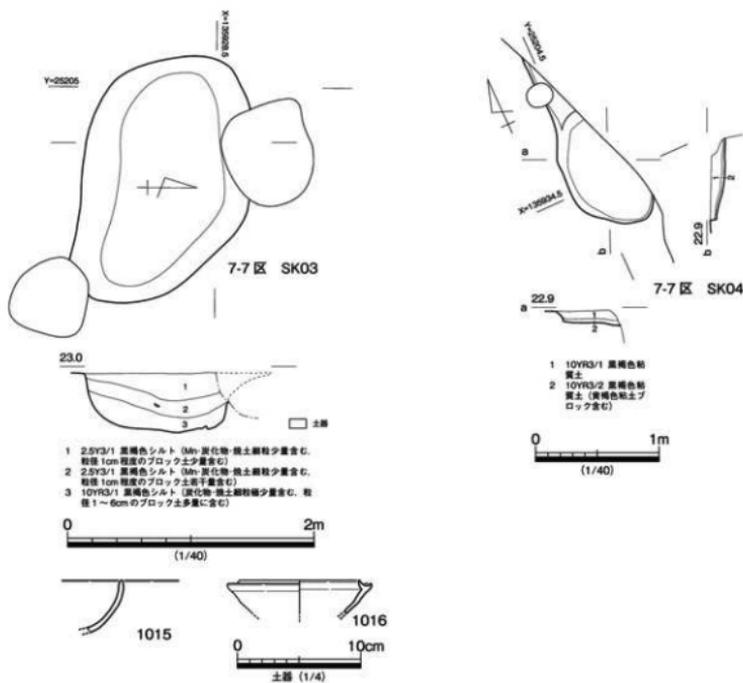


図 131 7-7 区 SK03-7-7 区 SK04

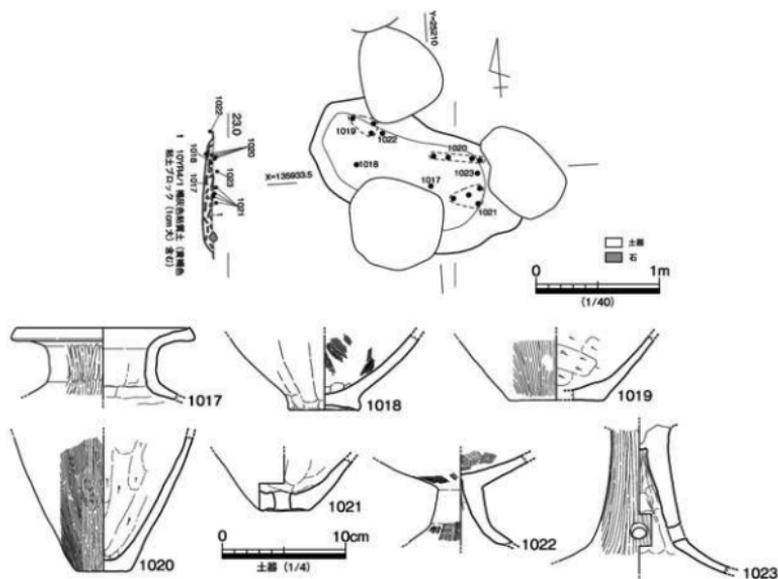


図 132 7-7 区 SK05

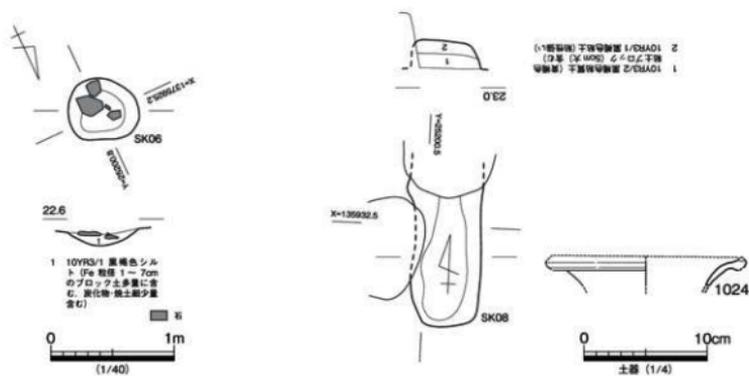


図 133 7-7 区 SK06・7-7 区 SK08

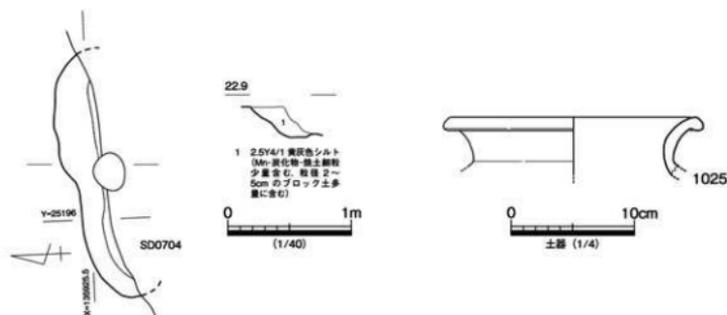


図 134 7-7 区 SX02

代後期のものと考えられる。

#### 7-7 区 SX02 (図 134)

7-7 区南部で検出された土坑である。古墳時代から奈良時代の溝 SD0704 と重複し、削平される。残存部分から平面形は長楕円形または隅丸方形と推定される。現存長 2.0 m、現存幅 0.3 m で、断面形は皿状で、深さ 0.2 m である。土器・須恵器が少量出土した。1025 は須恵器甕で、陶邑須恵器編年 TK43 型式に属することから、SX02 は 6 世紀後葉のものと考えられる。

#### 7-7 区 SX04 (図 135)

7-7 区東部で検出された土坑である。SK05 と重複し、削平される。SK05 のほうが新しい。SX04 の平面形は楕円形で、長軸 2.2 m 前後、短軸 1.7 m である。深さ 0.05 m 浅く、底面東部には小穴があり、最深部の深さは検出面から 0.3 m である。遺物は弥生土器が少量出土した。弥生土器壺(1026)・甕(1027) は弥生時代後期前半に属することから、SX04 は弥生時代後期前半のものと考えられる。

#### 7-7 区 SX05 (図 136)

7-7 区南西部、SD0704 と SD06 に挟まれた部分で検出された土坑である。平面形はいびつな長楕円形で、長軸 1.7 m、短軸 0.6 m で、深さは 0.05 m と浅い。底面から焼土・炭化物粒が多量に出土し、少量の土器・須恵器片・鉄器が出土した。1030 は鉄鎌である。須恵器片を含むことから、古墳時代後期のものと考えられる。

#### 7-7 区 SX06 (図 137)

7-7 区南部で検出された土坑である。南部は古墳時代後期の溝 SD0717 と重複し、削平される。平面形はいびつな楕円形で長軸 2.6 m、短軸 1.0 m 以上である。断面形は皿状で、深さ 0.3 m である。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。1032 は須恵器高杯の脚部であるが、陶邑須恵器編年 TK47 ~ MT15 型式に属することから、SX06 は 6 世紀前葉のものと考えられる。

#### 7-8 区 SK01 (図 138)

7-8 区南東部で検出された土坑である。中世の溝 SD0803 と重複する。SD0803 よりも新しい。平面形はいびつな方形で、1 辺 1.5 m である。断面形は皿状で、深さ 0.2 m である。遺物は須恵器片・土師器片・弥生土器片・石器が少量出土した。1033 は砥石である。炭化物が付着する。石材は不明である。出土土器はいずれも小片で、弥生時代から古墳時代に属するものであるが、埋土の状況から SK01 は中世のものと考えられる。

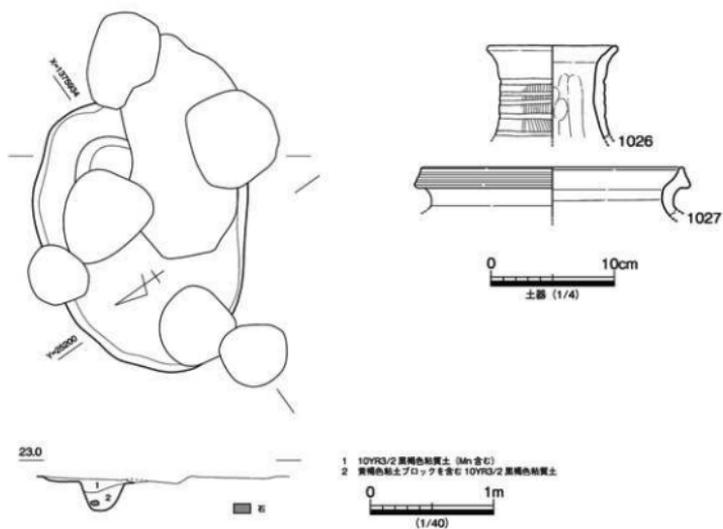


図 135 7-7 区 SX04

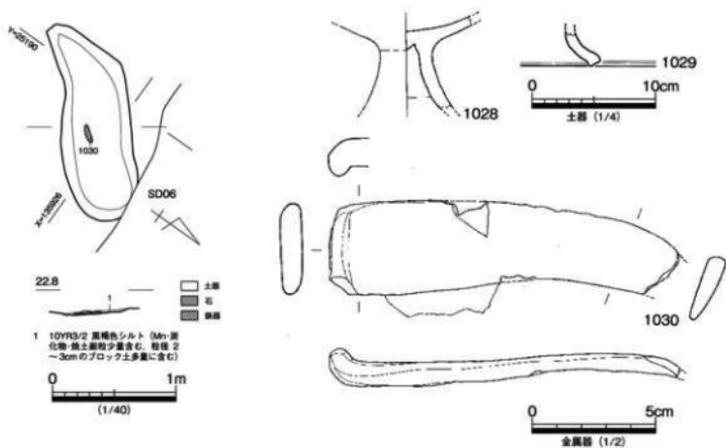


図 136 7-7 区 SX05

### 7-8区 SK02 (図139)

7-8区北東部で検出された土坑である。平面形は隅丸方形で、1辺1.0～1.1m、深さ0.15mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。これらは弥生時代から古墳時代のものであるが、埋土の色調・土質から、SK02は中世のものと考えられる。

### 7-8区 SK04 (図141)

7-8区南東部で検出された土坑である。古代の柱穴跡SP78・SP86と重複し、遺構の一部が削平される。平面形はいびつな楕円形で、長軸長3.1m、短軸長2.3m、断面形は皿状で、深さ0.3mである。北部で検出されたSX01・SX02と同様浅い土坑であるが、SX01・SX02は完形に近い形状の土器が多量に出土しているのに対し、SK04は土器小片ばかりであった。遺物は土器・須恵器・玉類が整理箱半分程度出土した。1036は滑石製の白玉である。そのほか弥生土器甕(1034)、須恵器高杯(1035)が出土した。1035

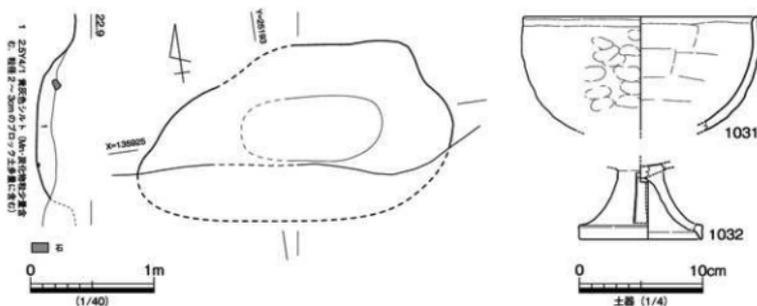


図137 7-7区 SX06

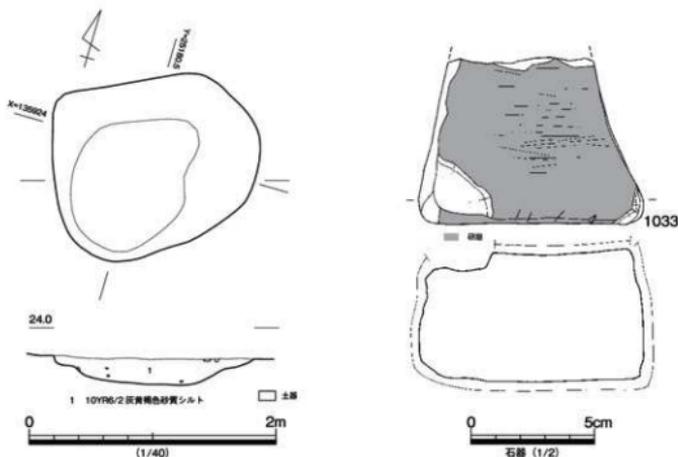


図138 7-8区 SK01

は陶器須恵器編年 TK217 型式に属することから、SK04 は 7 世紀前葉から中葉のものと考えられる。

#### 7-8 区 SK06 (図 140)

7-8 区南部で検出された土坑である。平面形はややいびつな楕円形で、長軸 1.1 m、短軸 0.5 m、断面形は箱形で、深さ 0.35 m である。須恵器・土師器の細片が少量出土したことから、古墳時代後期のものと考えられる。

#### 7-8 区 SK07 (図 142・143)

7-8 区南東部で検出された土坑である。平面形はいびつな楕円形で、長軸 1.8 m、短軸 1.3 m である。断面形は皿状で、深さ 0.2 m である。土坑内の北部からは土器・須恵器が押し潰されたような状態で出土した。遺物は整理箱 3 箱出土した。いずれも完形品ではなく、礫に混じって破片の状態で出土した。廃棄されたものであろう。1037 は弥生土器器台、1038～1047 は土師器甕である。1048 は製塩土器で、底部は尖り、口縁部にタタキ目がある。1049・1050 は須恵器壺、1051・1052 は須恵器甕で、いずれも口縁部を欠損する。1053～1055 は須恵器高杯である。これらの須恵器は陶器須恵器編年 TK217 型式に属することから、SK07 は 7 世紀前葉から中葉のものと考える。

#### 7-8 区 SK08 (図 144)

7-8 区北部で検出された土坑である。中世の溝 SD0808 と重複し、削平されるため遺構の南部は不明である。平面形は楕円形と考えられ、長軸 1.1 m 以上、短軸 0.6 m である。断面形は箱形を呈し、深さ 0.1 m である。遺物は土器片が少量出土した。弥生土器甕 (1056) は弥生時代中期後半に属するが、他に時期を明確に示す土器はみられない。埋土の色調は黒褐色で、典型的な弥生時代中期の遺構埋土の色調と異なることから、SK08 は弥生時代後期のものと考えられる。

#### 7-8 区 SK09 (図 144)

7-8 区は中央部で検出された土坑である。古墳時代の溝 SD23 の底面で検出された。SD23 のほうが新しい。平面形はいびつな楕円形で、長軸 1.0 m、短軸 0.7 m である。深さは 0.1 m であるが、削平されているため、本来の深さは 0.6 m 以上であろう。埋土からは焼土と炭化物が出土していることから、火を使用する施設で、この周辺に竪穴建物があった可能性が高い。埋土からは須恵器片・土器片が少量出土したが、須恵器は混入で、本来 SD23 に伴うものである可能性が高い。周辺には弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の竪穴建物 SH01 があることから、SK09 は弥生時代終末期から古墳時代前期初頭のものと考えられる。

#### 7-8 区 SK10 (図 144)

7-8 区中央部で検出された土坑である。遺構の南部は攪乱によって削平され、北部は古墳時代の溝 SD06 によって削平される。遺構の北部と南部は削平されているが、底面の形状から平面形はほぼ円形で、長軸 1.1 m、短軸 0.7 m 以上と推定される。遺物は弥生土器・土師器・須恵器片が少量出土しただけである。図化した須恵器蓋 (1057) は陶器須恵器編年 TK47～MT15 型式に属することから、SK10 は 6 世紀前葉のものと考えられる。

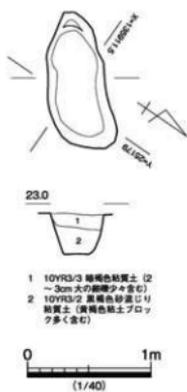
#### 7-8 区 SK13 (図 144)

7-8 区西部で検出された土坑である。遺構の東部は SH01 によって削平される。平面形はややいびつな楕円形で、長軸 1.3 m、短軸 0.6 m、深さ 0.3 m である。北部は二段掘りで、テラス状となる。遺物は弥生土器細片が 10 点程度出土した。詳細な時期は不明であるが、弥生時代のものと考えられる。

#### 7-8 区 SK14 (図 144)

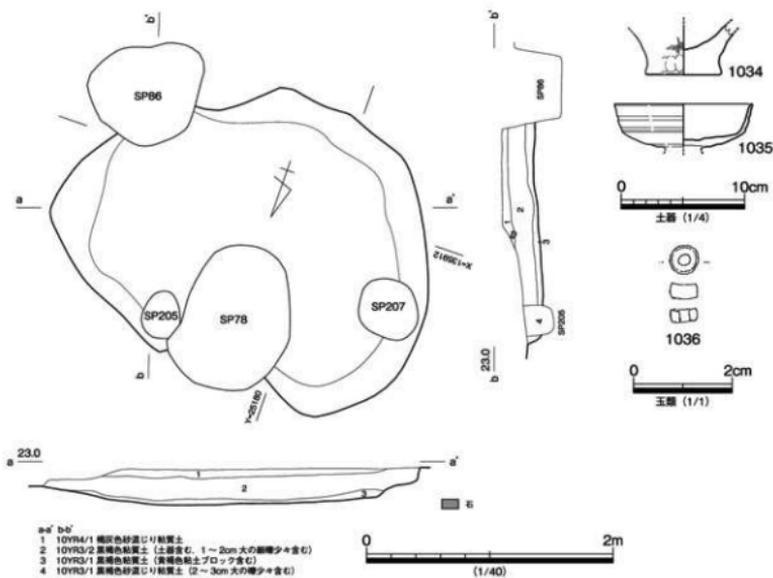


図 139 7-8 区 SK02



- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土 (2  
~3cm 大の礫少+含む)  
2 10YR3/2 黄褐色砂混じり  
粘質土 (黄褐色粘土ブロッ  
ク多く含む)

図 140 7-8 区 SK06



- a-a' b-b'  
1 10YR4/1 暗褐色砂混じり粘質土  
2 10YR3/2 黄褐色粘質土 (土層含む、1~2cm 大の礫少+含む)  
3 10YR3/1 黄褐色粘質土 (黄褐色粘土ブロック含む)  
4 10YR3/1 黄褐色砂混じり粘質土 (2~3cm 大の礫少+含む)

図 141 7-8 区 SK04

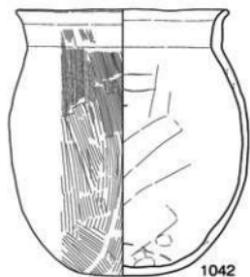
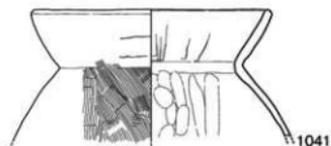
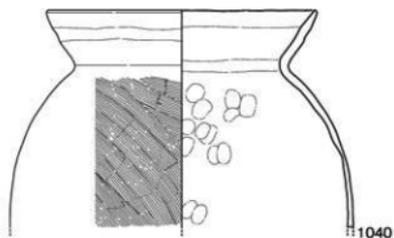
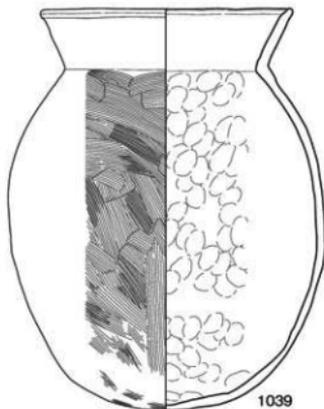
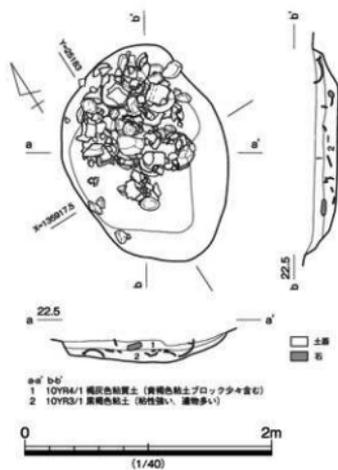


図 142 7-8 区 SK07(1)

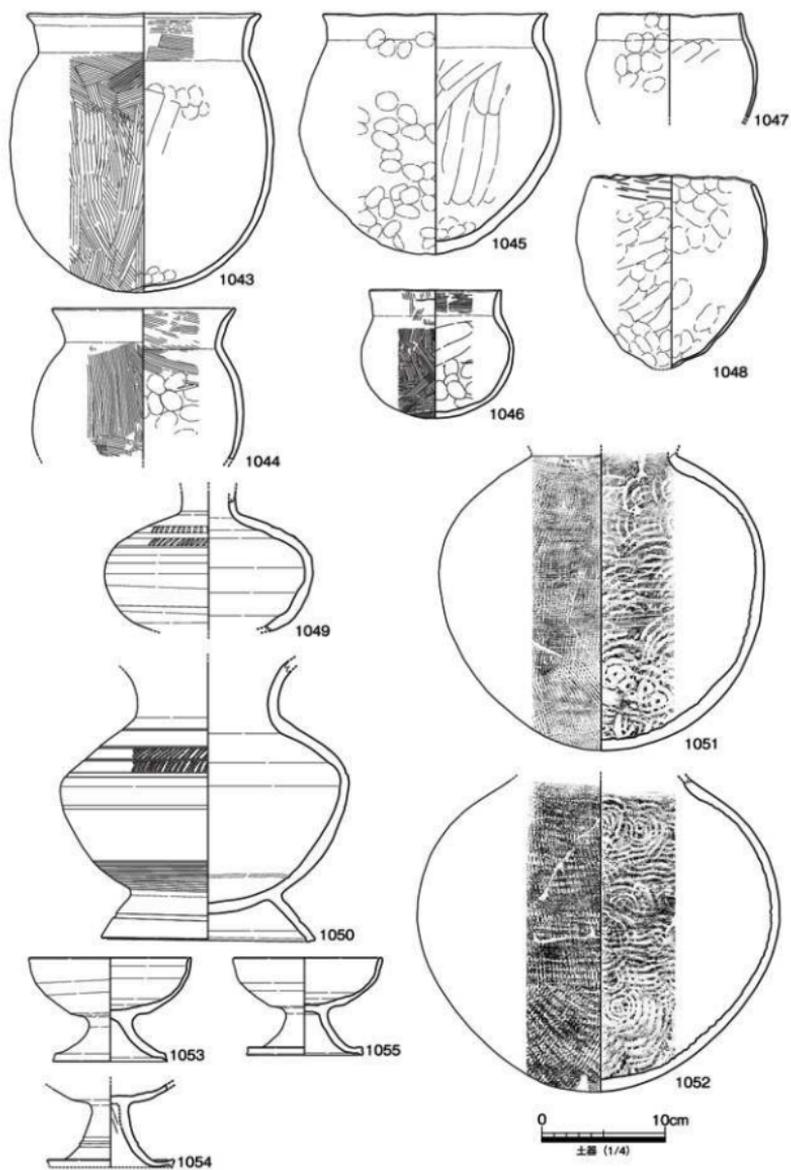


图 143 7-8区 SK07(2)

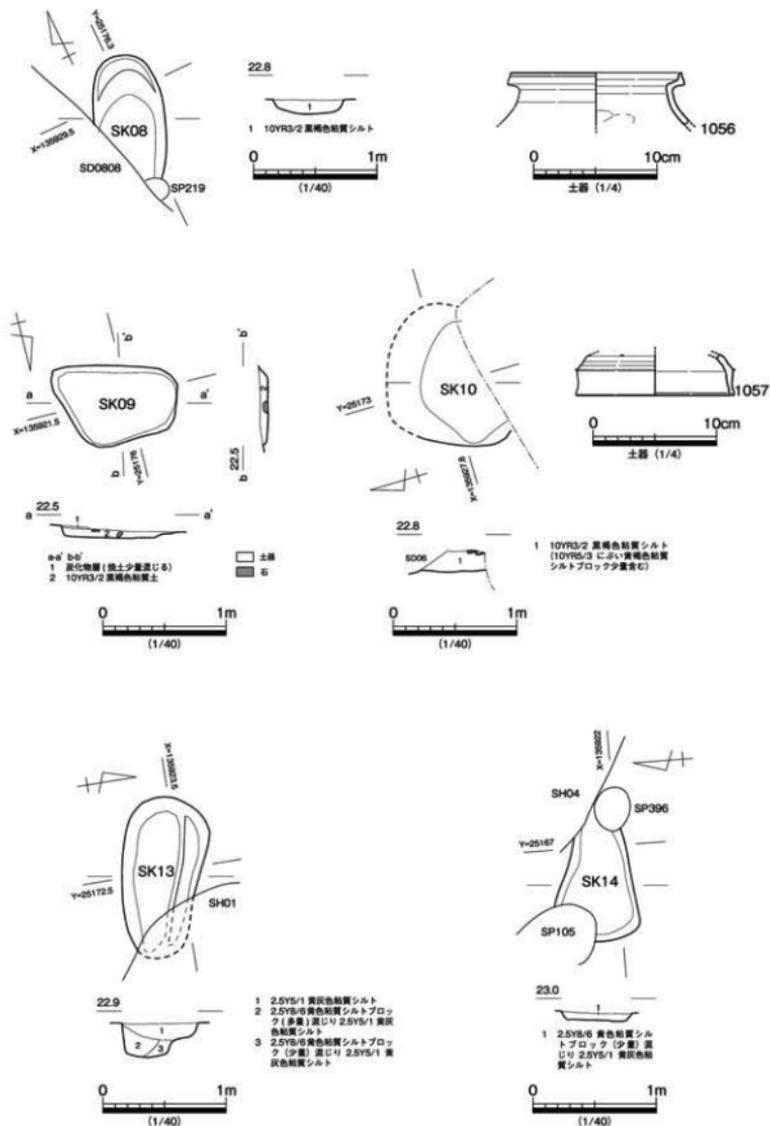


図 144 7-8 区 SK08・7-8 区 SK09・7-8 区 SK10・7-8 区 SK13・7-8 区 SK14

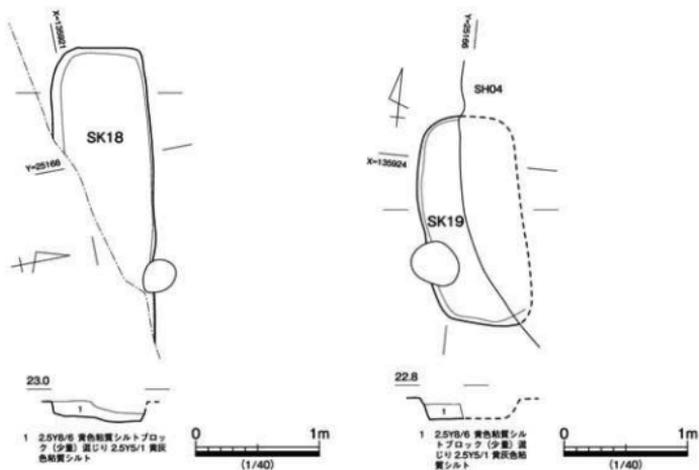


図 145 7-8区 SK18・7-8区 SK19

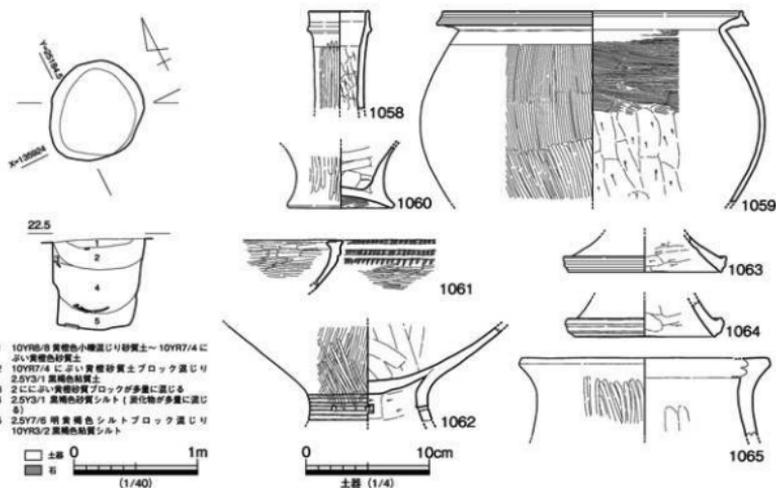


図 146 7-8区 SP268

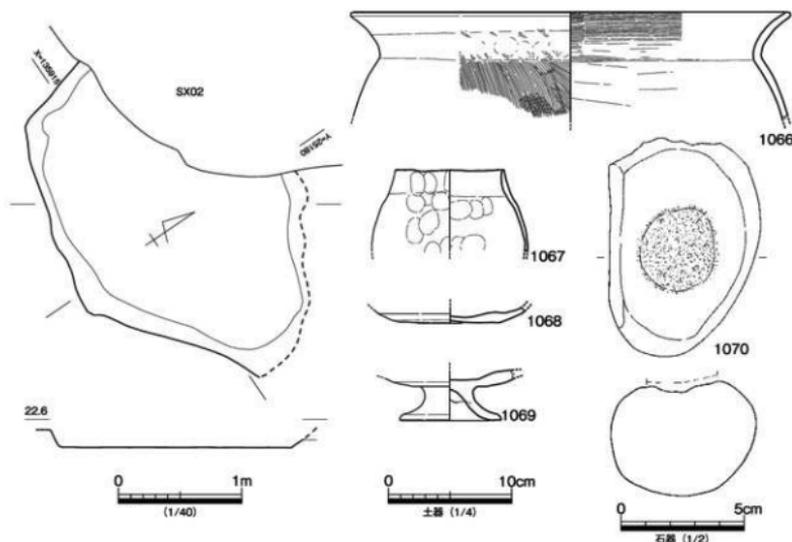


図 147 7-8区 SX01

7-8区南西部で検出された土坑である。弥生時代後期の竪穴建物 SH04、弥生時代の柱穴跡 SP396・SP105 と重複しており、一部が削平される。平面形はいびつな方形で、長軸 12 m 以上、短軸 0.7 m 以上である。断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 m である。土器小片が出土しただけであるが、弥生時代後期前半新段階から後期後半古段階の竪穴建物 SH04 よりも古いことから、SK14 は弥生時代後期前半以前のものと考えられる。

#### 7-8区 SK18 (図 145)

7-8区南西部で検出された土坑である。南部は現代の建物基礎によって破壊されている。平面形は隅丸方形で、長軸 2.0 m 以上、短軸 0.8 m である。断面形は箱形で、底面は北部が少し低く、深さ 0.1 m である。遺物は弥生土器片が少量出土しただけである。詳細な時期は不明であるが、SK18 は弥生時代のものと考えられる。

#### 7-8区 SK19 (図 145)

7-8区南西部で検出された土坑である。弥生時代の竪穴建物 SH04 と重複し、削平される。平面形は隅丸長方形で、長軸 1.7 m、短軸 0.7 m 以上である。断面形は箱形で、深さ 0.2 m である。遺物は弥生土器片が少量出土した。詳細な時期は不明であるが、SK19 は弥生時代のものと考えられる。

#### 7-8区 SP268 (図 146)

7-8区東部で検出された土坑である。河川 SR01 の埋土中層上面で検出された。平面形は円形で、径 0.8 m、断面形は台形で、深さ 0.75 m である。埋土最下層の黒褐色砂質シルトには炭化物片と自然礫が多量に混じていた。炭化物は植物と思われるが、種子はみられなかった。黒褐色砂質シルトの上部に堆積する土層からは自然石とともに弥生土器片が少量出土した。埋土には SP268 の周辺の堆積層である黄橙

色土がブロック状に混じることから、人為的に埋められた可能性が高い。遺物は弥生土器片などが整理箱半分程度出土した。これらの土器は弥生時代中期後半に属することから、SP268は弥生時代中期後半のものと考えられる。また、SP268はSR01埋土中層上面で検出されたことから、SR01の埋土中層の埋没はSP268掘削以前、弥生時代中期後半以前であることがうかがわれる。

#### 7-8区SX01 (図147)

7-8区南部で検出された土坑である。古墳時代から奈良時代の溝SD23、古墳時代の土坑SX02と重複し、遺構の一部が削平される。また、遺構の西半分は現代の建物基礎により削平される。平面形はいびつな楕円形で、長軸3.0m、短軸2.0m、深さ0.1mである。遺物は土器・須恵器片・石器が整理箱半分程度

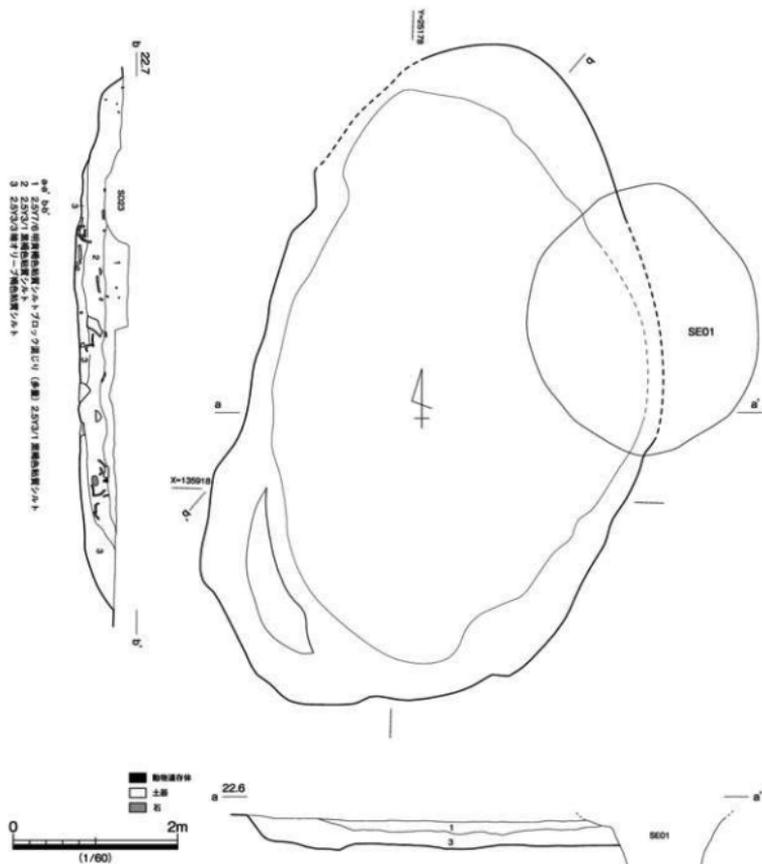


図148 7-8区SX02(1)

出土した。いずれの土器も破片の状態で、完形品に近いものはみられないことから、廃棄されたものと考えられる。出土した須恵器は陶器須恵器編年 TK217 型式に属することから、SX01 は 7 世紀前葉から中葉のものと考えられる。

#### 7-8 区 SX02 (図 148 ~ 162)

7-8 区南部で検出された土坑である。遺構の西部は建物の基礎のため、上部を削平される。また、古墳時代から奈良時代の溝 SD23 と重複し、一部が削平される。SD23 のほうが埋没は新しい。SX02 の平面形はいびつな楕円形で、長軸 8.4m、短軸 4.9 m である。断面形は浅い皿状である。現存の深さは 0.6 m であるが、本来の深さは 0.7 m 以上と考えられる。埋土下位には暗オリーブ褐色～黒褐色粘質シルト層が堆積する。SX02 は弥生時代以前の河川 SR01 の堆積層の上面に掘られた遺構であるが、この付近の標高はこの周辺の中で最も低いことから、水溜めのために掘られたものと考えられる。また、埋土上位には付近の地山である黄褐色粘土のブロックが多量に含まれることから、人為的に埋められた可能性が高い。また、埋土には多量の遺物が含まれており、土器・須恵器・石器が整理箱 35 箱出土した。これらは

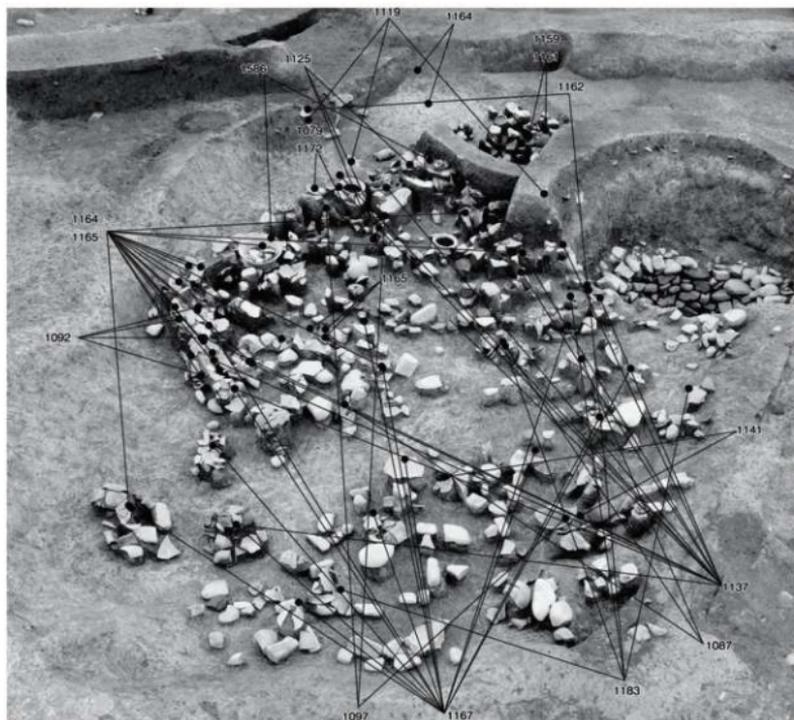


図 149 7-8 区 SX02(2)

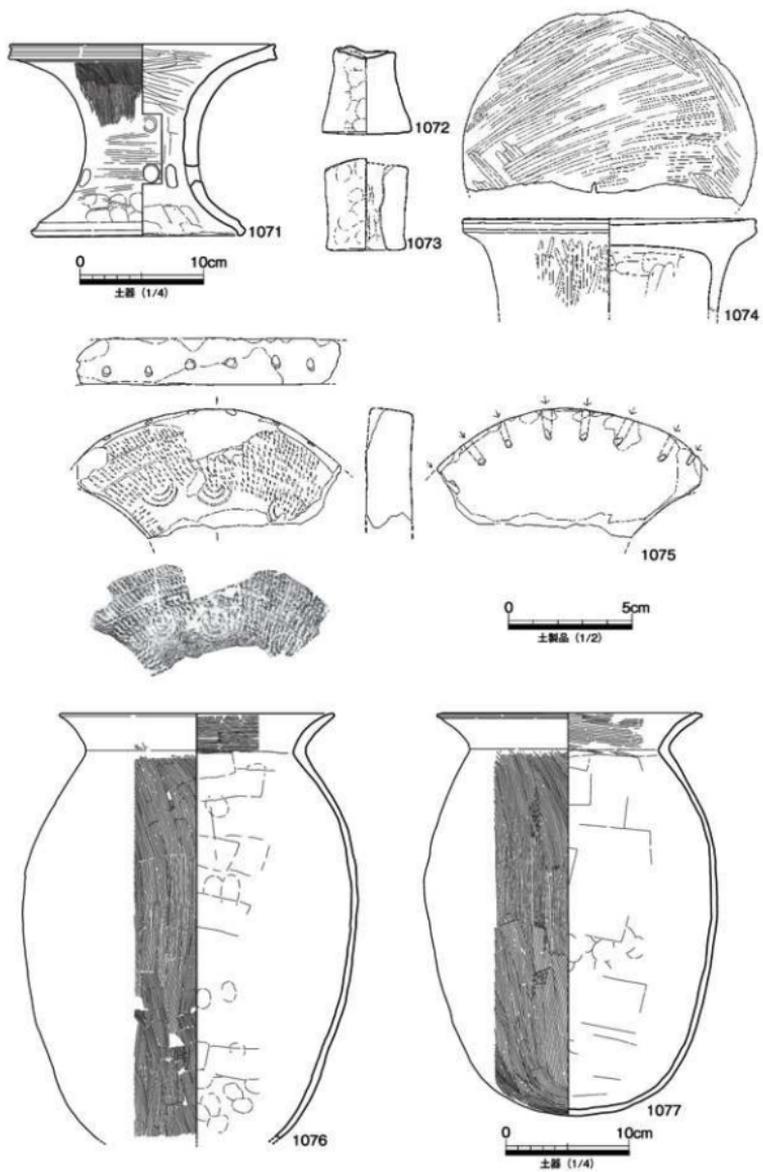
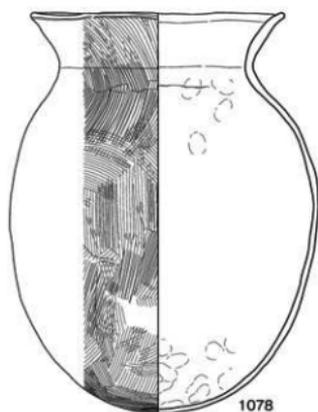
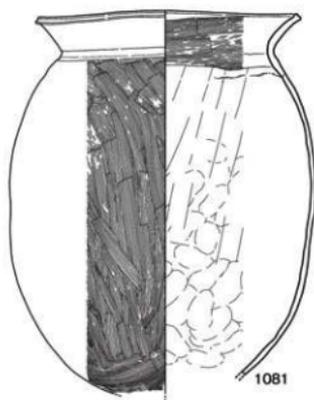


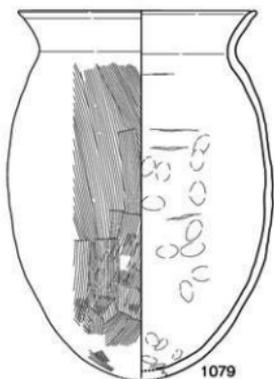
图 150 7-8区 SX02(3)



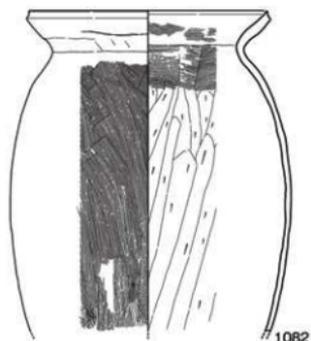
1078



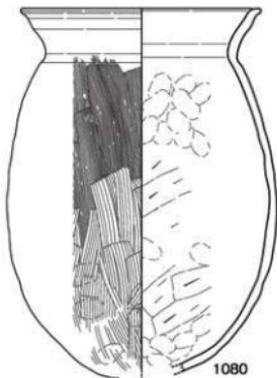
1081



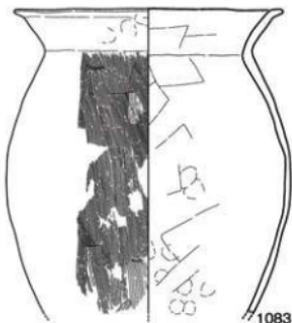
1079



1082



1080



1083

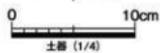


图 151 7-8区 SX02(4)

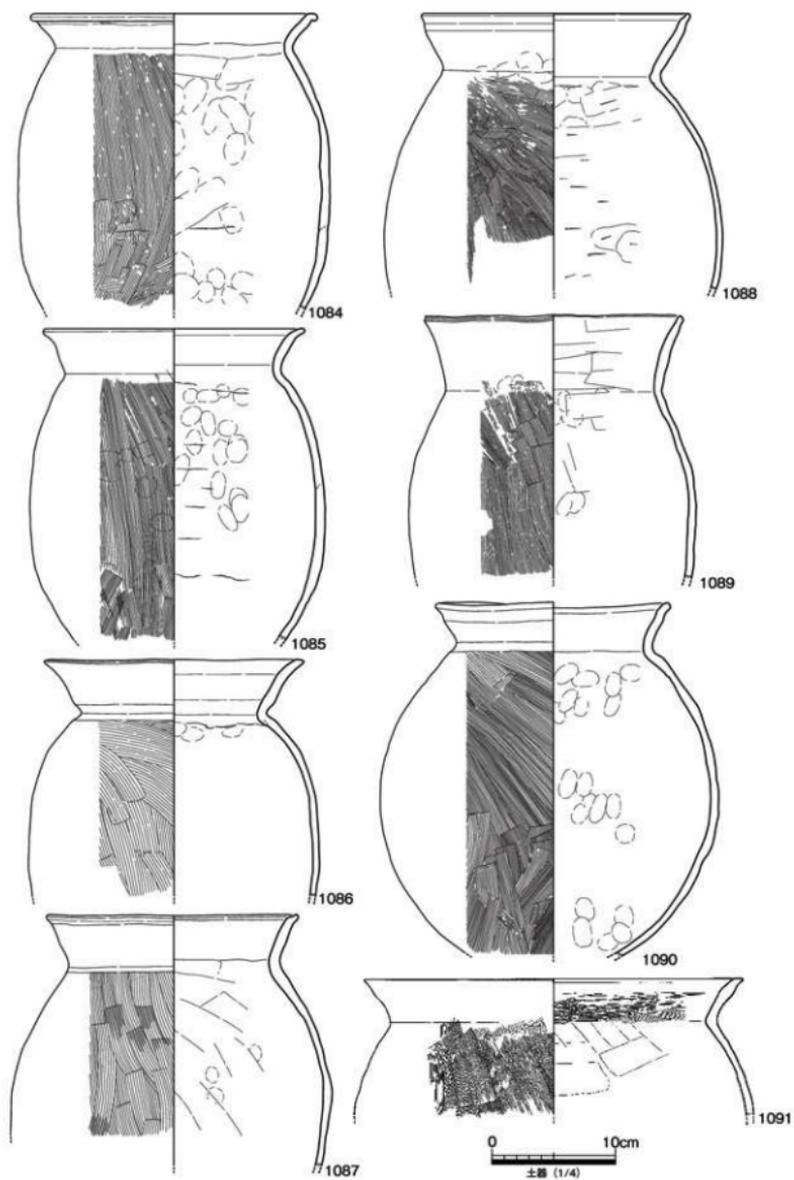


图 152 7-8区 SX02(5)

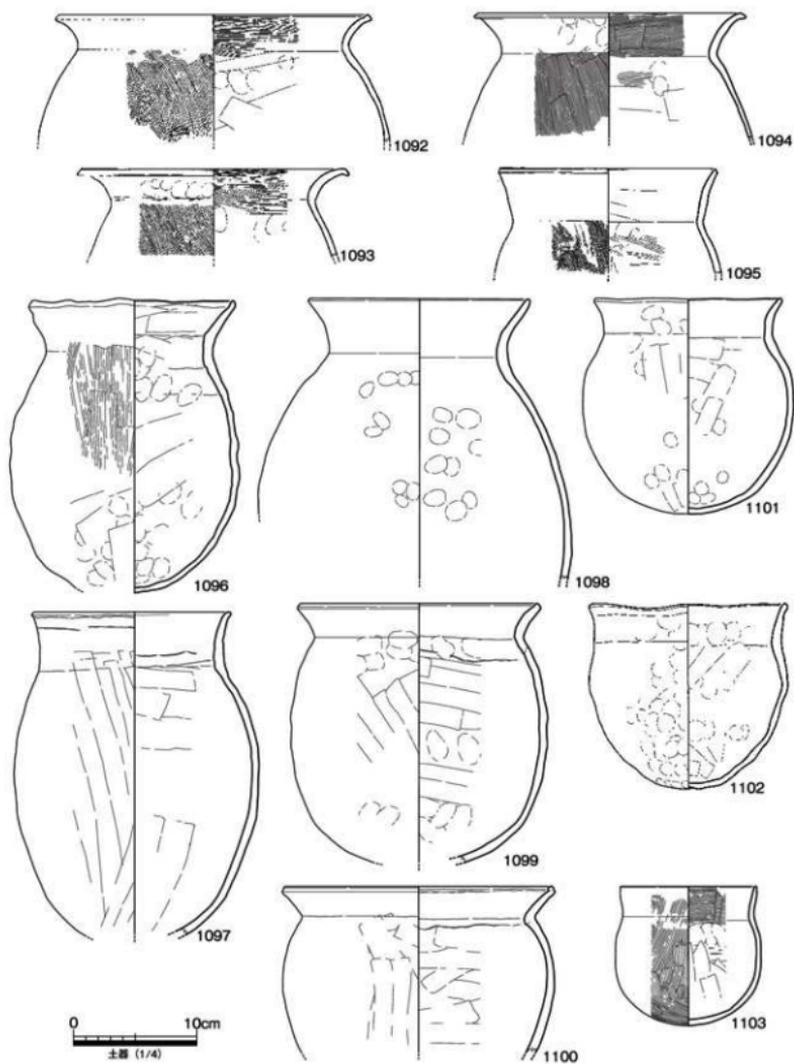


图 153 7-8区 SX02(6)

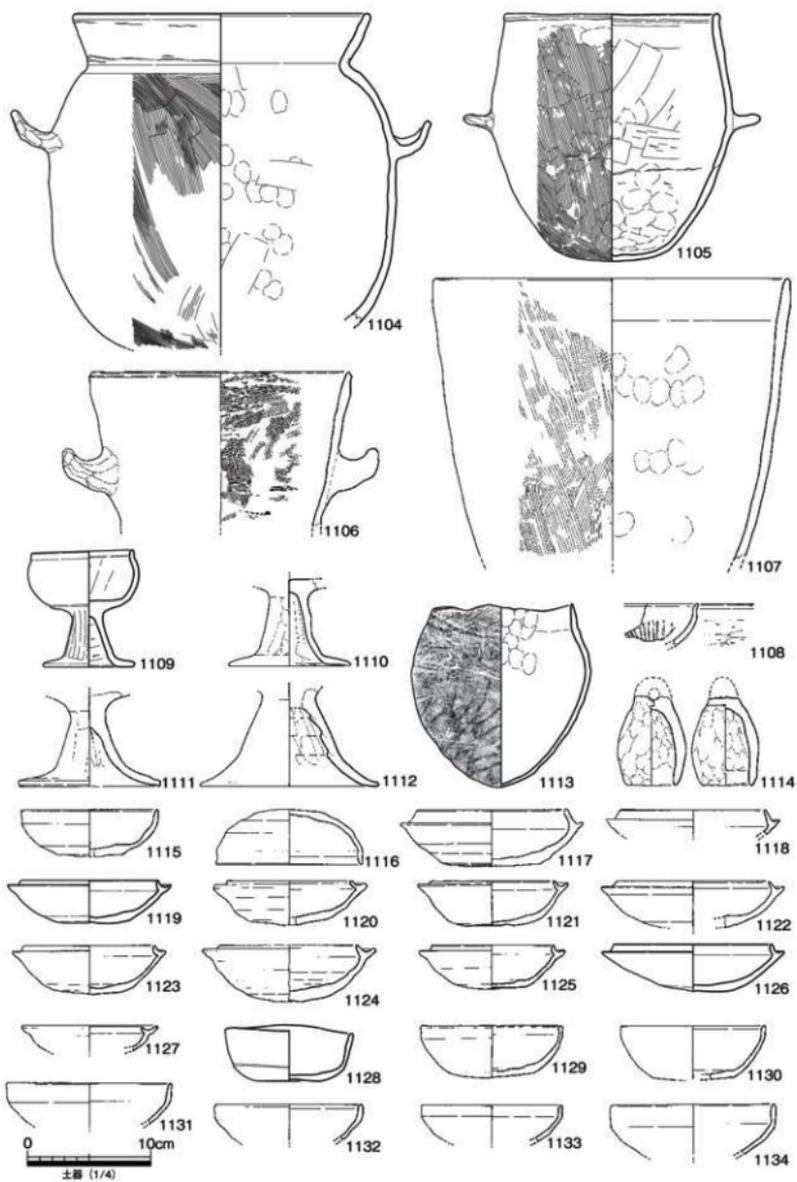


图 154 7-8区 SX02(7)

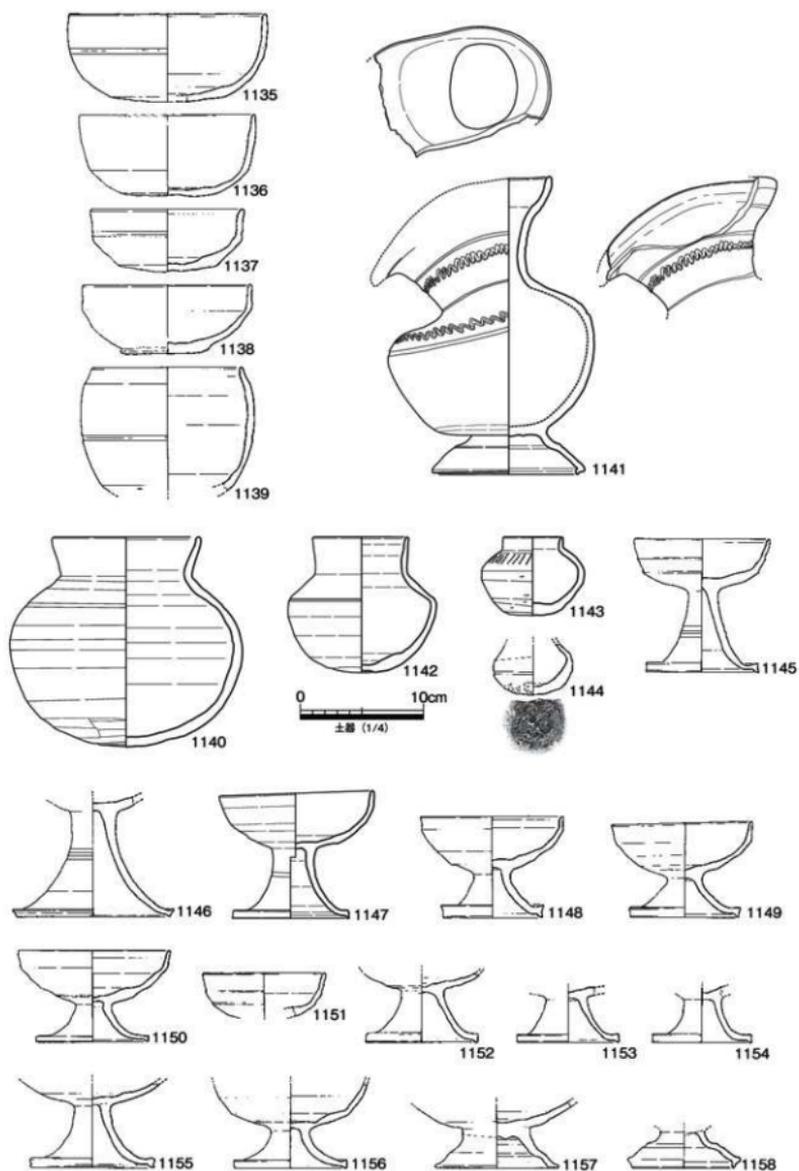


图 155 7-8 区 SX02(8)

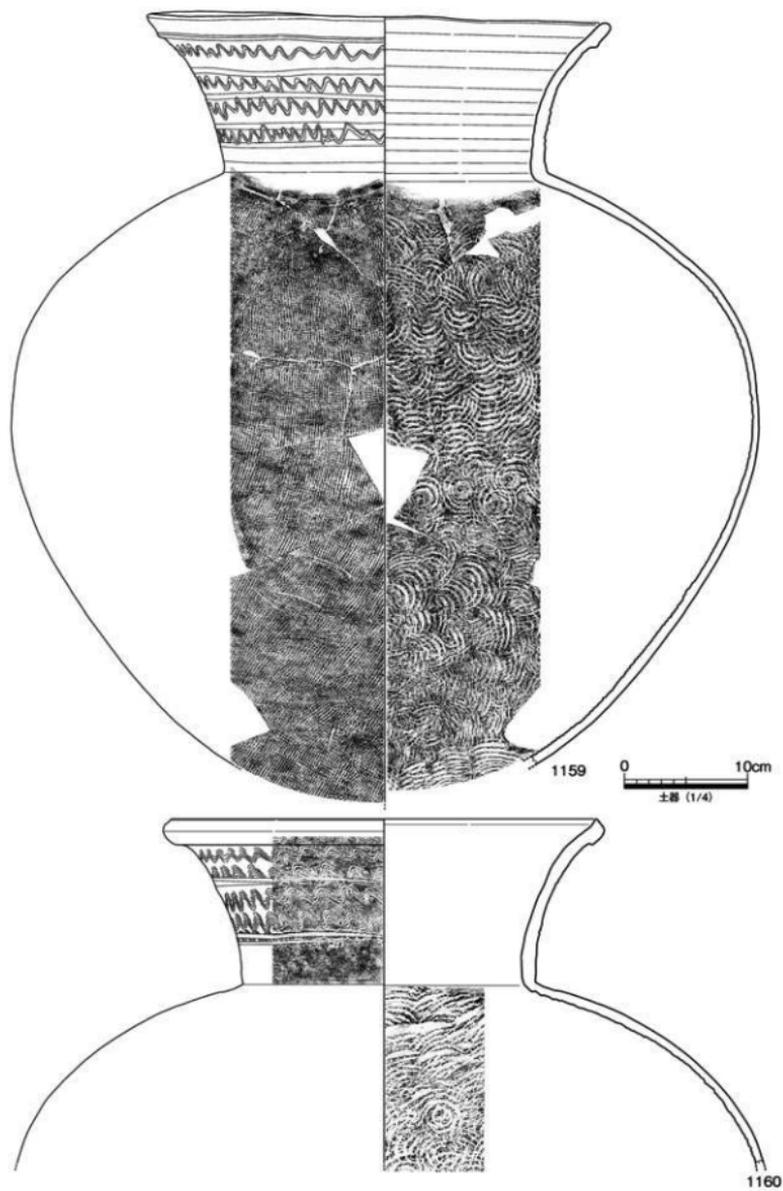
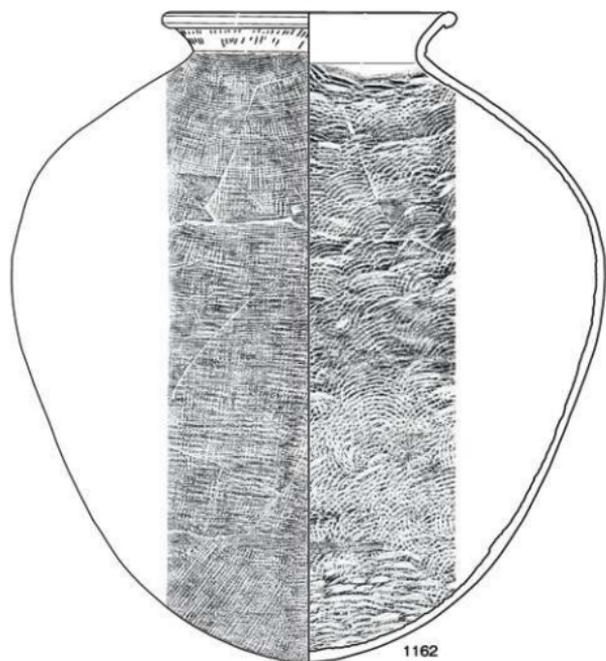
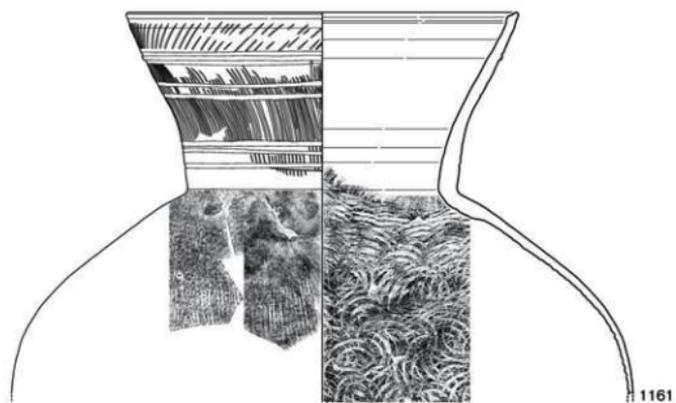


图 156 7-8区 SX02(9)



0 10cm  
土器 (1/4)

图 157 7-8区 SX02(10)

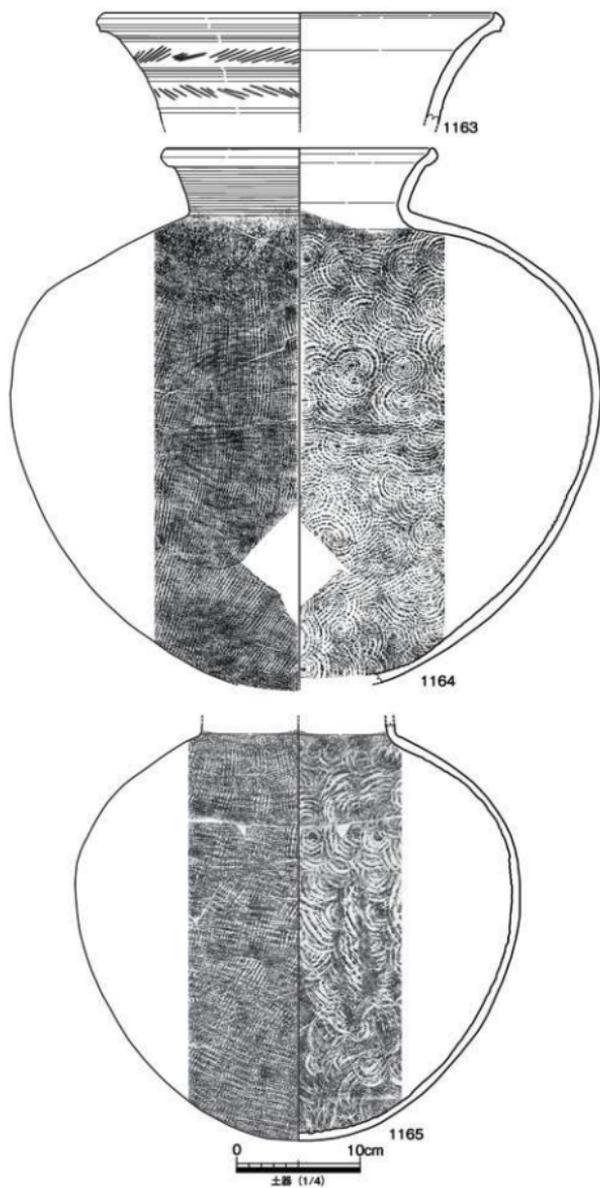


图 158 7-8 区 SX02(11)

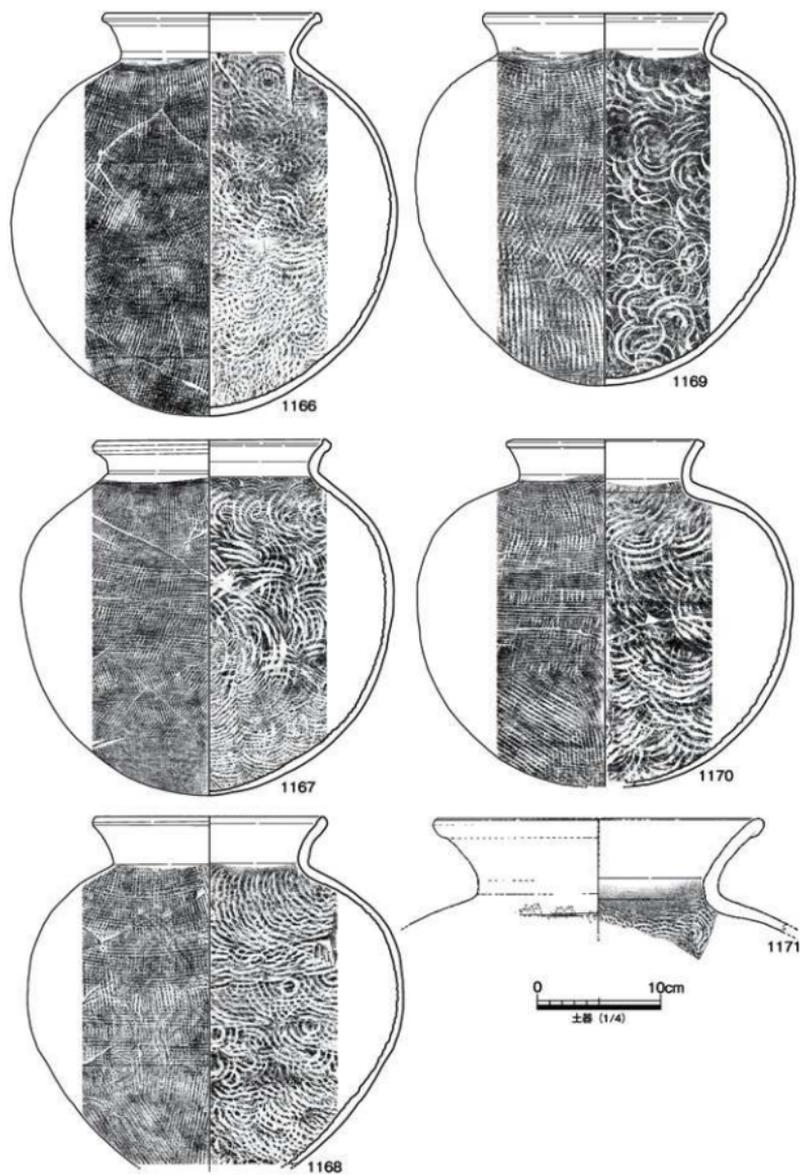


图 159 7-8 区 SX02(12)

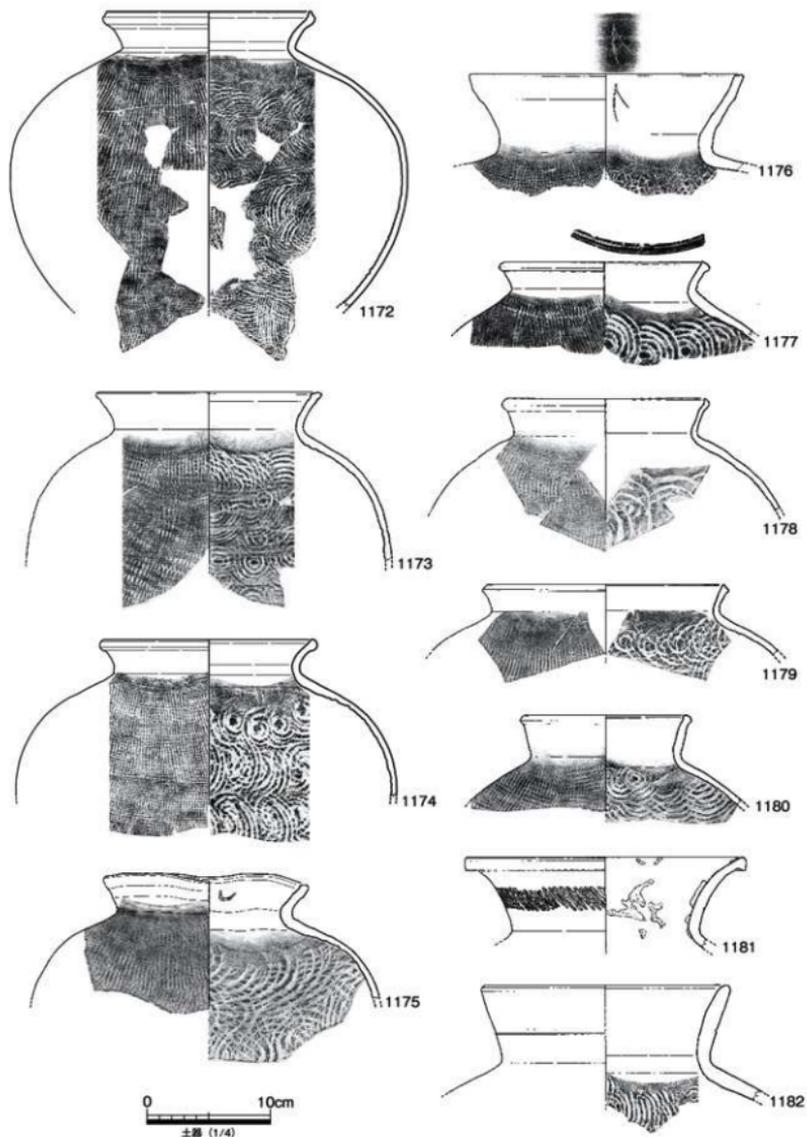


图 160 7-8区 SX02(13)

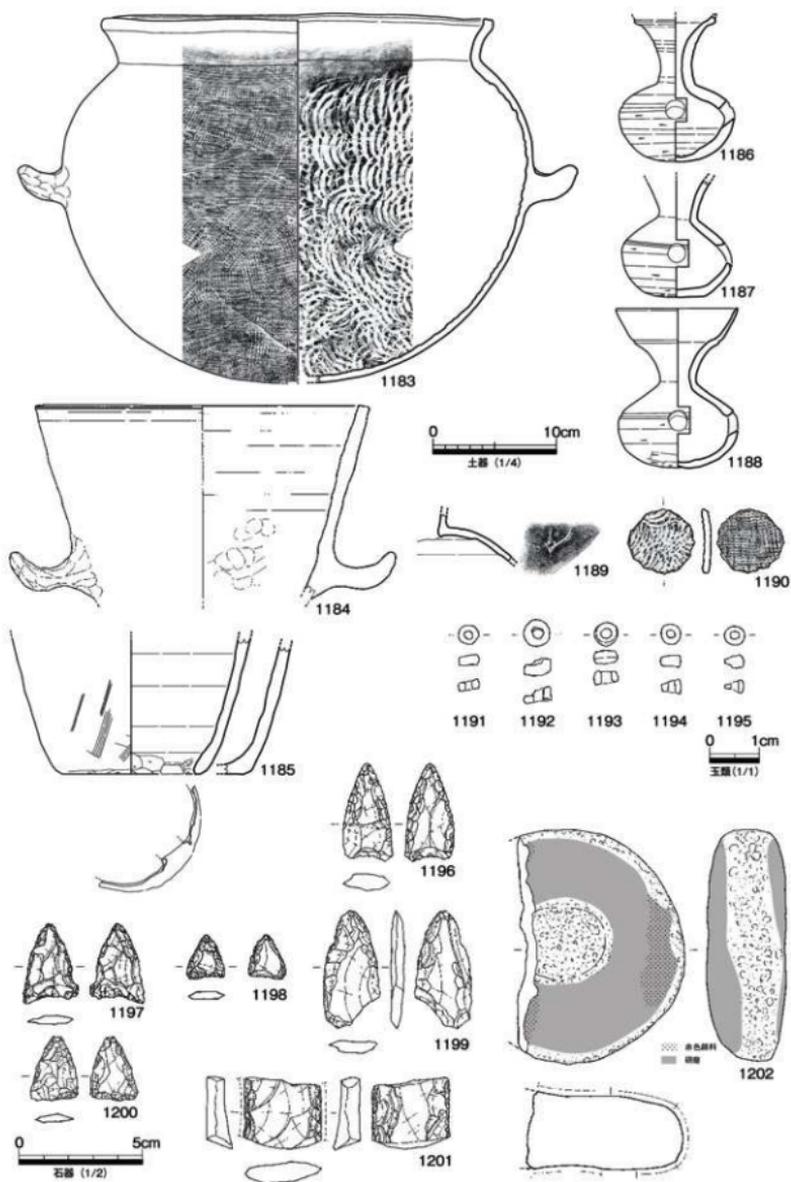


图 161 7-8 区 SX02(14)

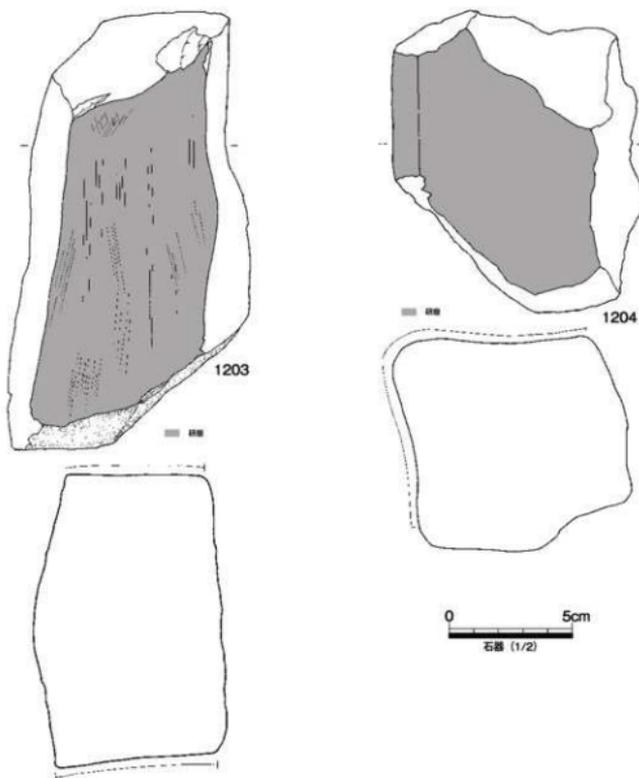


図 162 7-8 区 SX02(15)

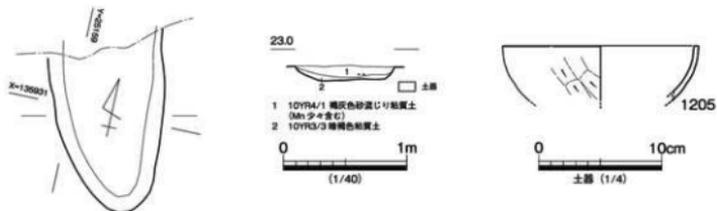


図 163 7-9 区 SK01

いずれも破片の状態出土した。図 149 は土器・須恵器の接合関係を示した図である。この図を見ると、土器・須恵器は土坑内のさまざまな場所で出土したものが接合していることがわかる。1071～1075 は弥生土器、1076～1114 は土師器、1115～1190 は須恵器、1191～1195 は滑石製の白玉、1196～1204 は石器で、1196～1201 はサマカイト製である。1202 は赤色顔料（ベンガラ）が付着する磨石である。側面と中央部には敲打痕がある。多量の遺物が出土したが、これらの遺物の中では須恵器が圧倒的に多い。また、土師器・須恵器ともに甕などの大型品が目立ち、須恵器は歪みのあるものも多い。これらは完全な形状のものではなく、破片が散乱した状態で出土したことから、廃棄物の可能性が高い。当初 SX02 は水溜めとして掘られ、その機能を失ったあと、土器が廃棄され、埋められたのであろう。また、これらの須恵器は陶邑須恵器編年 TK217 型式の中でも新しい様相をもつことから、SX02 の土器廃棄は 7 世紀中葉頃行われたと考えられる。

#### 7-9 区 SK01 (図 163)

7-9 区北部で検出された土坑である。遺構の北部は攪乱によって削平される。平面形はいびつな楕円形で、長軸 1.3 m 以上、短軸 0.9 m である。断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 m である。埋土から少量の土器が出土した。大半は弥生土器であるが、古墳時代後期の土師器甕の体部片が出土していることから、SK01 は古墳時代後期の土坑であると考えられる。

#### 7-9 区 SK02 (図 164)

7-9 区北西部で検出された土坑である。平面形は隅丸方形で、長軸 1.0 m、短軸 0.7～0.8 m、断面形は箱形で、深さ 0.25 m である。土坑の北東隅には土器片が固まった状態で出土した。土器片は整理箱 1 箱程度出土した。これらの土器の中には焼成破裂痕のある土器 (1212・1214・1216・1220) がみられる。土器焼成に失敗し、廃棄されたものであろう。これらの土器は古墳時代前期前半古段階に属することから、SK02 は古墳時代前期前半古段階のもと考えられる。

#### 7-9 区 SK03 (図 165)

7-9 区西部で検出された土坑である。数個の柱穴が重複しており、一部が削平される。平面形は隅丸方形で、長軸 2.3 m、短軸 1.3 m、深さ 0.15 m である。断面形は箱形で、底面は平坦である。遺物は少量の弥生土器片とガラス製の玉 (1222・1223) が出土した。1222 は青色、1223 は灰緑色である。出土土器は破片ばかりであるが、弥生時代後期後半の小さな平底の甕の底部片が含まれていることから、SK03 は弥生時代後期後半のもと考えられる。

#### 7-13 区 SK10 (図 166)

7-13 区北西端で検出された土坑である。8 世紀の掘立柱建物跡 SB07 と重複しており、一部は病院配管設置に伴う掘削によって削平される。土坑 SK14 と重複するが、SK10 のほうが新しい。また、下部には古墳時代の溝 SD19 があるが、SK10・SK14 は SD19 埋没後に掘られている。SK01 は深さ 0.1 m、平面形は円形で、径 2.2 m 前後と推定される。遺物は土師器・須恵器片が少量出土した。SK10 は SK14 よりも新しく、SB07 よりも古いことから、7～8 世紀のもと考えられる。

#### 7-13 区 SK14 (図 166)

7-13 区北西端で検出された遺構である。遺構北部・西部は病院配管設置に伴う掘削によって削平されているため、一部が残存しているにすぎない。奈良時代の掘立柱建物跡 SB07、土坑 SK10 と重複しており、一部が削平される。また、下部には古墳時代の溝 SD19 があるが、SK14 は SD19 埋没後に掘られている。平面形は不明であるが、遺構底面は平坦で、深さ 0.2 m である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器など

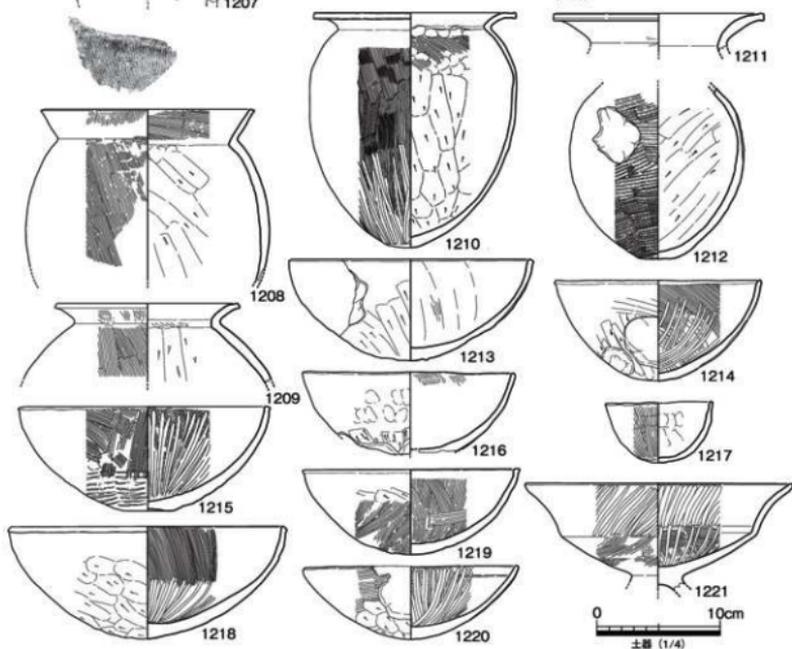
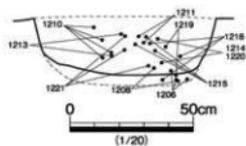
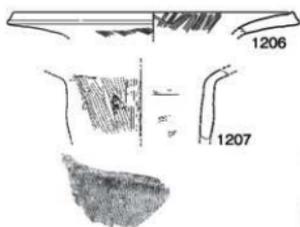
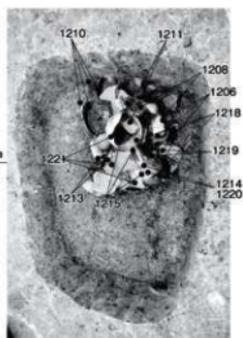
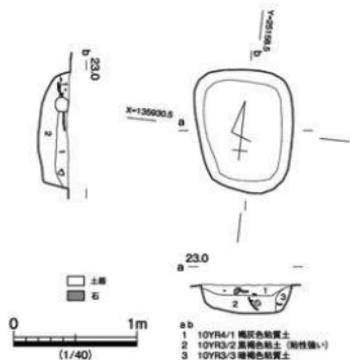


图 164 7-9 区 SK02

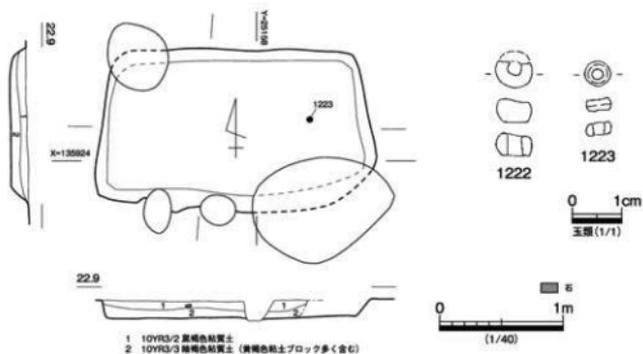


図 165 7-9 区 SK03

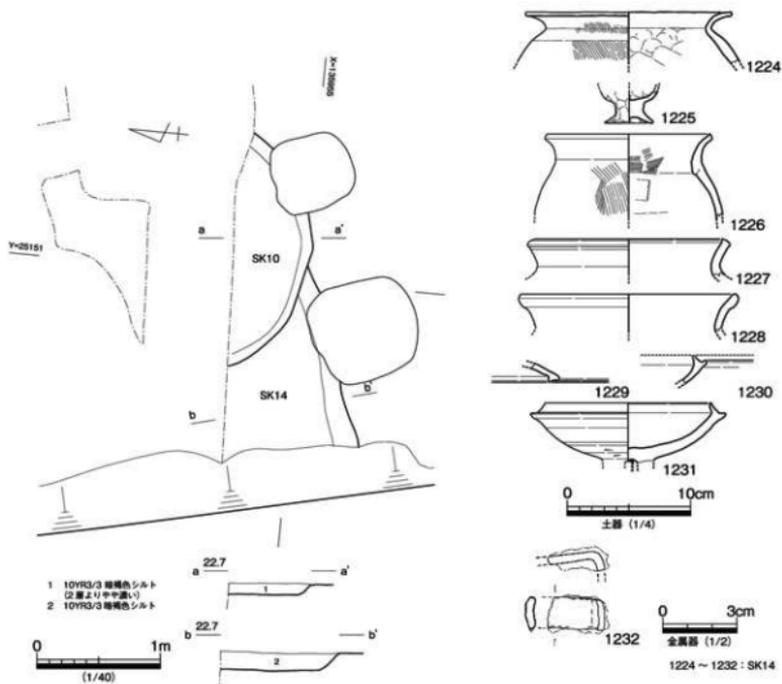


図 166 7-13 区 SK10-7-13 区 SK14

が整理箱半分程度出土した。弥生土器も含まれるが、須恵器は陶邑須恵器編年 TK217 型式に属することから、SK14 は 7 世紀前葉から中葉のものと考えられる。

#### 7-13 区 SK15 (図 167)

7-13 区南部で検出された土坑である。遺構の一部は近代の攪乱や古墳時代後期の溝 SD03 と重複し、削平される。平面形はいびつな方形で、一辺 2.1 m 前後である。断面形は箱形、底面はほぼ平坦で、深さ 0.4 m である。遺物は土器・須恵器などが整理箱半分程度出土した。1233 は弥生土器鉢で、弥生時代終末期に属するが、須恵器が多数出土しており、陶邑須恵器編年 TK209 ~ TK217 型式に属することから、SK15 は 6 世紀末から 7 世紀中葉のものと考えられる。

#### 7-13 区 SK17 (図 168)

7-13 区北部で検出された土坑である。古墳時代後期の溝 SD34・SD08 と重複し、削平されるため平面形は不明であるが、いびつな方形を呈すると推定される。残存部分の長辺は 2.3 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 m である。底面は平坦であるが、壁の立ち上がりがないことから、竪穴建物の一部とは考え難い。遺物は土器・須恵器・石器が整理箱半分程度出土した。須恵器高杯 (1240) は長脚で、古墳時代後期に属する。また、7 世紀の SD08・SD34 よりも古いことから、SK17 は古墳時代後期のものと考えられる。

#### 7-13 区 SK18 (図 169)

7-13 区北部で検出された土坑である。古墳時代後期の土坑 SK17、溝 SD34 と重複し、一部が削平される。平面形は長方形で、長軸 2.0 m、短軸 0.5 m である。断面形は箱形で、深さ 0.4 m 前後である。遺構内の北部では埋土中位から土師器甕 (1242) が出土した。1242 は古墳時代後期に属することから、SK18

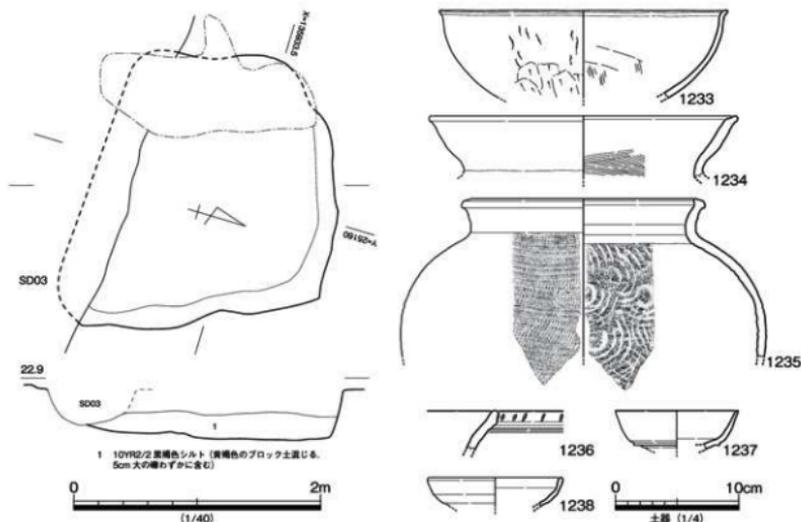


図 167 7-13 区 SK15

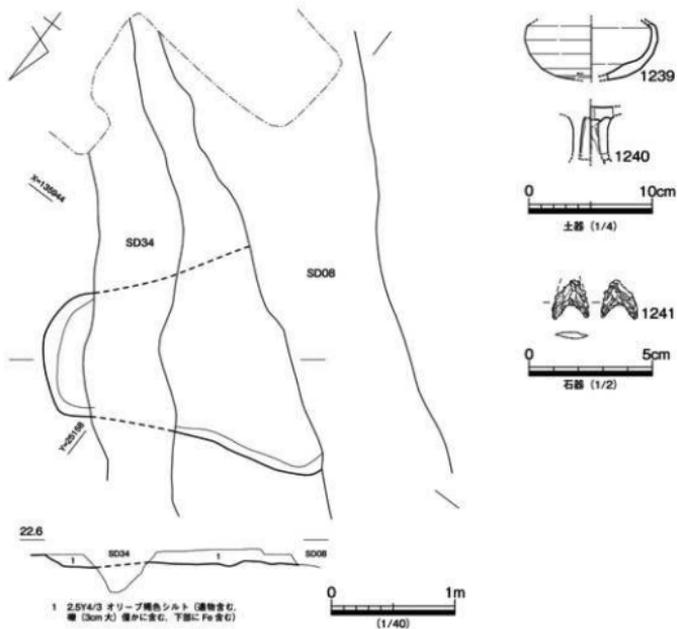


図 168 7-13 区 SK17

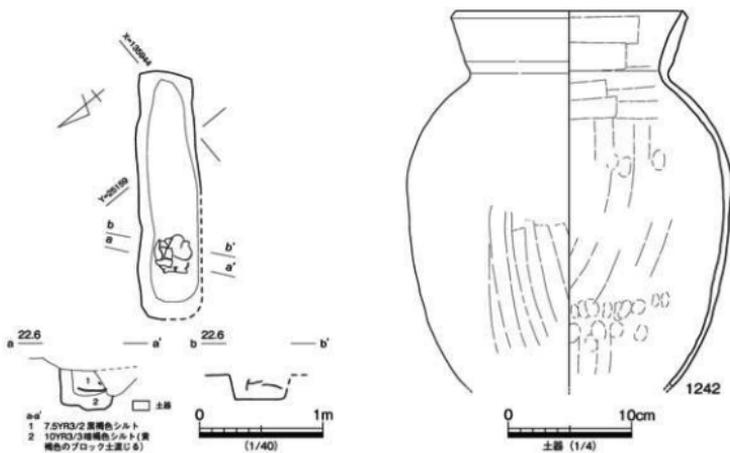
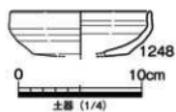
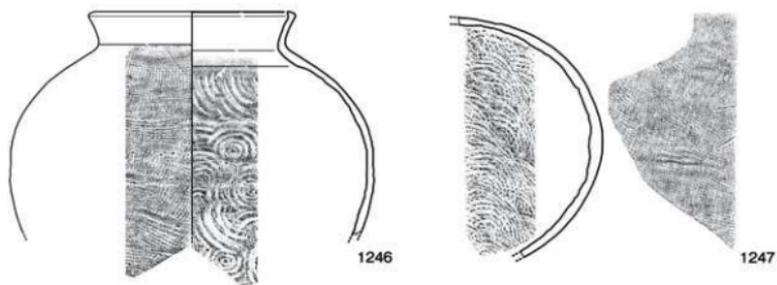
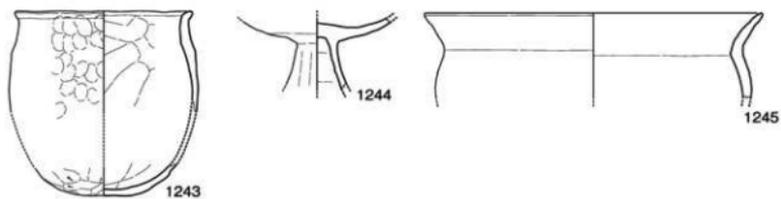
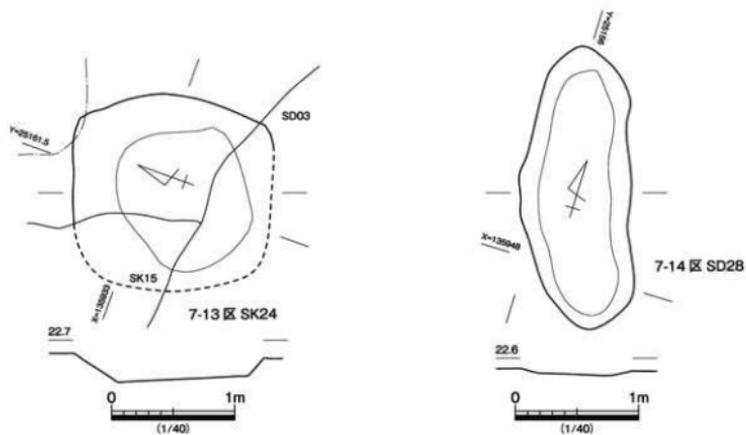


図 169 7-13 区 SK18



1243 ~ 1248 : 7-13区 SK24

図 170 7-13区 SK24・7-14区 SD28

は古墳時代後期のものと考えられる。

#### 7-13区 SK24 (図 170)

7-13区南端で検出された土坑である。古墳時代後期の土坑SK15、古墳時代の溝SD03と重複し、削平される。平面形はややいびつな隅丸方形で、1辺1.6m前後、深さ0.2mである。遺物は土師器・須恵器が整理箱半分程度出土した。須恵器はいずれも陶邑須恵器編年TK217型式に属することから、SK24は7世紀前葉から中葉のものと考えられる。

#### 7-14区 SD28 (図 170)

7-14区南部で検出された遺構である。平面形は楕円形で、長さ2.5m、幅0.9m、深さ0.1mである。出土遺物は少量で、弥生土器・須恵器片が出土した。いずれも細片で、詳細な時期は不明であるが、須恵器が含まれることから古墳時代後期のものと考えられる。

### 5. 井戸

#### 7-7区 SX03 (図 171)

7-7区中央で検出された井戸である。井戸東半分は攪乱のため上部が削平される。平面形は円形で、径1.1m、深さ1.0mである。埋土中位以下の壁には長さ0.1～0.2m、幅0.1m程度の自然石を壁に貼り付いている。本来は上部にも連続しており、石組を形成していたと考えられる。埋土最下位にあたる6層は付近の地山である黄色粘質シルトをブロック状に含むことから、下部は人為的に埋め戻されたと推定される。また、石組を構成する自然石の中からは太型蛤刃石斧(1255)が出土した。1255は片面の刃部と基部を一部欠損し、刃部と基部に敲打痕がある。また、両欠損部の間には赤色顔料(ベンガラ)が付着する。欠損部内の一部にも赤色顔料が付着することから、刃部・基部の欠損後、赤色顔料が付着したことがわかる。石組内の埋土からは土器・須恵器などが整理箱半分程度出土した。1249・1250は石組内の底面から出土した。1249は弥生土器甕、1250は須恵器杯で9世紀後半から10世紀に属する。その他の土器の様相をみると、弥生土器や奈良時代の須恵器もみられるが、9世紀後半から10世紀の須恵器皿(1253)・杯(1252・1254)があることから、SX03は9世紀後半から10世紀のものと考えられる。

#### 7-8区 SE01 (図 172～174)

7-8区南東部で検出された井戸跡である。井戸の内部には自然石による石組がある。石組の内側上端で径1.3m、底面で径0.45m、検出面から底面の深さは3.0mである。石組に使用された自然石は一辺0.2～0.4mの大きさで、大部分は砂岩、その他安山岩・凝灰岩・花崗岩が使用されていた。井戸の掘り方は上端で径2.8m、下端で径1.0m、検出面からの深さは3.0mである。石組内の埋土や石組の外側からは整理箱3箱程度の遺物が出土した。付近には弥生時代から古代の遺構があることから、これらの時期の遺物も多く出土した。井戸の石組内の埋土最下層からは土師器杯(1257)・椀(1258)・羽釜(1259)・土鍋(1260)、木製品底板?(1265)、埋土下位からは須恵器甕(1266)、埋土上位からは中国産青磁碗(1261)、白磁皿(1262)、太型蛤刃石斧(1263)、井戸の石組の外側の井戸掘り方からは須恵器甕(1267)が出土した。埋土最下層から出土した1258は吉備系土師器椀で、14世紀に属する。そのほか、最下層から出土した土師器も13～14世紀、埋土上位から出土した1261は底部のみであるが、釉の発色から14～15世紀のものと考えられる。1260は12世紀のものである。これらの遺物には古墳時代の須恵器も含まれるが、埋土最下層からは14世紀の吉備系土師器椀、埋土上層からは14～15世紀の中国産青磁碗が出土したことから、SE01は14～15世紀に廃絶したものと考えられる。

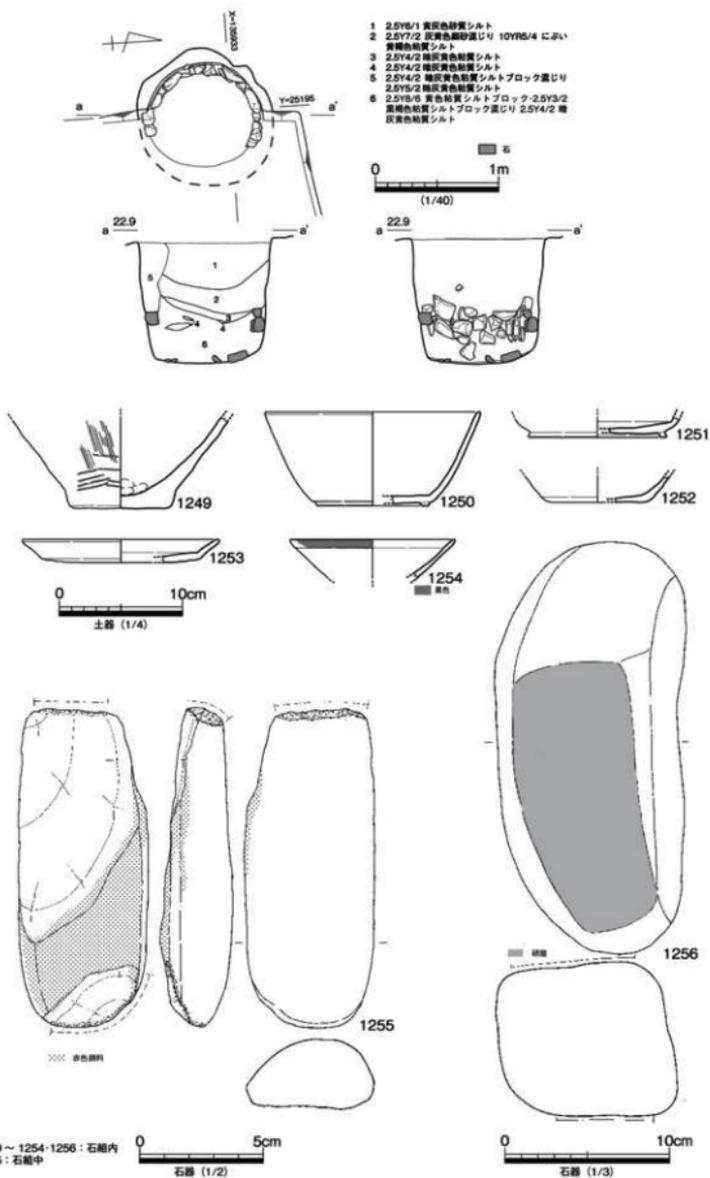


図 171 7-7 区 SX03

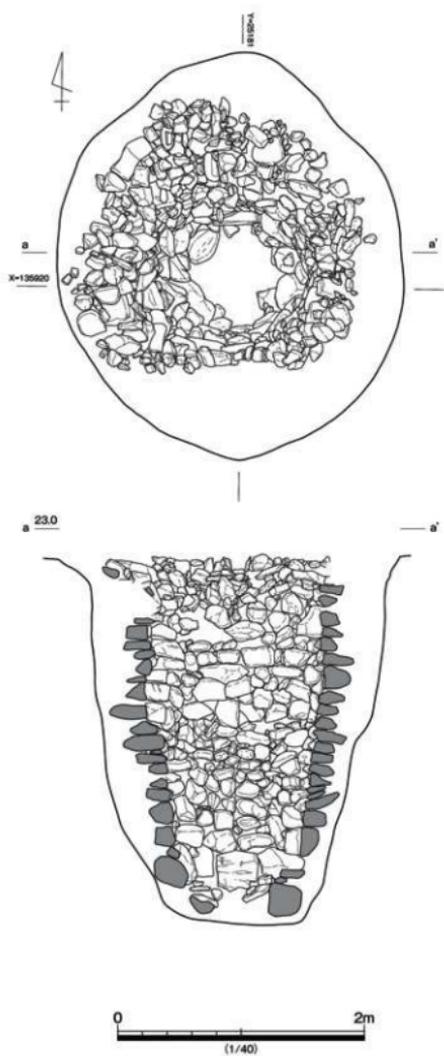


图 172 7-8 区 SE01(1)



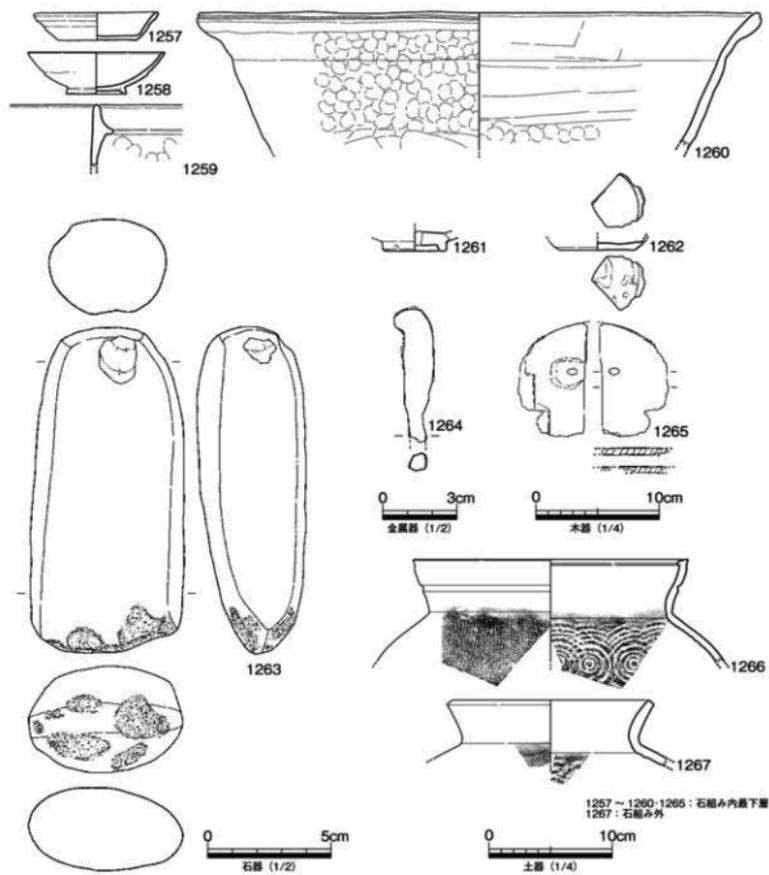


図 174 7-8区 SE01(3)

## 6. 溝

### SD0201 (図 175)

7-2区西部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD01である。南西から北東(N65° E)に向かって走る。途中、攪乱によって削平されるが、検出長8.8 m、幅0.7 m、深さ0.1 mである。遺物は土器・須恵器が少量出土した。1272は須恵器円面硯の脚部である。方形の透かしがある。弥生土器や古墳時代の須恵器が含まれるが、須恵器杯(1270)は8世紀に属することから、SD0201は8世紀のものと考えられる。

### SD0202 (図 175)

7-2区西部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD02である。南西から北東(N25° E)に向かって走る。周辺には中世の掘立柱建物SB14や攪乱があるため、溝の一部が検出されたにすぎない。検出長1.5 m、幅0.25 m、深さ0.05 mである。幅が狭いことから、堅穴建物の壁溝の可能性もある。遺物は小破片が数点出土しただけであるが、須恵器片が含まれることから、古墳時代以降のものと考えられる。

### SD0212 (図 175)

7-2区南部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD12である。古墳時代の堅穴建物SH12と重複し、削平される。検出長1.3 m、幅0.15 m、深さ0.05 mである。溝の平面形は円弧状を呈することから、堅穴建物の壁溝の可能性もある。遺物は弥生土器片が少量出土した。弥生土器壺(1275)は弥生時代後期後半から終末期に属することから、SD0212は弥生時代後期後半から終末期のものと考えられる。

### SD0203 (図 176)

7-2区西部から中央部にかけて検出された溝である。調査時の遺構名はSD03である。南西から北東(N55° E)に向かって走る。一部は攪乱によって削平されているが、検出長6.8 m、幅0.5 m、深さ0.1 mである。遺物は弥生土器・土師器・須恵器片が少量出土しただけであるが、須恵器片が含まれることから、古墳時代以降のものであると考えられる。

### SD0204 (図 176)

7-2区南部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD04である。南東から北西(N30° W)に向かって走る。現存長4.4 m、幅0.2～0.3 m、深さ0.05 mである。遺物は土器片が少量出土した。土師器椀(1273)は12世紀、吉備系土師器椀(1274)は13世紀に属することから、SD0204は13世紀のものと考えられる。

### SD0206 (図 177)

7-2区西部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD06である。L字状に走り、検出長は5.6 m、幅0.15～0.3 m、深さ0.1 mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。SD0207と同方向に走ることから、SD0207とはほぼ同時期で14～15世紀のものと考えられる。

### SD0207 (図 177)

7-2区西部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD07である。SD0206と重複する。SD0206のほうが新しい。SD0206と同様L字状に走る。検出長4.4 m、最大幅0.6 m、深さ0.1 mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。土師器小皿(1277)・杯(1278)は14～15世紀に属することから、SD0207は14～15世紀のものと考えられる。

### SD0208 (図 178)

7-2区南部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD08である。南東から北西(N85° W)に向かう。

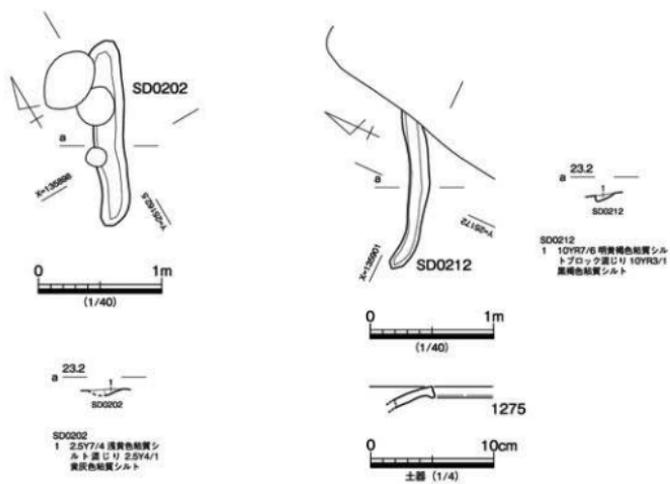
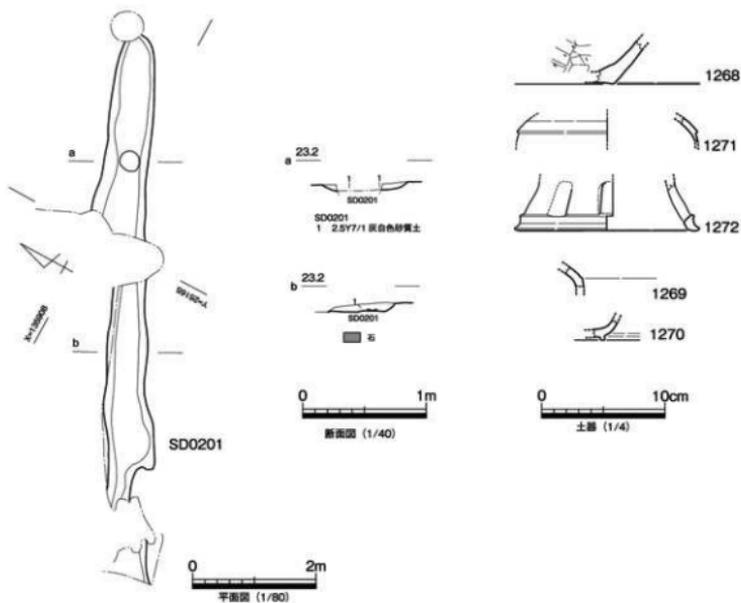


図 175 SD0201・SD0202・SD0212

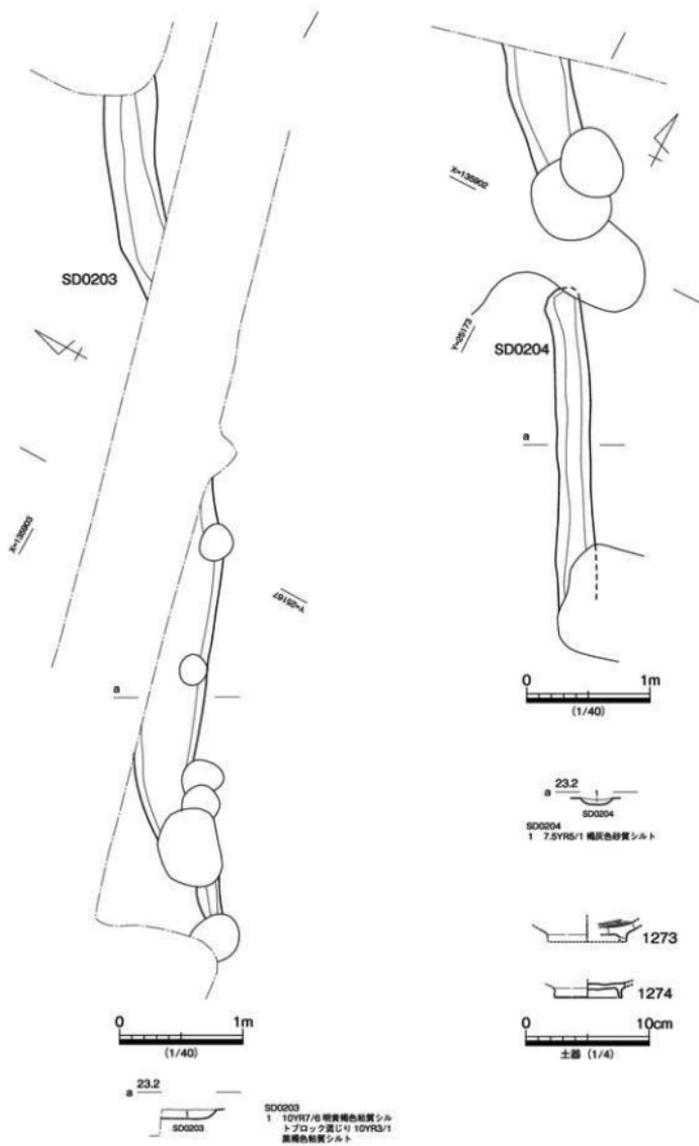


図 176 SD0203・SD0204

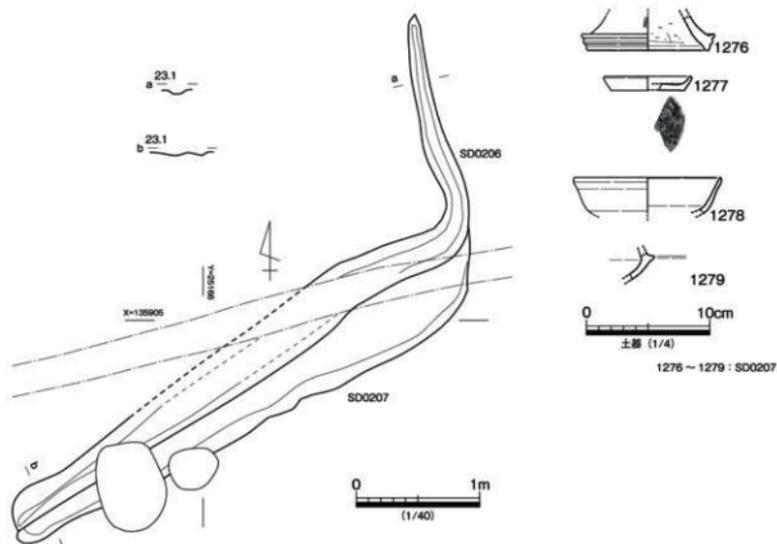


図 177 SD0206・SD0207

現存長 1.6 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 m である。竪穴建物の壁溝の可能性もある。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。須恵器が含まれることから、古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD0213 (図 179)

7-2 区中央部で検出された溝である。調査時の遺構名は SD13 である。南東から北西 (N20° W) に向かって走る。溝の一部は古墳時代の竪穴建物 SH06・SH10、古墳時代の溝 SD0217、古代の溝 SD0215 と重複し、削平される。検出長 11 m、幅 0.3 ~ 0.5 m、断面形は逆三角形または逆台形で、深さ 0.15 ~ 0.2 m である。遺物は土器・須恵器片が整理箱半分程度出土した。北部の溝底からは土師器甕 (1281) が出土した。出土した須恵器は陶邑須恵器編年 TK209 型式から TK217 型式に属することから、SD0213 は 6 世紀後葉から 7 世紀中葉のものと考えられる。

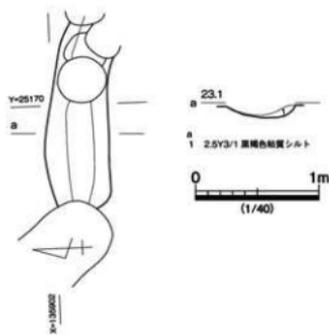


図 178 SD0208

#### SD0214 (図 179)

7-2 区東部で検出された溝である。調査時の遺構名は SD14 である。東から西に向かい、鈍角に北西方向に曲がる。検出長 1.8 m、幅 0.2 m、深さ 0.1 m である。遺物は土器・須恵器片・金属製品などが

少量出土した。1284は銅製品である。図の上部に当たる部分は尖り、下部は2個の突出があるが、先端が欠損する。種類・用途は不明である。出土遺物に奈良時代の須恵器蓋口縁部破片が含まれることから、SD0214は古代のものと考えられる。

#### SD0215 (図 179)

7-2区東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD15である。南から北(M15°W)に向かってほぼまっすぐに走る。検出長3.2m、幅0.2～0.3m、深さ0.1mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。弥生土器や古墳時代後期の須恵器杯もみられるが、奈良時代の須恵器杯(1287)が含まれることから、SD0215は古代のものと考えられる。

#### SD0217 (図 180)

7-2区東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD17である。南西から北東(N35°E)に向かって走る。検出長6.2m、幅0.9～2.0mである。二段掘りで、中央部が深く、深さ0.2～0.5mである。遺物は土器・須恵器・石器・玉類・金属製品が整理箱1箱程度出土した。1308・1309は滑石製の白玉、1311は鉄釘である。出土遺物の中には弥生土器や6～7世紀の須恵器も含むが、奈良時代の土師器杯(1306)・須恵器杯(1304)がみられることから、SD0217は奈良時代のものと考えられる。

#### SD0220 (図 181)

7-2区西部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD20である。古墳時代後期の堅穴建物SH01・SH20と重複し、南部は配管の設置による攪乱で削平される。南西から北東(N30°E)に向かって走る。検出長3.5m、幅1.2m、断面形は浅い皿状で、深さ0.05～0.1mである。遺物は弥生土器が少量出土した。弥生時代中期後半の土器もみられるが、弥生土器鉢(1313)は弥生時代後期に属することから、SD0220は弥生時代後期のものと考えられる。

#### SD0701・SD0702 (図 182)

7-7区西部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD01・SD02である。両溝ともに北部は「旧練兵場遺跡VI」に掲載予定の調査区7-11区・7-10区に連続する。2本の溝は平行して、南北方向(N30°W)に走る。両溝とも幅0.2～0.5m、深さ0.1mで、両溝の間は1.0m、7-7区での検出長は14mである。両溝は平行して直線的に走ることから、両溝間は道の可能性も高い。両溝からは弥生土器・土師器・須恵器の小片が少量出土した。埋土は灰白色砂質シルトである。土色・土質からSD0701・SD0702は中世のものと考えられる。

#### SD0705 (図 183)

7-7区東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD05である。弥生時代終末期の建物跡SH01と重複するが、SH01よりも新しい。SD05はやや蛇行して南から北方向(N10°E～N-S)に走る。北部は建物の基礎により削平されており、不明である。検出長6m、幅1.0～1.4m、最深の深さは0.35mで、溝の南端の掘り込みは急傾斜である。埋土は黒褐色粘質土で砂層の堆積もみられないことから、流路ではなく、区画のために掘られた溝と考えられる。遺物は土器須恵器・石器などが整理箱1箱程度出土した。1317はサヌカイト製、1318は結晶片岩製の石包丁である。須恵器はそう(1316)は古墳時代後期に属することから、SD0705は古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD0709 (図 183)

7-7区北東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD09である。SD0705とはほぼ平行して南北方向(N-S)に走る。北部は「旧練兵場遺跡VI」に掲載予定の調査区7-11区に連続する。7-7区での検出長3.0

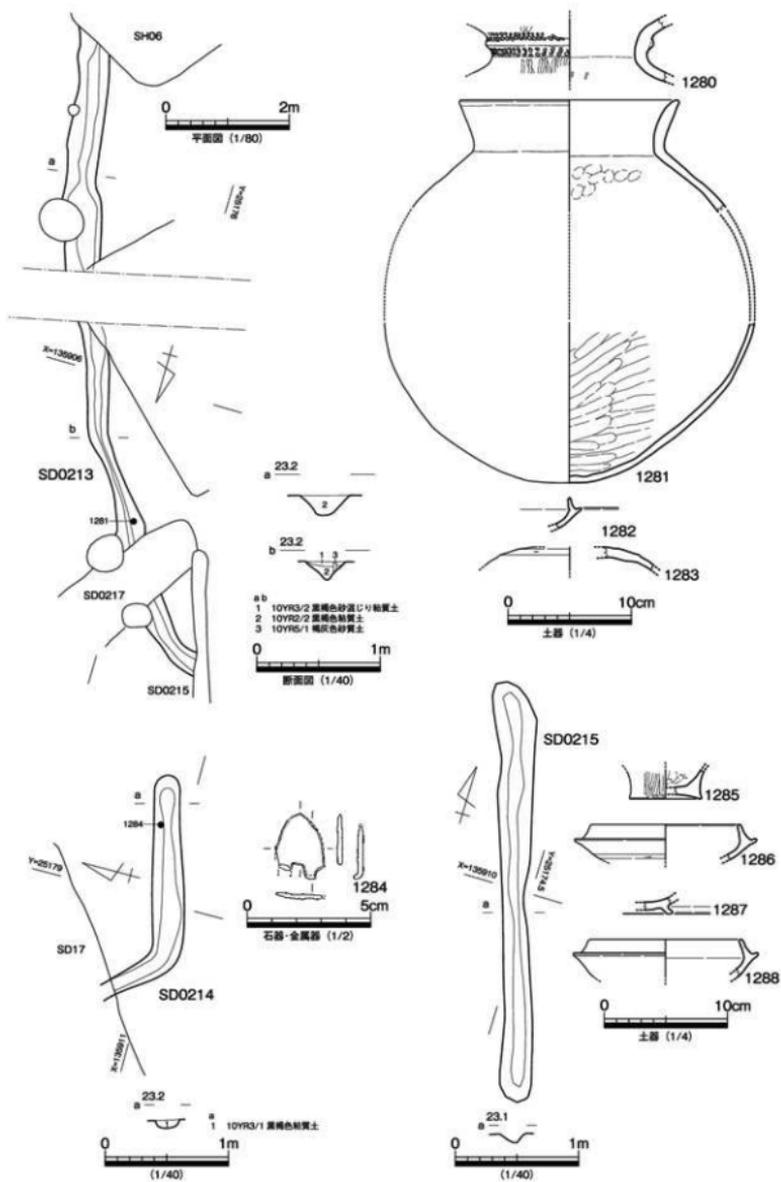


図 179 SD0213・SD0214・SD0215

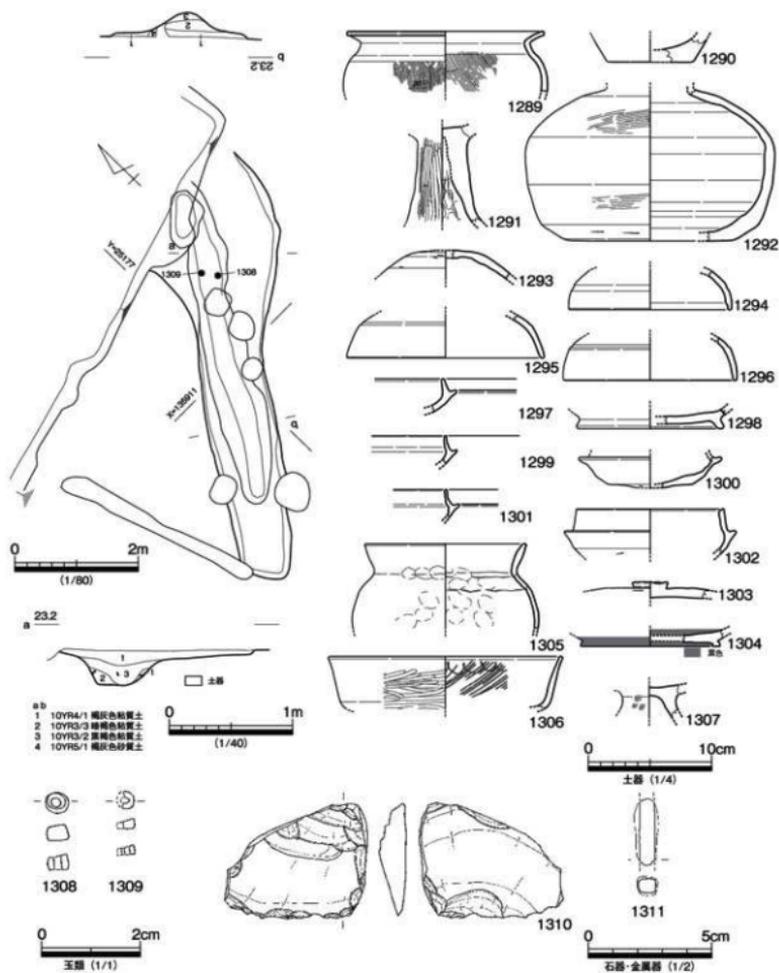


図 180 SD0217

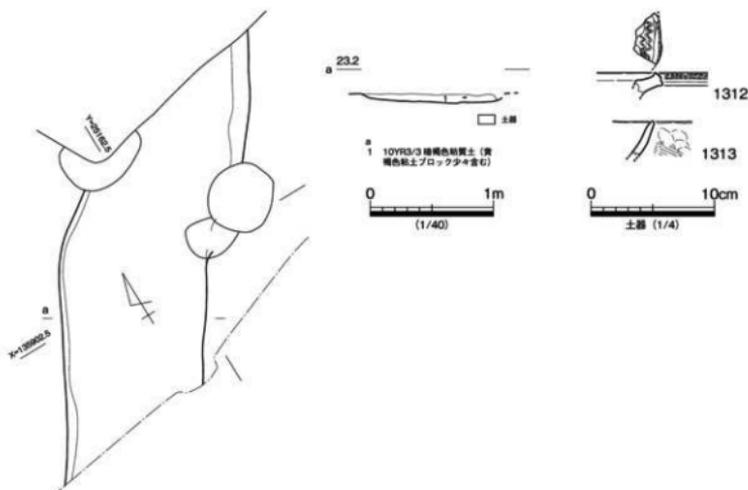


図 181 SD0220

m、幅 0.8 ~ 1.0 m、深さ 0.25 m である。出土遺物は土器・須恵器の小片が少量出土した。SD0705 と平行して走ることから、ほぼ同時期で、古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD0711 (図 184)

7-7 区南部で検出された溝である。調査時の遺構名は SD11 である。南東から北西 (N37° W) に向かって走る。古墳時代から奈良時代の溝 SD0704 と重複する。SD0711 のほうが新しい。SD0711 は幅 0.6 m、深さ 0.1 m である。須恵器片・土師器片が少量出土した。須恵器壺 (1319)・杯 (1320) は奈良時代に属することから、SD0711 は奈良時代のものと考えられる。

#### SD0713 (図 185)

7-7 区東部で検出された溝である。調査時の遺構名は SD13 である。攪乱や古墳時代の土坑 SK08、柱穴 SP209・SP171・SP165 が重複し、一部が削平される。南側を走る SD0715 にはほぼ平行して南東から北西 (N72° W) に向かって走る。両溝の間は 2.0 m である。SD0713 は幅 0.5 ~ 0.6 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m である。須恵器片・土師器片・玉類が少量出土した。1324 は滑石製の白玉である。大部分は弥生土器片であるが、短脚で、端部に丸みを帯びる段をもつ須恵器高杯脚部片が含まれる。この須恵器片は陶邑須恵器編年 MT15 型式に属すると考えられることから、6 世紀前葉のものと考えられる。

#### SD0715 (図 185)

7-7 区南東部で検出された溝である。発掘調査時には SH01 の東部を SD08、西部を SD15 と遺構名を付けたが、調査終了後、両溝は同一遺構と考え、本書では SD0715 として報告する。弥生時代終末期から古墳時代前期前半の竪穴建物 7-7 区 SH01 と重複する。また、南東端では SD06 と重複する。最終埋没は SD0715 のほうが新しい。SD0715 は南東から北西 (N72° W) に向かって走る。幅 0.3 ~ 0.6 m、深さ 0.15 ~ 0.2 m である。遺物は須恵器・土師器・弥生土器片が少量出土した。弥生土器も出土しているが、須恵器小片を含み、SD0713 と平行することから、SD0713 と同様 6 世紀前葉のものと考えられる。

#### SD0716 (図 186)

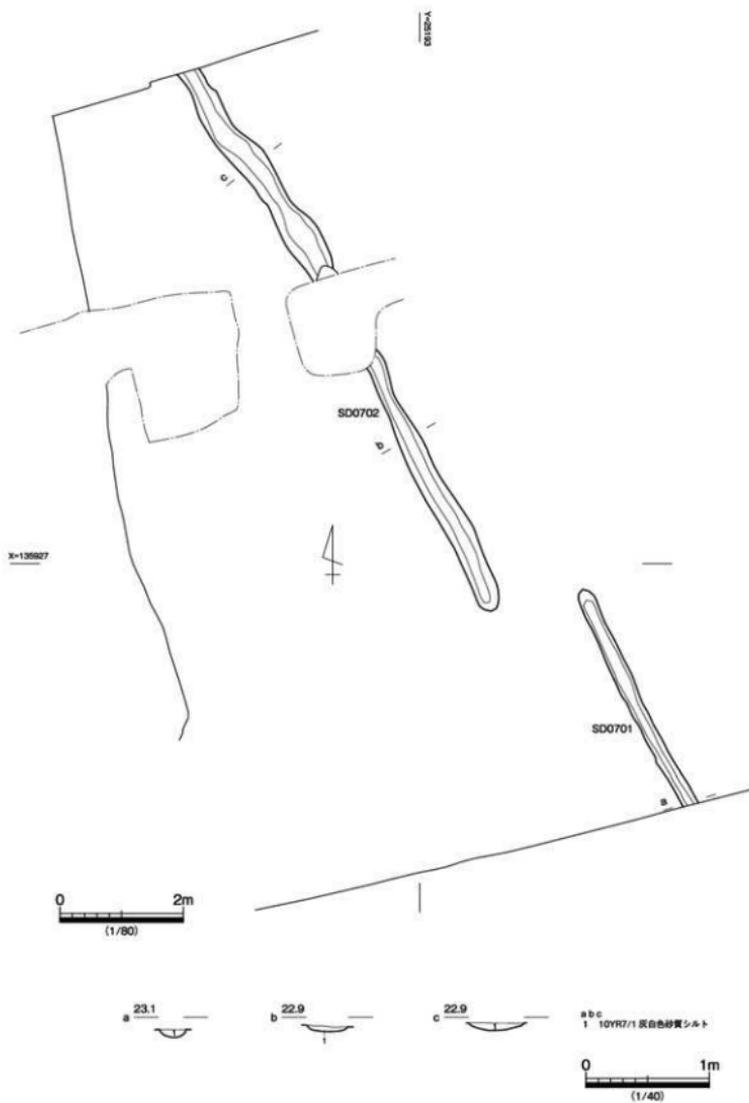


図 182 SD0701・SD0702

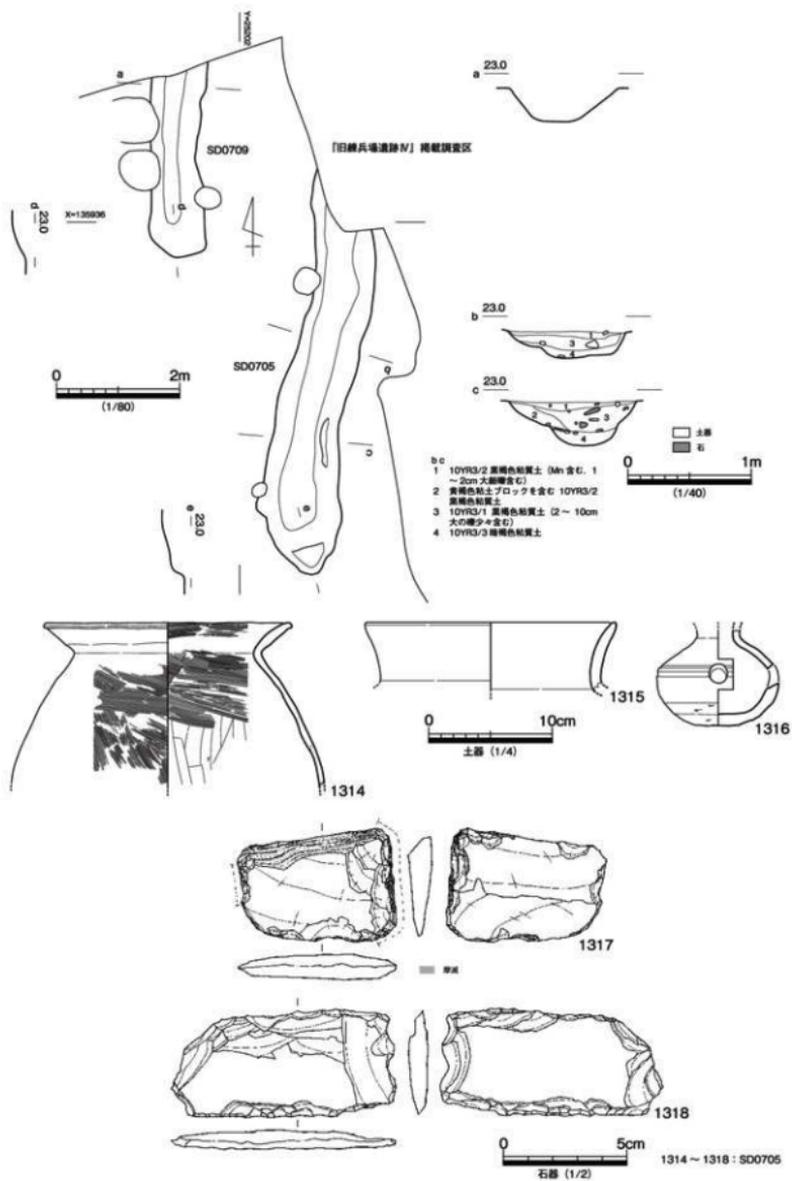


図 183 SD0705・SD0709

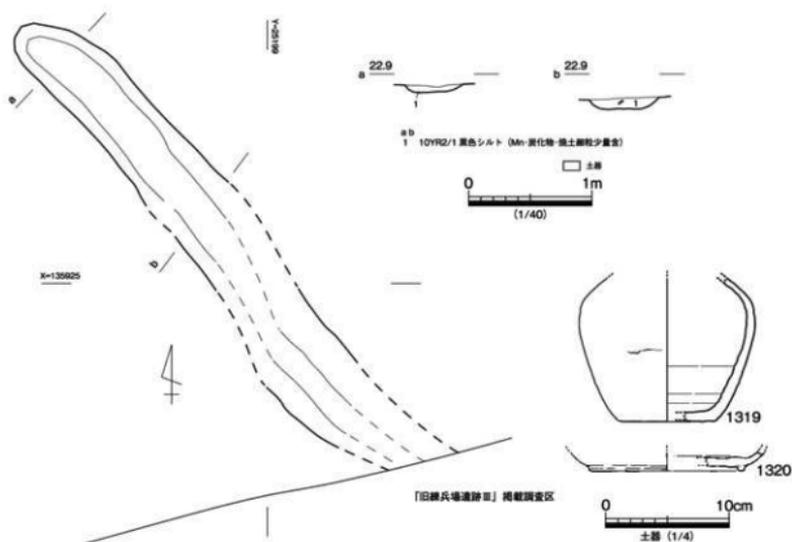


図 184 SD0711

7-7区はほぼ中央で検出された溝である。調査時の遺構名はSD16である。弥生時代終末期から古墳時代前期前半の竪穴建物SH01と重複する。SD0716のほうが新しい。また、古墳時代後期の溝SD06と重複するが、SD06のほうが新しい。SD0716は東西方向(N70°E)に走り、幅0.4m、深さ0.1mである。少量の弥生土器が出土したが、SH01よりも新しく、SD06よりも古いことから、古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD0719 (図 187 ~ 189)

7-7区北西部から7-8区北東部で検出された溝である。SD0719は河川SR01の底面で検出し、調査を行ったが、7-8区と7-7区の境界の土層観察用に残した壁の土層観察を行った結果、河川SR01の埋土中層の上面から掘り込まれた溝であることが確認された。調査時の遺構名は7-7区ではSD19、7-8区ではSR02である。北東から北西方向に円弧状に走る。幅0.9m、深さ0.2mである。埋土はSR01の埋土中層である淡黄色粘質シルトブロックが混じる黄灰粘質シルトである。遺物は弥生土器・石器が整理箱1箱程度出土した。1328は弥生土器鉢である。外面には赤色顔料(ベンガラ)が塗布され、焼成破裂痕がある。これらは弥生時代中期後半新段階に属することから、SD0719は弥生時代中期後半新段階のものと考えられる。

#### SD0720 (図 187 ~ 189)

7-7区北西部から7-8区北東部にかけて検出された溝である。SD0719と同様、河川SR01の中層上面から掘り込まれたものであるが、実際は河川底面で検出し、調査を行った。調査時の遺構名は7-7区ではSD20、7-8区ではSR03である。SD0720はSD0719と平行に北東から北西方向に円弧状に走る。幅0.2～

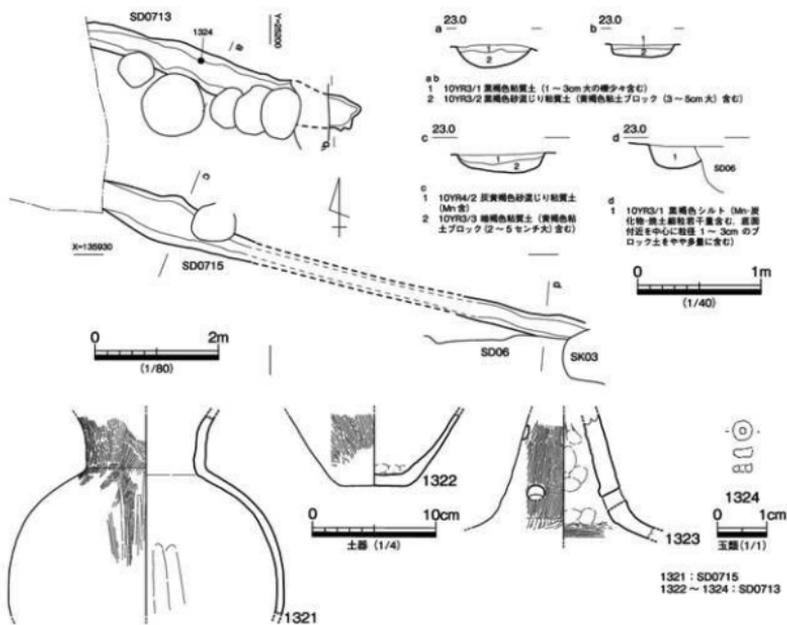


図 185 SD0713-SD0715

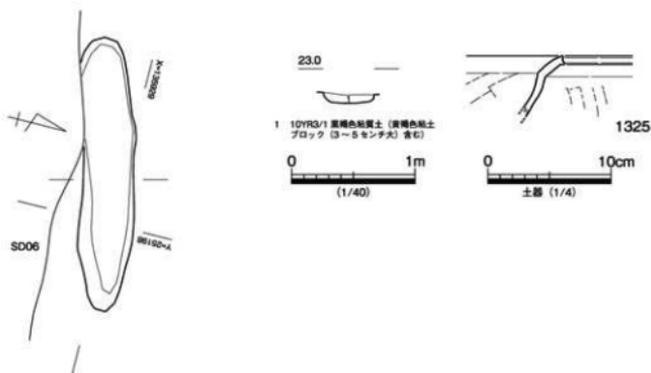


図 186 SD0716

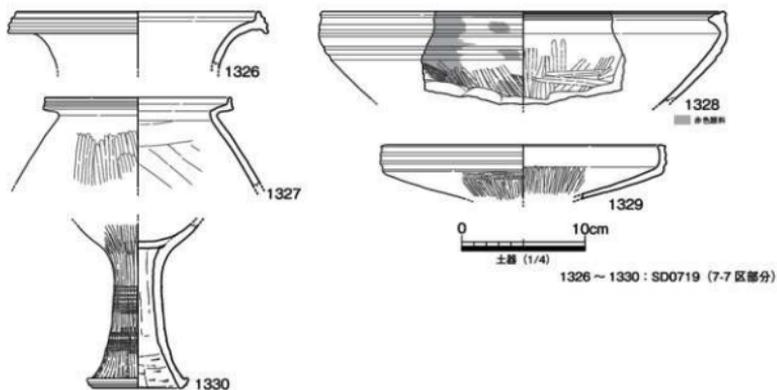
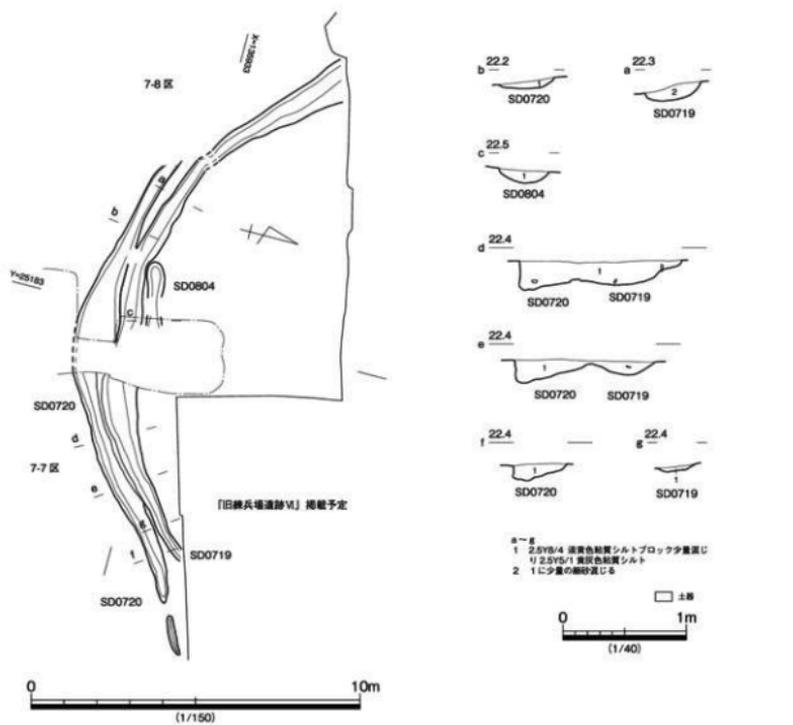


図 187 SD0719・SD0720(1)

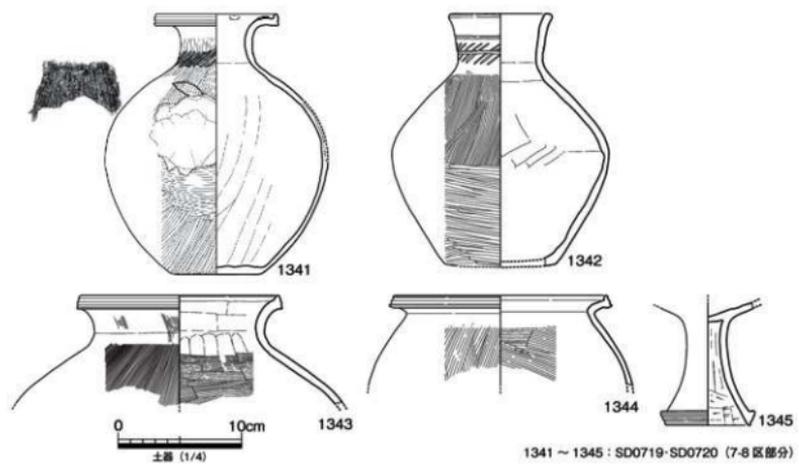
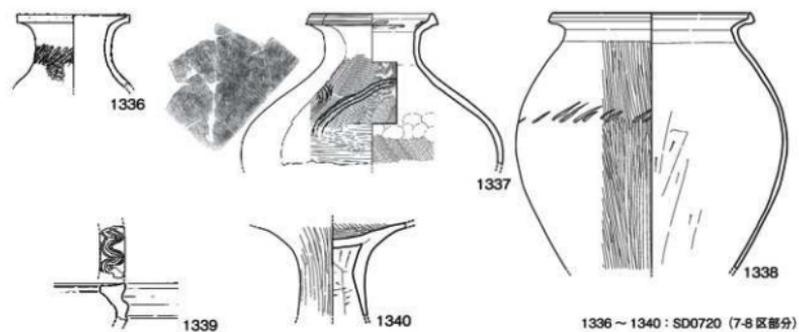
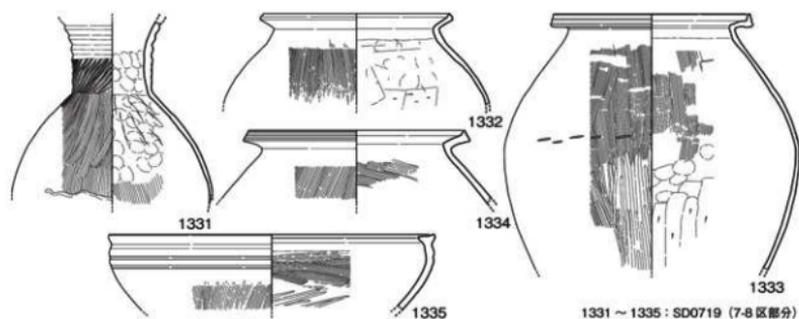


图 188 SD0719-SD0720(2)

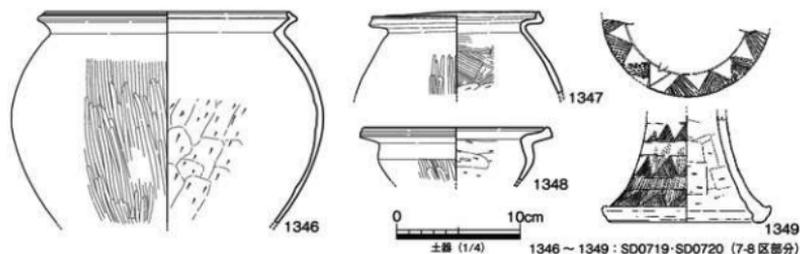


図 189 SD0719・SD0720(3)

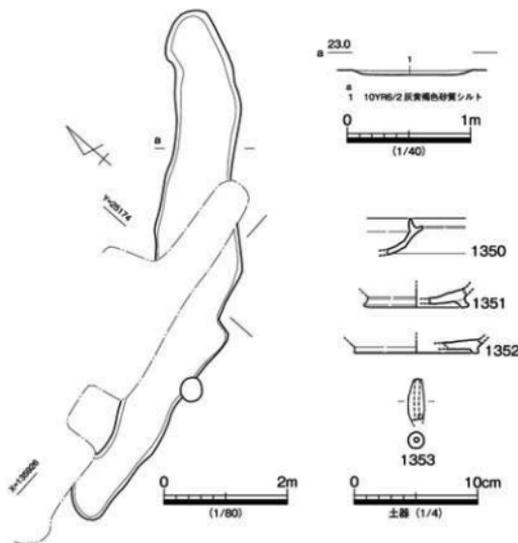


図 190 SD0801

0.6 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m である。埋土は SR01 の埋土中層である淡黄色粘質シルトブロックが混じる黄灰粘質シルトで、SD0719 と非常に類似する。遺物は弥生土器・石器が整理箱 1 箱程度出土した。1337 は弥生土器壺で、体部上半にヘラ挿きによる数条の円弧状の文様がある。SD0720 も SD0719 と同様出土土器は弥生時代中期後半新段階に属することから、SD0720 は同時期のものと考えられる。また、1341 ~ 1349 は 7-8 区部分の SD0719 と SD0720 から出土した土器で、出土遺構の区別ができなかったものである。1341 は焼成破裂痕のある弥生土器壺で、体部上半にヘラ挿きによる木の葉状の文様がある。1349 は高杯の脚部で、連続する鋸歯文が三段以上ある。胎土は旧練兵場遺跡で一般的のものである。在地で作られた可能性が高い。

### SD0801 (図 190)

7-8区中央部で検出された。調査時の遺構名はSD01である。南西から北東(N50～60°E)に向かって走る。幅0.7～1.0m、深さ0.05m、検出長8.4m、断面形は浅い皿状で、埋土は灰黄褐色砂質シルトである。遺物は弥生土器、土錘、古墳時代から奈良時代の須恵器・土器が少量出土したが、埋土の土色や土質からSD0801は中世の溝であると考えられる。

### SD0802 (図 191)

7-8区南東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD02である。SD0802は東西方向(N75°E)に走る。SD0805と重複するが、SD0802のほうが新しい。幅0.3～1.0m、深さ0.05m、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、断面形は浅い皿状を呈する。遺物は土器・須恵器が整理箱1/3程度出土した。1354は土師器杯の口縁部破片で、内外面に赤彩がある。これらの土器は奈良時代のものであるが、埋土の色調や

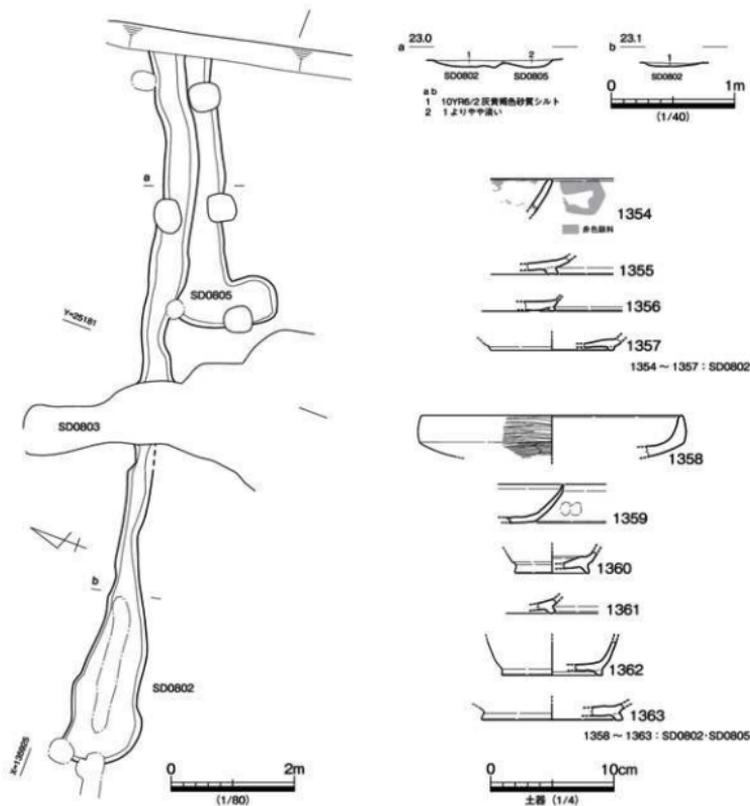


図 191 SD0802・SD0805

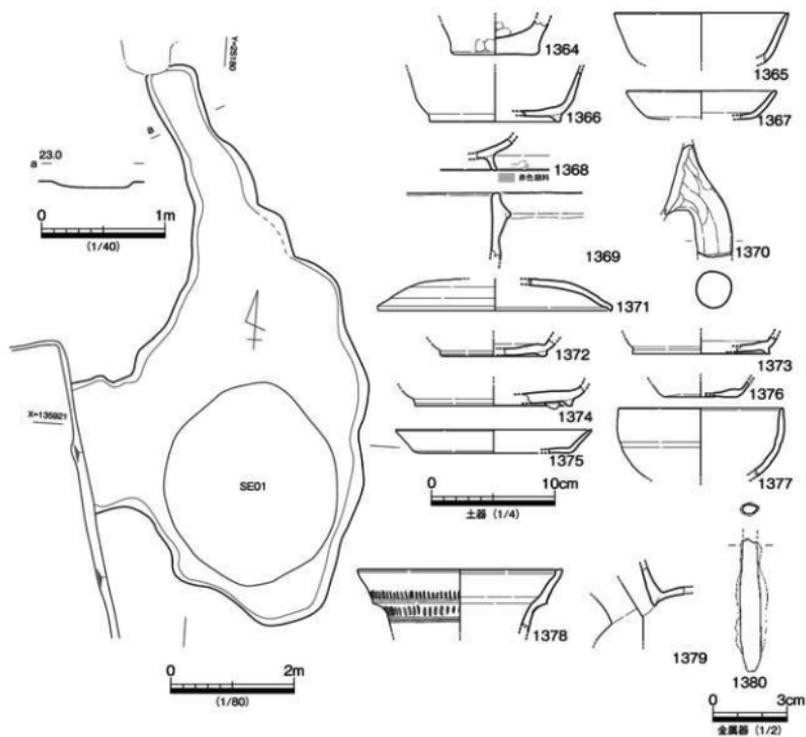


図 192 SD0803

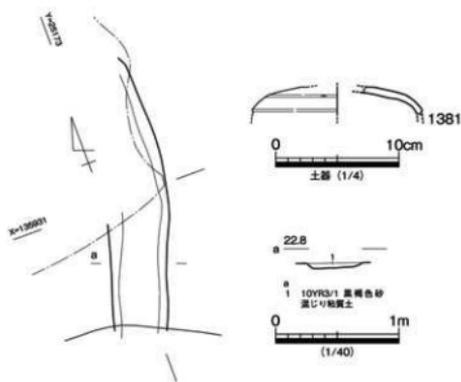


図 193 SD0810

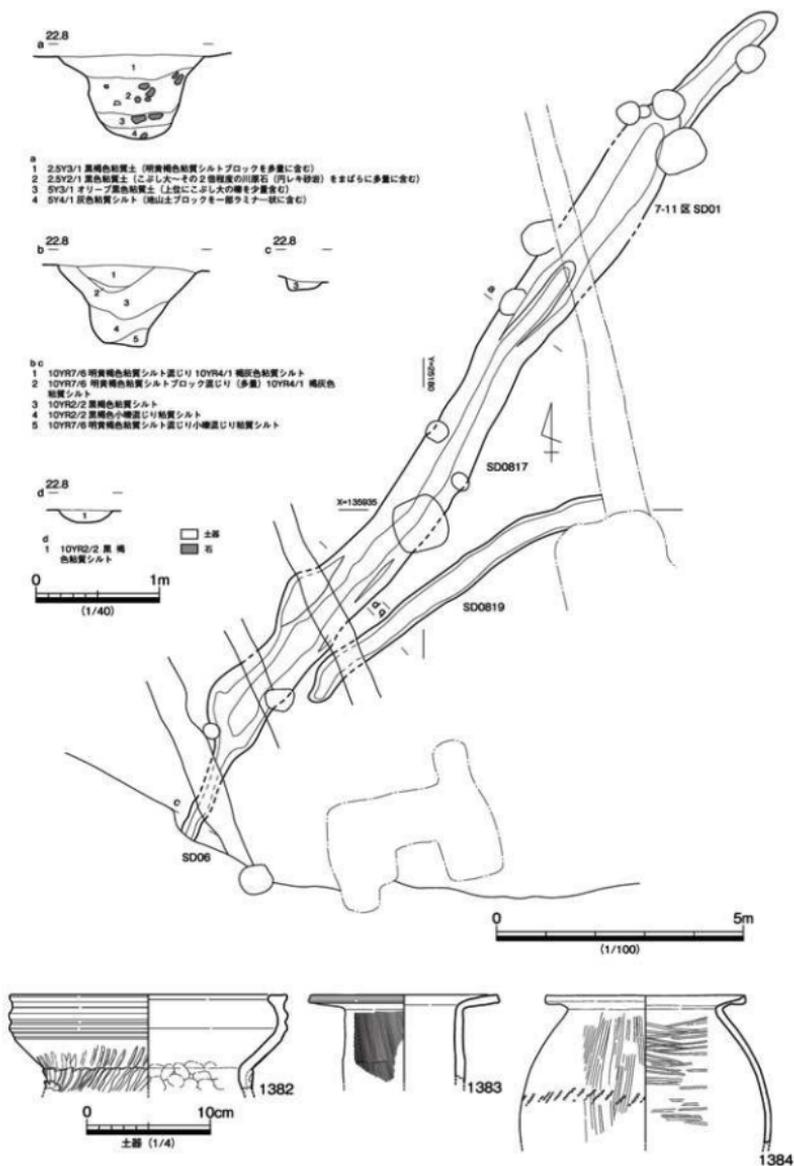


図 194 SD0817・SD0819(1)

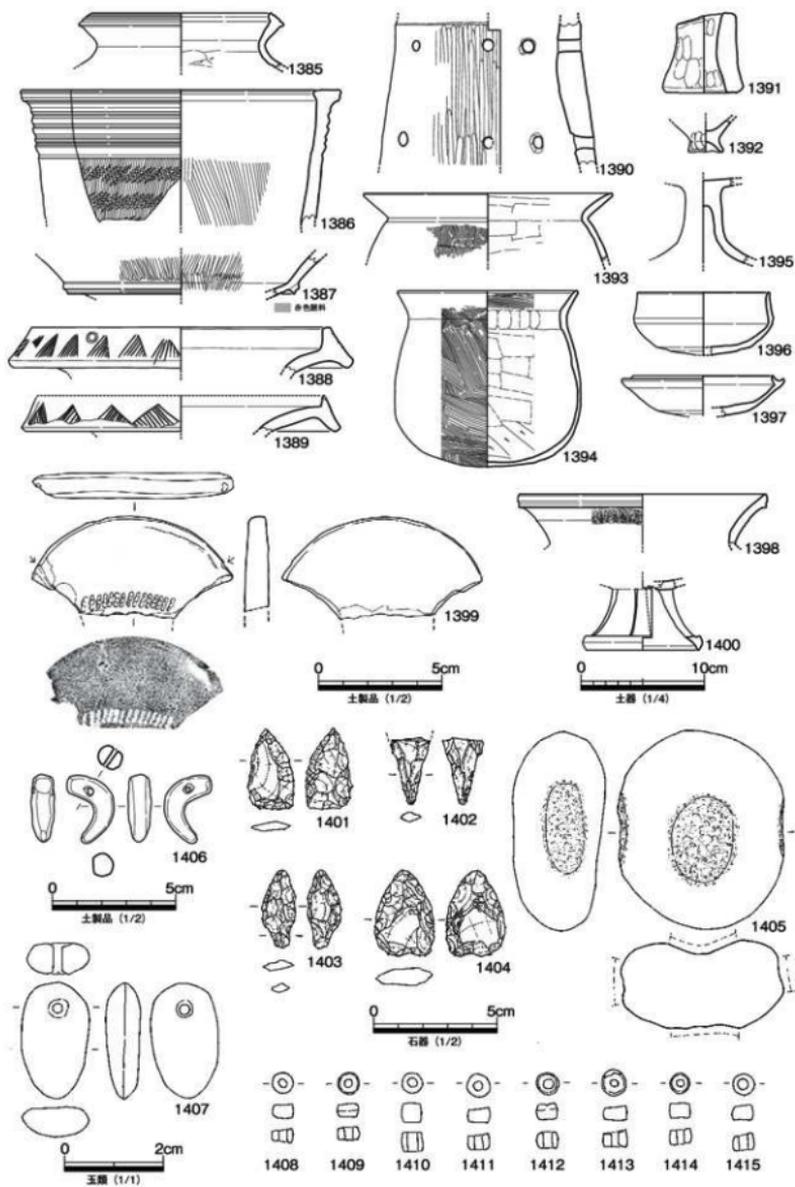


図 195 SD0817-SD0819(2)

土質からSD0802は中世の溝であると考えられる。

#### SD0805 (図 191)

7-8区南東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD05である。SD0802と重複する。SD0805のほうが古い。SD02と平行して東西方向(N75°E)に走る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、断面形は浅い皿状を呈する。遺物は弥生時代から古墳時代の土器が少量出土しただけである。埋土の状況からSD0802と同様中世のものと考えられる。

#### SD0803 (図 192)

7-8区南東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD03である。井戸SE01の周囲を取り囲み、北(N23°W)に向かって走る。SD0802と重複しているが、SD0802よりも新しい。幅0.6～1.0m、深さ0.1mである。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、断面形は浅い皿状を呈する。井戸SE01を取り囲むことから、SE01と同時期に機能したと考えられる。遺物は土器・須恵器・金属製品などが整理箱1箱程度出土した。1368は黒色土器椀である。内面が黒色で、10～11世紀に属する。外面の一部には赤色顔料が付着する。1369は土師器羽釜で14～15世紀に属する。弥生土器や古代の土師器・須恵器を多量に含むが、14～15世紀の遺物もみられ、SE01と同時期に機能したと考えられることから、SD0803は14～15世紀のものと考えられる。

#### SD0810 (図 193)

7-8区北部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD10である。南西から北東(N8～20°E)に向かって走る。南部はSD06と重複する。最終埋没はSD06のほうが新しいが、同時に機能していた可能性がある。SD0810は幅0.4m、深さ0.05mで、断面形は皿状である。遺物は須恵器片・土師器片が少量出土した。周辺の溝SD0817・SD0819と同じ古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD0817 (図 194～196)

7-8区北東部から7-11区西部で検出された溝である。調査時の遺構名は7-8区ではSD17、7-11区ではSD01である。南西から北東(N37°E)に向かって走る。溝の南端はSD06と重複する。最終埋没はSD06のほうが新しい。南端は幅0.3m、深さ0.1mと幅狭で浅く、底面の標高は22.45mである。北東に向かってうにしがたがって、幅広になり、溝の中央部では幅1.1m、深さ0.65m、底面の標高は21.9～22.0mとなる。南端よりも0.5m低い。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器・金属製品などが整理箱3箱程度出土した。1406は土製勾玉である。1408～1415は滑石製白玉、1407は楕円形の扁平な玉で、上部に円孔がある。蛇紋岩製である。1416は鉄製品である。長さ6.3cmであるが、厚さが0.4cmと薄いことから、刃子の可能性が高い。この付近には下部に弥生時代の河川跡SR01があるため、弥生土器が多量に混入している。また、須恵器は陶色須恵器編年TK47～MT15型式の甕(1398)・高杯(1400)も含むが、TK217型式の杯(1397)がみられることから、SD0817は7世紀前葉から中葉に埋没したと考えられる。

#### SD0819 (図 194～196)

7-8区北東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD19である。SD0817の南側を南西から北東(N55°E)に向かって走る。幅0.4～0.5m、深さ0.1mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。1421はふいごの羽口である。弥生土器も出土したが、古墳時代後期の土師器甕(1420)が出土したことから、SD0819は古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD0820 (図 197)

7-8区北東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD20である。SD0819と重複するが、SD0820

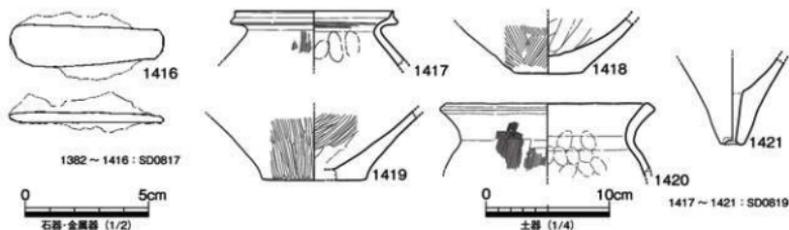


図 196 SD0817・SD0819(3)

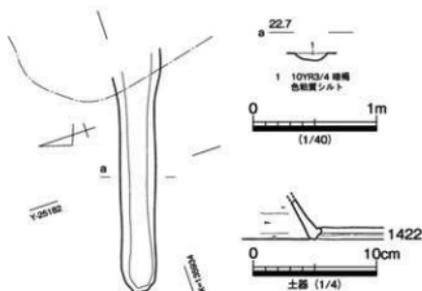


図 197 SD0820

のほうが古い。南東から北西 (N75° W) に向かって走る。幅 0.3 m、深さ 0.1 m で、断面形は浅い皿状である。遺物は弥生時代中期後半の高杯脚部 (1422) のほか土器小片が少量出土した。南方 2 m に位置する溝 SD0720・SD0719 とほぼ同方向に走る。これらの溝は弥生時代中期後半から後期初頭のものであることから、SD0820 は弥生時代中期後半から後期初頭の溝と考えられる。

#### SD0808・SD0809・SD0818 (図 198)

7-8 区北部で検出された溝である。調査時の遺構名は SD08・SD09・SD18 である。3 本の溝は南東から北西 (N25° W) に向かってほぼ平行に走る。いずれも幅 0.4 ~ 0.6 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m である。各溝の間は 1.2 ~ 1.3 m である。これらの溝は付近の条里の方向にほぼ平行に走ることから、田畑の耕作に伴う溝と考えられる。遺物は土器・須恵器・石器・金属製品・玉類が整理箱半分程度出土した。1434 は SD0809 から出土した鉄釘、1435 は SD0809 から出土したガラス製の管玉で、青色である。1439 は SD0818 から出土した銅鍍である。茎部やかえりを欠損し、鍍部は反る。これらの出土物の中には弥生土器や 8 ~ 9 世紀の須恵器も含まれるが、溝の方向が付近の条里地割りに平行することや溝の埋土が灰色砂質シルトであることから、SD0808・SD0809・SD0818 は中世のものである可能性が高い。

#### SD1302 (図 199)

7-13 区西端で検出された溝である。調査時の遺構名は SD02 である。南西から北東 (N40° E) に向かって走る。検出長は 6 m、幅 0.55 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 m である。遺物は須恵器壳体部片、

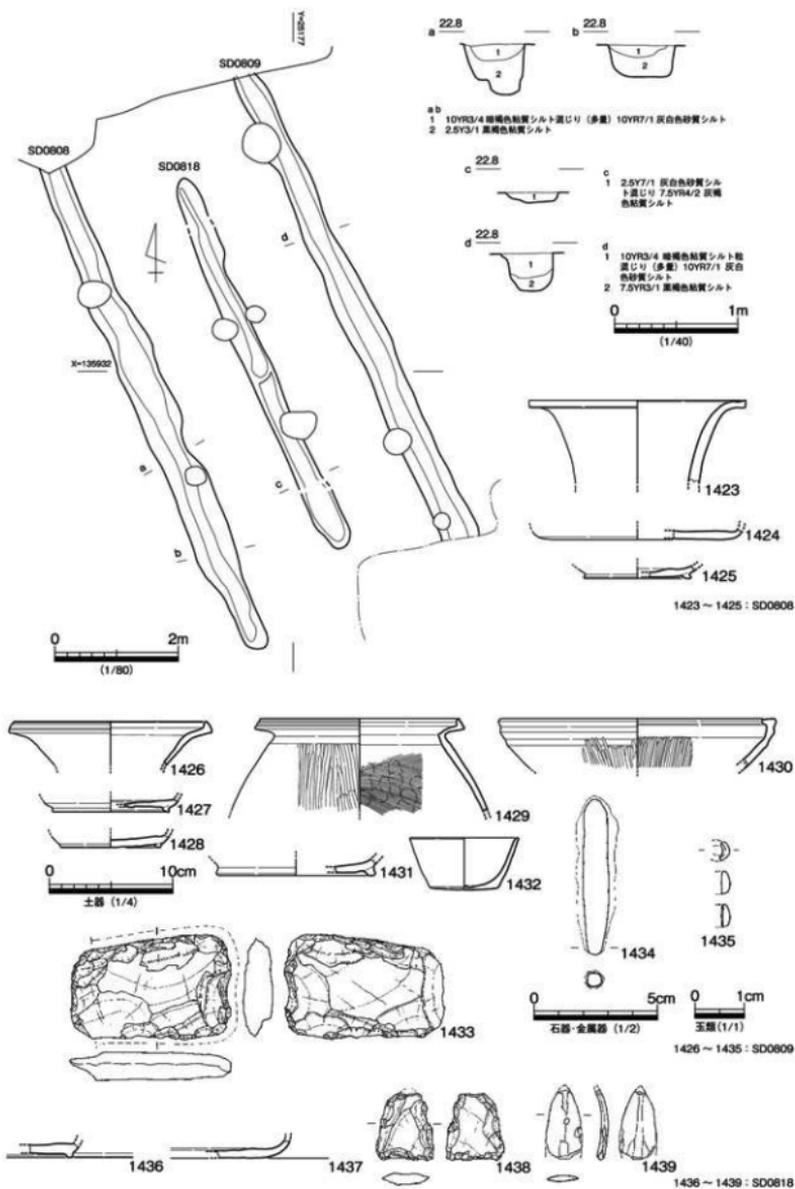


図 198 SD0808・SD0809・SD0818

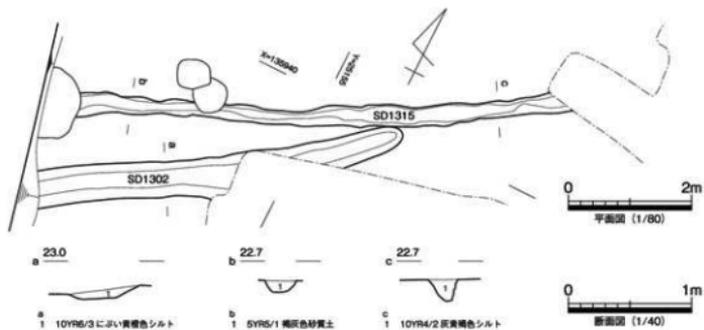


図 199 SD1302・SD1315

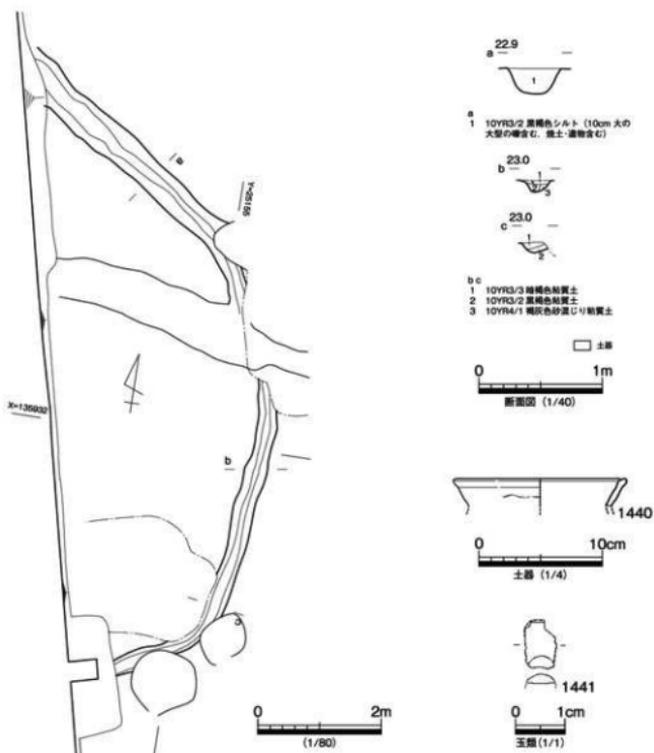


図 200 SD1304

土器片が数点出土した。埋土の色調や土質から、中世のものと考えられる。

#### SD1315 (図 199)

7-13区西部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD15である。SD1302の1m北をほぼ平行に北東方向(N60°E)に走る。検出長は8m、幅0.2～0.3mである。断面形は逆台形またはU字形で、深さは0.1～0.2mである。8世紀の須恵器杯の小破片などや土器片が出土したが、12～13世紀の掘立柱建物跡SB07とほぼ平行することや埋土の色調・土質から、SD1315は中世のものと考えられる。

#### SD1304 (図 200)

7-9区北西部から7-13区南西部で検出された溝である。調査時の遺構名は7-9区SD01・7-13区SD04である。南西から北へ向かい、その後北西方向に向かって円弧を描くように走る。途中で南東から北西方向に走る古墳時代後期のSD03と重複する。土層の堆積状況からSD1304のほうが古いことがうかがわれる。SD1304は検出長10m、幅0.3m、深さ0.2mである。遺物は土器・須恵器片・玉類が少量出土した。1441は碧玉製の管玉である。1/4程度が残存しているにすぎない。1440は土器甕で、古墳時代後期に属する。そのほか、端部に段をもつ須恵器蓋片や、やや立ち上がり長い須恵器杯片が含まれる。これらは陶邑須恵器編年TK10型式に属すると考えられることから、SD1304は6世紀中葉のものと考えられる。

#### SD1410 (図 201・202)

7-14区で検出された溝である。調査時の遺構名はSD10である。7-12区から連続しており、東から西(N80°W)に向かって走り、途中で直角に曲がり、北方向(NS)に走り、調査区外に連続する。7-14区北壁付近では奈良時代に埋没する溝SD34と重複する。最終埋没はSD34のほうが新しい。また、東部では溝SD1438と重複し、一部が削平される。SD1438のほうが新しい。SD1410は幅0.8～1.2m、深さ0.3～0.4mである。遺物は弥生土器・土器・須恵器・石器が整理用箱1箱程度出土した。1444は茶褐色で、体部は玉ねぎ形で、最大径部分に2条の突帯を貼り付ける。形態や胎土から吉備地方からの搬入品と考えられる。1449は器種不明であるが、外面にはヘラ描きによる円弧状の文様がみられる。これらの弥生土器のほか須恵器杯(1450・1451)が出土した。1450・1451は陶邑須恵器編年MT15型式に属するもので、6世紀前葉ごろのものである。SD1410は奈良時代に最終埋没するSD34より新しいが、奈良時代のものである可能性が高い。なお、SD1410は北接する第29次調査調査区や東接する7-12区に連続しているが、これらの調査区は未整理である。今後第29次調査の整理をすすめ、SD1410の時期を再検討し、改めて報告する予定である

#### SD1427 (図 203)

7-14区西部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD27である。北部は攪乱によって削平される。中央付近ではSD1426と重複し、削平される。SD1427のほうが古い。SD1427は南西から北東(N22°E)に向かって走り、検出長3.3m、幅0.2～0.3m、深さ0.05mである。出土遺物は少量である。弥生土器片も含むが、須恵器甕体部片が出土していることから古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD1429 (図 203)

7-14区東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD29である。南東から北西(N60°W)に向かって走る溝である。検出長5.7m、幅0.4m、深さ0.05～0.1mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。弥生土器片が大半を占めるが、須恵器片が出土していることから、古墳時代後期のものと考えられる。

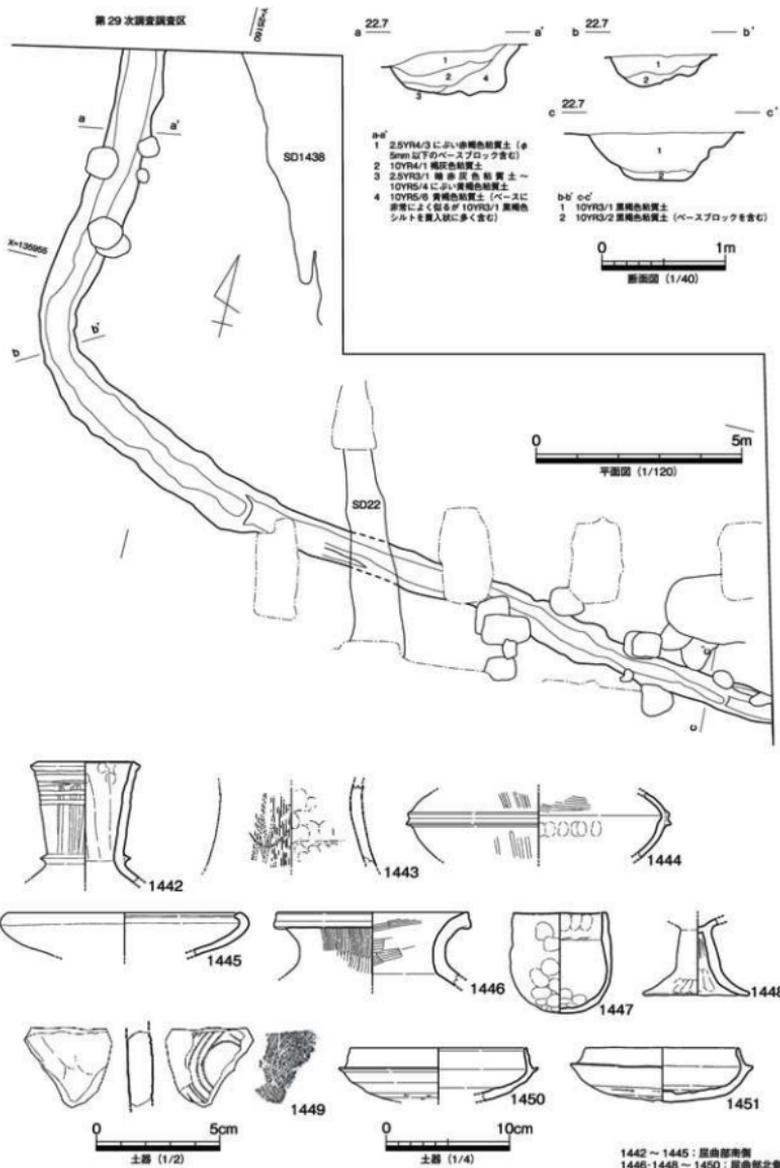


図201 SD1410(1)

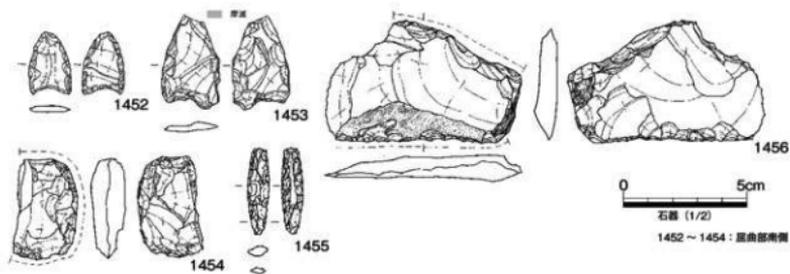


図 202 SD1410(2)

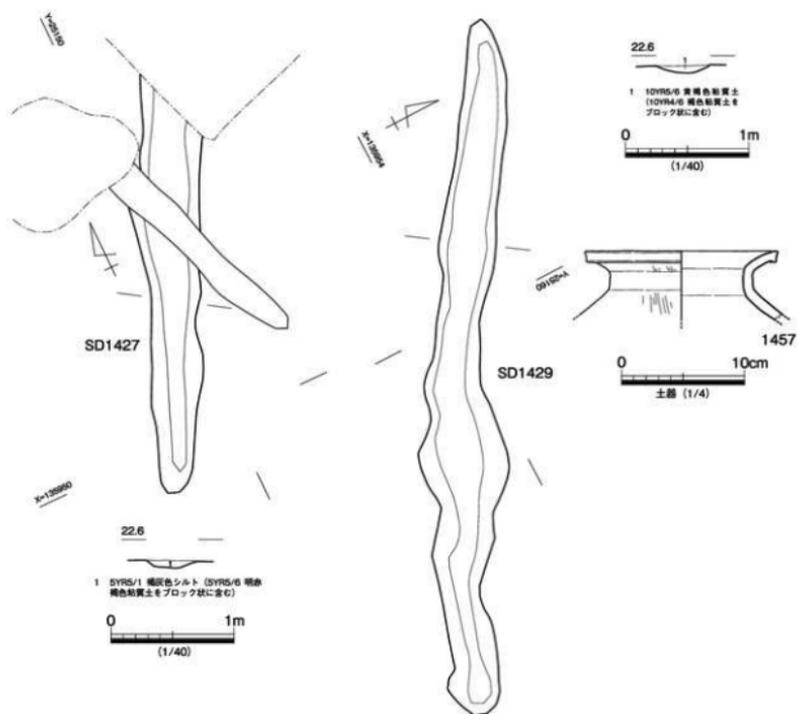
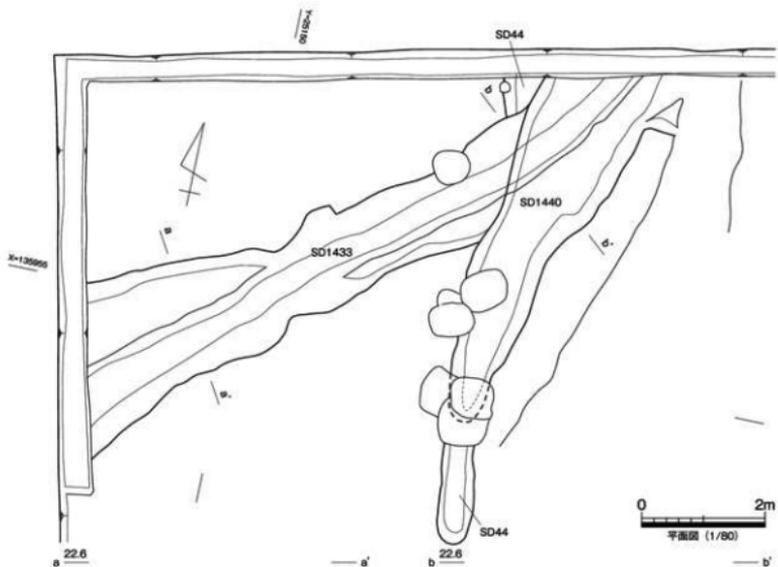


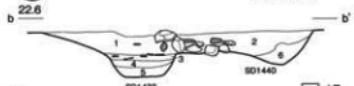
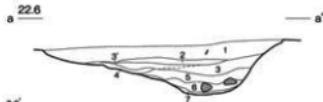
図 203 SD1427・SD1429



22.6

22.6

0 2m  
平面図 (1/80)



a-a'

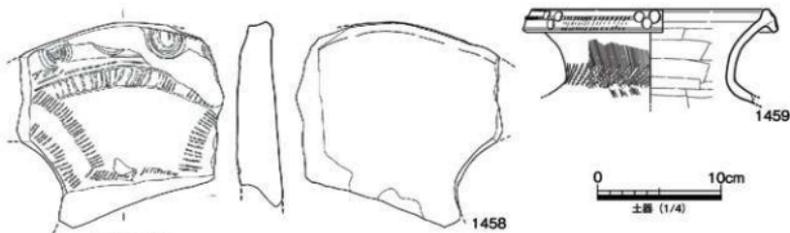
b-b'

- 1 10YR4/1 褐色シルト (Fe 粒を多く含む)
- 2 10YR6/6 明黄褐色細砂~中砂 (非常に硬くしめる。土器片特に顕著な破片 Fe-Mn を多く含む)
- 3 10YR5/2 灰黄褐色細土
- 3' 10YR5/6 明黄褐色細砂~中砂
- 4 10YR5/1 明黄褐色シルト (SPD1 下層をブロック状に含む。硬くしめる)
- 5 10YR5/1 褐色細砂
- 6 10YR2/2 灰褐色細質土
- 7 10YR6/1 褐色細砂 (硬くしめる)

- 1 10YR4/1 褐色シルト (Fe 粒を多く含む)
- 2 10YR5/1 褐色シルト (Fe 粒を多く含む)
- 3 10YR5/2 灰黄褐色細質土
- 4 10YR6/6 明黄褐色細砂~中砂
- 5 10YR5/1 褐色細砂 (硬くしめる)
- 6 10YR4/1 褐色シルト (ベースブロックを互層状に含む)

土器  
瓦

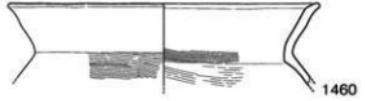
0 1m  
断面図 (1/40)



0 10cm  
土器 (1/4)



0 5cm  
土製品 (1/2)



1458 ~ 1460 : SD1433

図 204 SD1433-SD1440(1)

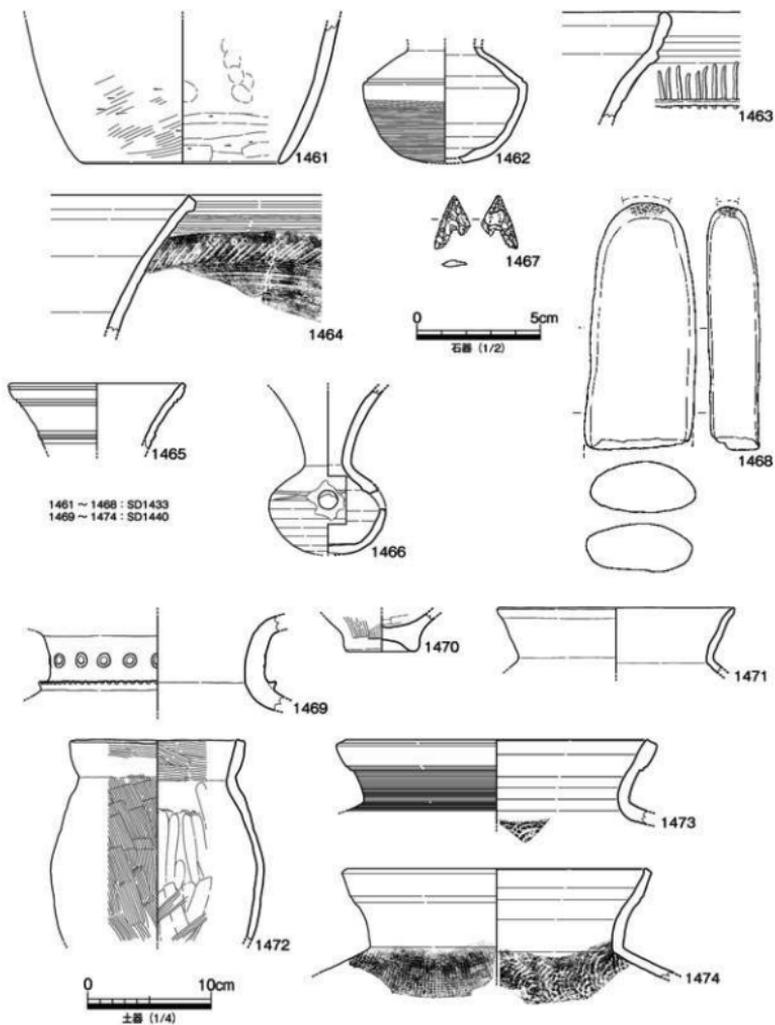


図 205 SD1433-SD1440(2)

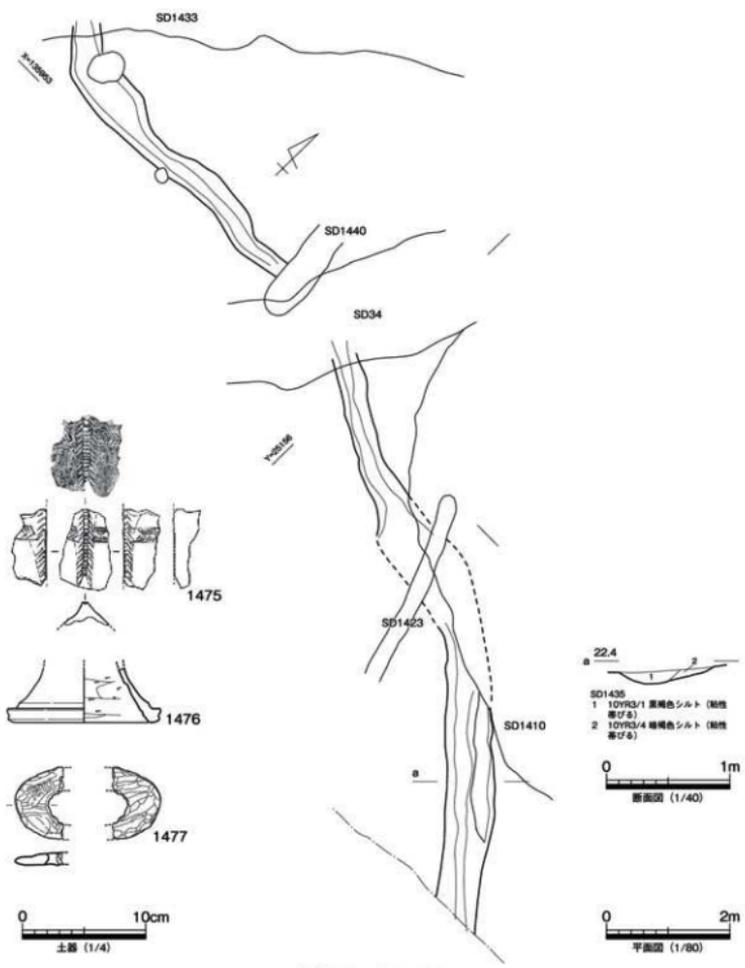


図 206 SD1435

### SD1433 (図 204・205)

7-14 区北西部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD33である。南西から北東 (N50° E) に向かって走る。中世の溝 SX09・SD1425・SD1424、中世の掘立柱建物 SB14 (『旧練兵場遺跡VI』掲載予定) と重複し、削平される。これらの遺構よりも SD1433 のほうが古い。SD1433 は検出長 10 m、幅 1.1 ~ 1.5 m、深さ 0.4 m である。途中で、南北に流れる溝 SD1440 と合流するが、最終的には SD1440 のほうがあとで埋没する。遺物は土器・須恵器が整理箱 7 箱程度出土した。1458 は分銅形土品である。一部分しか残存していないが、かなり大型である。1468 は太型蛤刃石斧で、刃部を欠損する。基部から刃部は直線的である。このように弥生時代の遺物も含むが、陶器須恵器編年 TK217 型式の須恵器が多くみられることから、SD1433 は 7 世紀前葉から中葉のものと考えられる。

### SD1440 (図 204・205)

7-14 区北部で検出した溝である。調査時の遺構名は南部が SD44、北部が SD40 である。南から北 (N5 ~ 10° E) に向かっており、中世の溝 SD1424 と重複し、削平される。また、途中で溝 SD1433 と合流するが、最終埋没は SD1440 のほうが後である。SD1440 は検出長 8.0 m、幅 0.7 m、深さ 0.4 m である。溝の底面には径 0.1 ~ 0.3m の自然石の集石がみられた。遺物は土器・須恵器片が整理箱 4 箱程度出土した。

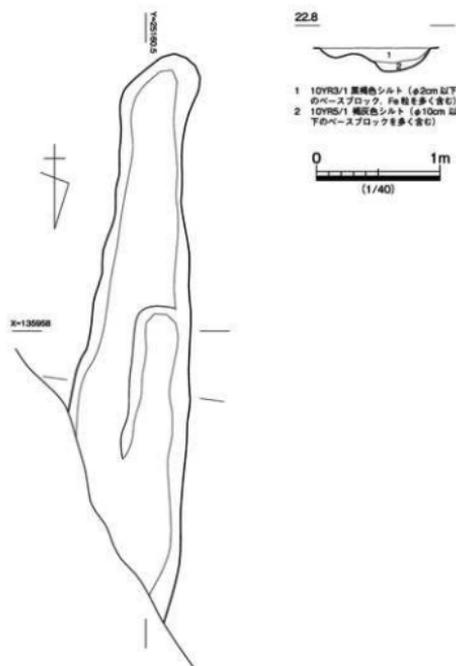


図 207 SD1436

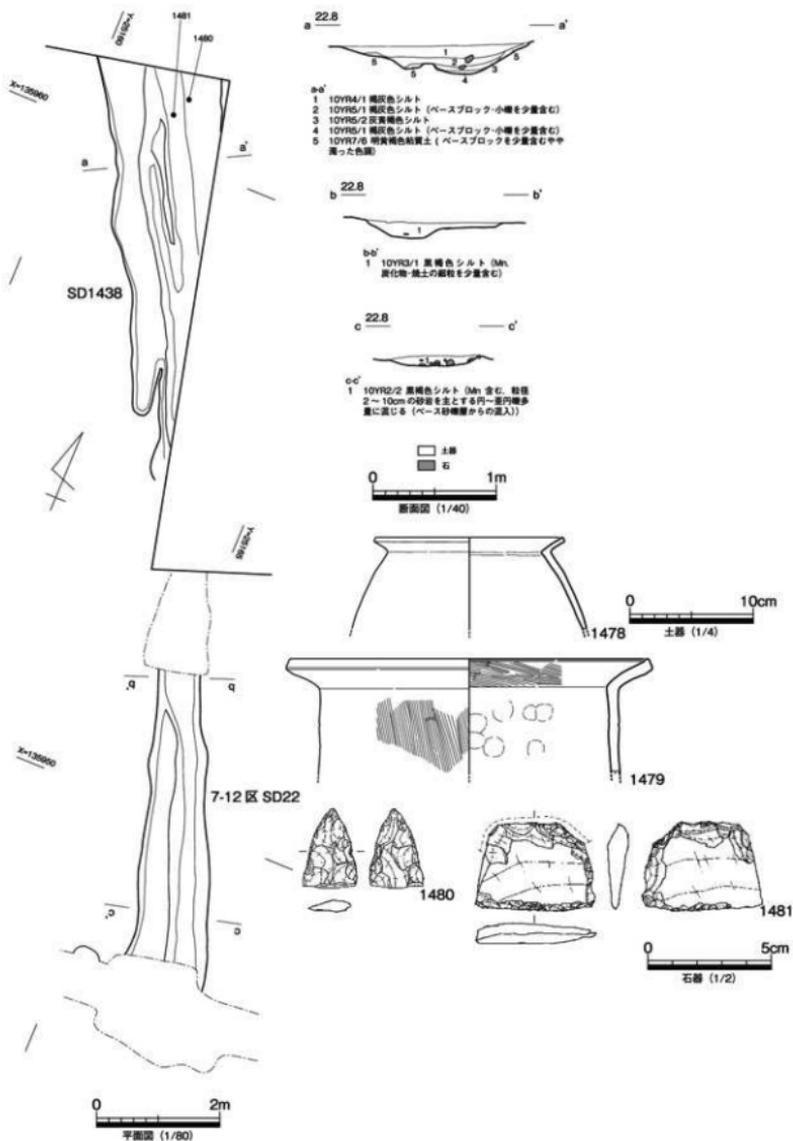


図 208 SD1438

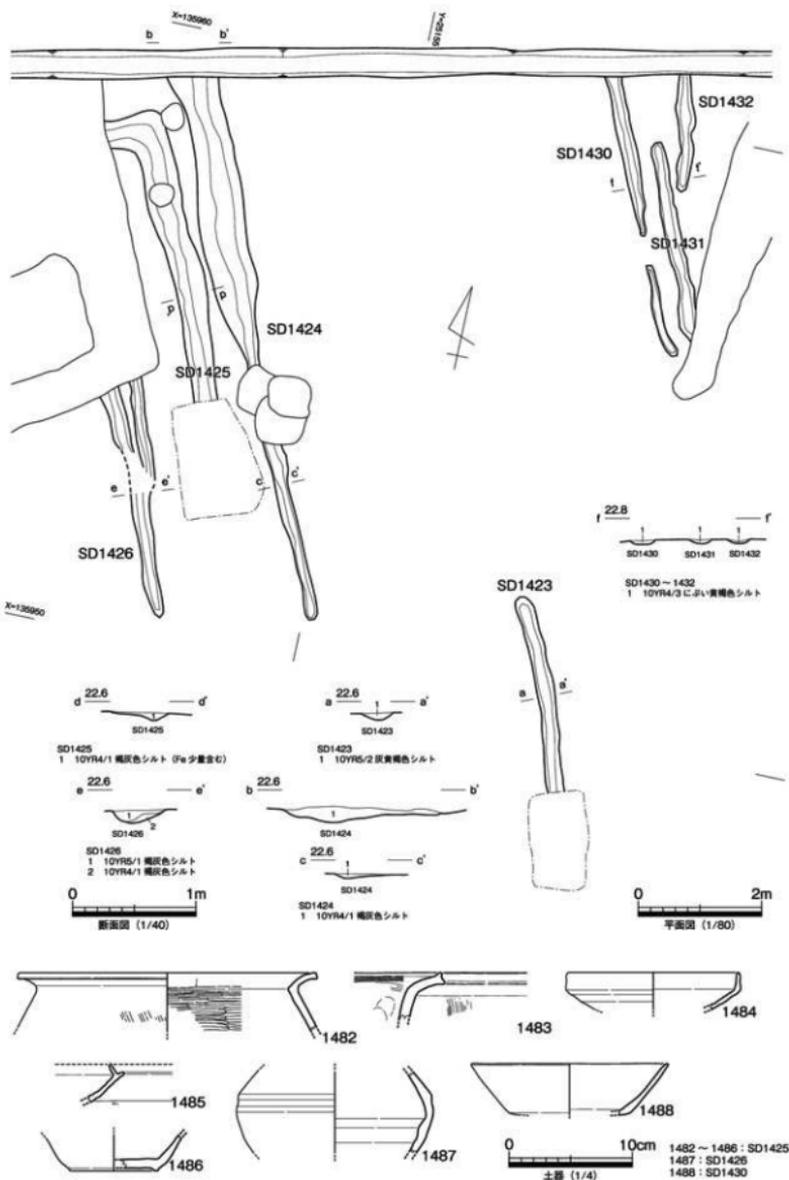


図 209 SD1423 ~ SD1426 · SD1430 ~ SD1432

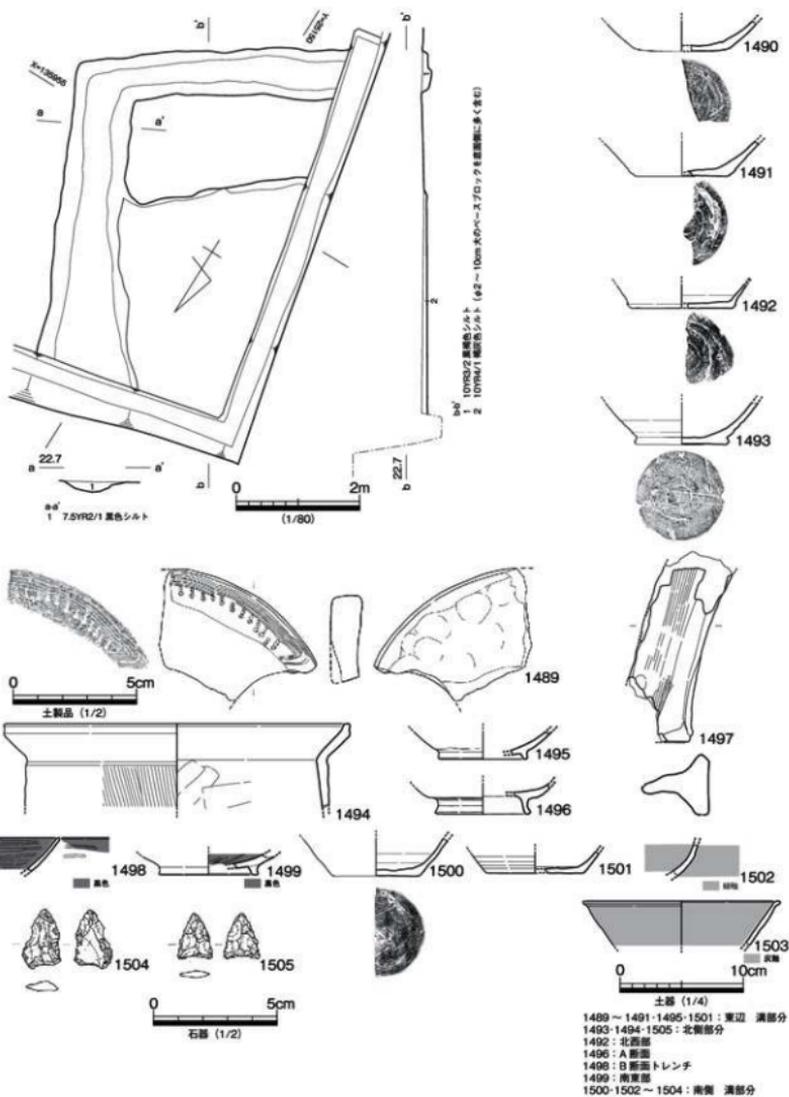


図 210 SX1409

弥生土器も含むが、陶器須恵器編年 TK217 型式の須恵器が多くみられることから、SD1440 は 7 世紀前葉から中葉のものと考えられる。

#### SD1435 (図 206)

7-14 区南部で検出された溝である。調査時の遺構名は SD35 である。南東から北西 (N35 ~ 65° W) に向かって走る溝である。途中で溝 SD1410、SD34、SX1409 と重複し、削平される。これらの遺構のほうが SD1435 よりも新しい。SD1435 は検出長 17 m、幅 0.4 ~ 0.8 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m である。南東部の 7-7・7-8 区で検出された SD0719・SD0720・SD0804 と同一方向に走ることから、これらに連続する溝の可能性が高い。遺物は整理箱半分程度出土した。1475 は土製品である。端面と端面に直交する方向には刻み目とヘラ描きによる文様が施される。1477 も土製品である。輪状であるが、用途不明である。1476 は弥生時代中期後半から後期初頭の高杯脚部片である。これらの土器は小片ばかりであるが、いずれも弥生土器であり、須恵器はみられない。弥生時代中期後半から後期初頭の土器が出土していることから、SD1435 は同時期のものと考えられる。

#### SD1436 (図 207)

7-14 区北東部で検出した溝である。調査時の遺構名は SD36 である。南から北 (NS) に向かって走る。北部は奈良時代の溝 SD1438 と重複し、削平される。SD1436 は幅 0.5 ~ 1.0 m、深さ 0.2 m である。溝中央に高まりが連続することから、本来は 2 条の溝の可能性が高い。遺物は整理箱半分程度出土した。大部分は弥生土器であるが、須恵器片が含まれることから、SD1436 は古墳時代後期から古代の溝と考えられる。

#### SD1438 (図 208)

7-14 区東端で検出された溝である。南方の 7-12 区で検出された溝 SD22 (『旧練兵場遺跡 VI』掲載予定) と同一溝であると考えられる。南東から北西に (N25° W) に向かう。南部で SD1410 と重複する。SD1438 のほうが新しい。SD1438 は幅 0.7 ~ 2.0 m、深さ 0.25 m である。底面には中洲状の高まりがあることから本来は 2 本の溝が重複していた可能性が高い。出土遺物は整理用コンテナ半分程度出土した。土師器甕 (1479) は 8 ~ 9 世紀に属することから、SD1438 は古代の溝の可能性が高いが、再検討を行い、SD1222 の報告時に再度報告することとする。

#### SD1423・SD1424・SD1425・SD1426・SD1430・SD1431・SD1432 (図 209)

7-14 区で検出された溝群である。調査時の遺構名は SD23・SD24・SD26・SD30・SD31・SD32 である。これらは古墳時代後期の溝 SD34 と重複するが、SD34 よりも新しい。いずれも南東から北西方向 (N22 ~ 25° W) に走り、幅 0.2 ~ 0.4 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m 程度である。これらの溝は平行に走り、浅いことから、田畑の耕作に伴う溝と考えられる。各溝からの出土遺物は少量である。弥生土器・土師器・須恵器片が出土した。埋土の色調や、奈良時代に埋没する溝の上面から掘り込まれていることから、中世のものと考えられる。

#### SX1409 (図 210)

7-14 区北西端で検出された溝である。調査時の遺構名は SX09 である。L 字状に屈曲し、幅 0.7 ~ 0.9 m、深さ 0.15 m である。また、溝の内側の北部は一段 (深さ 0.1 m) 下がる。底面付近にはブロック土が堆積しており、攪拌されたことがうかがわれる。耕作によるものと考えられる。SX1409 からは整理箱半分程度の土器・須恵器などが出土した。1498・1499 は黒色土器碗である。いずれも内面が黒色で、11 ~ 12 世紀に属する。1502 は緑釉陶器碗で、9 ~ 10 世紀、1503 は東海地方で製作された灰釉陶器碗で、



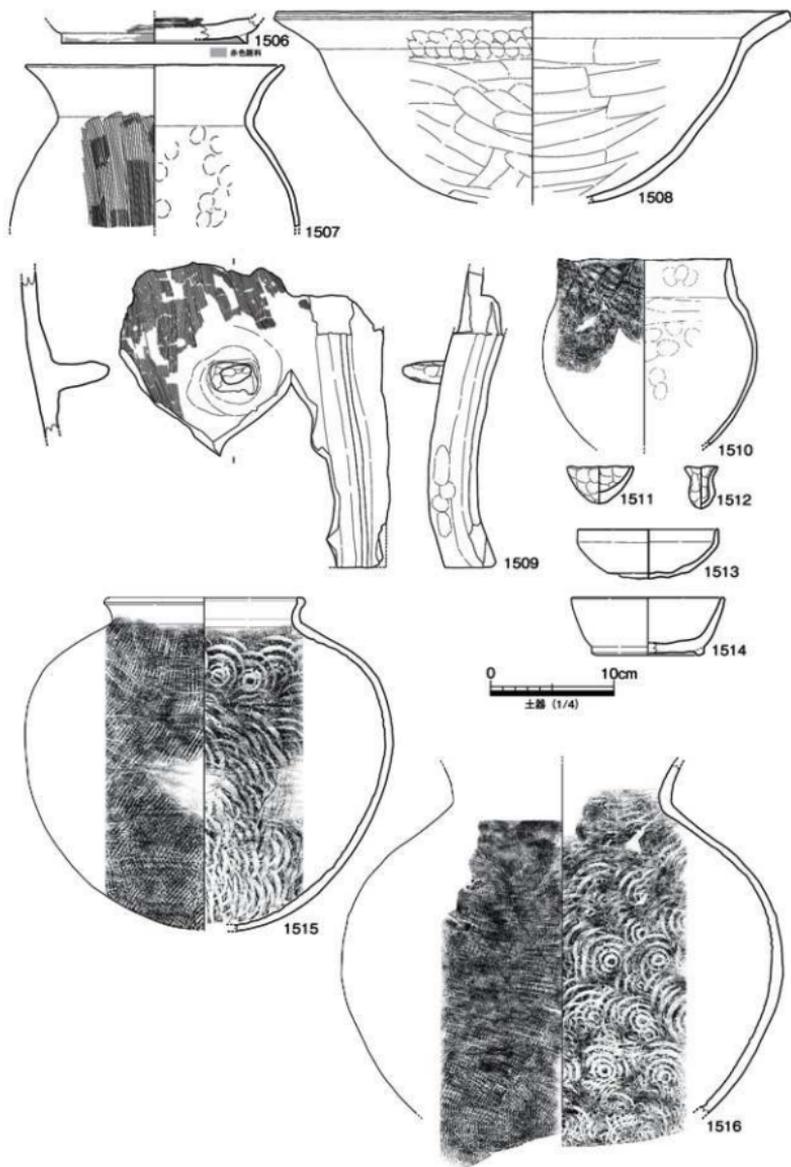


図 212 SD06・SD0807・SD23 の上部堆積層 (2)

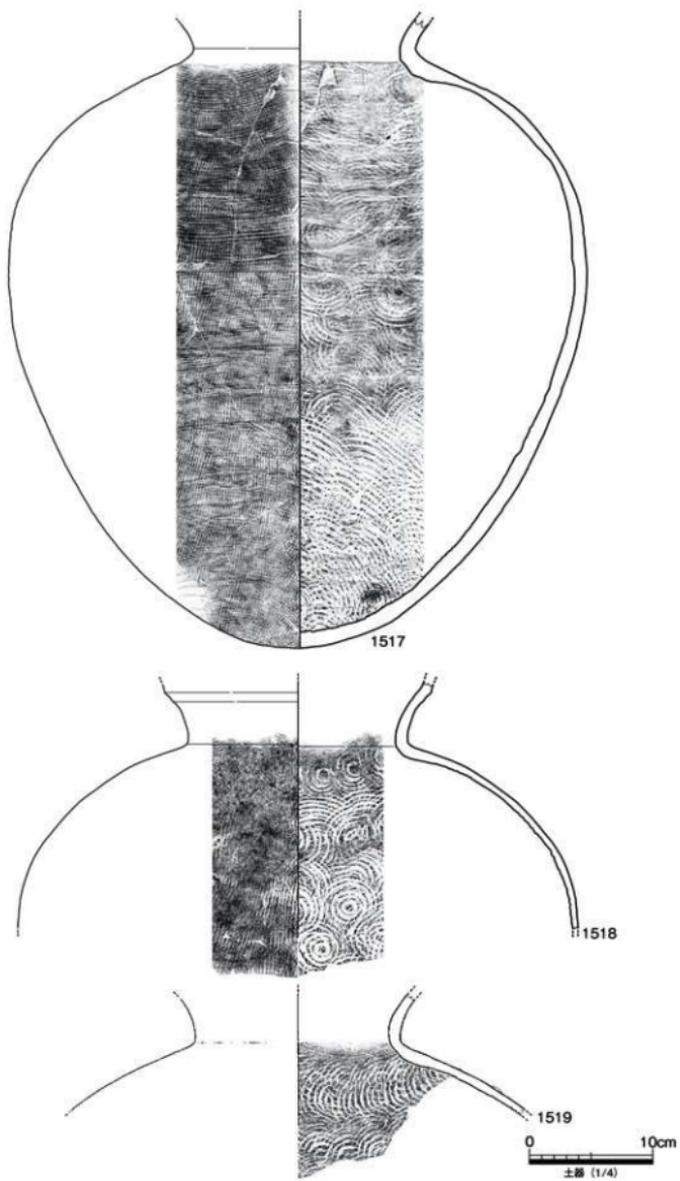


図 213 SD06・SD0807・SD23 の上部堆積層 (3)

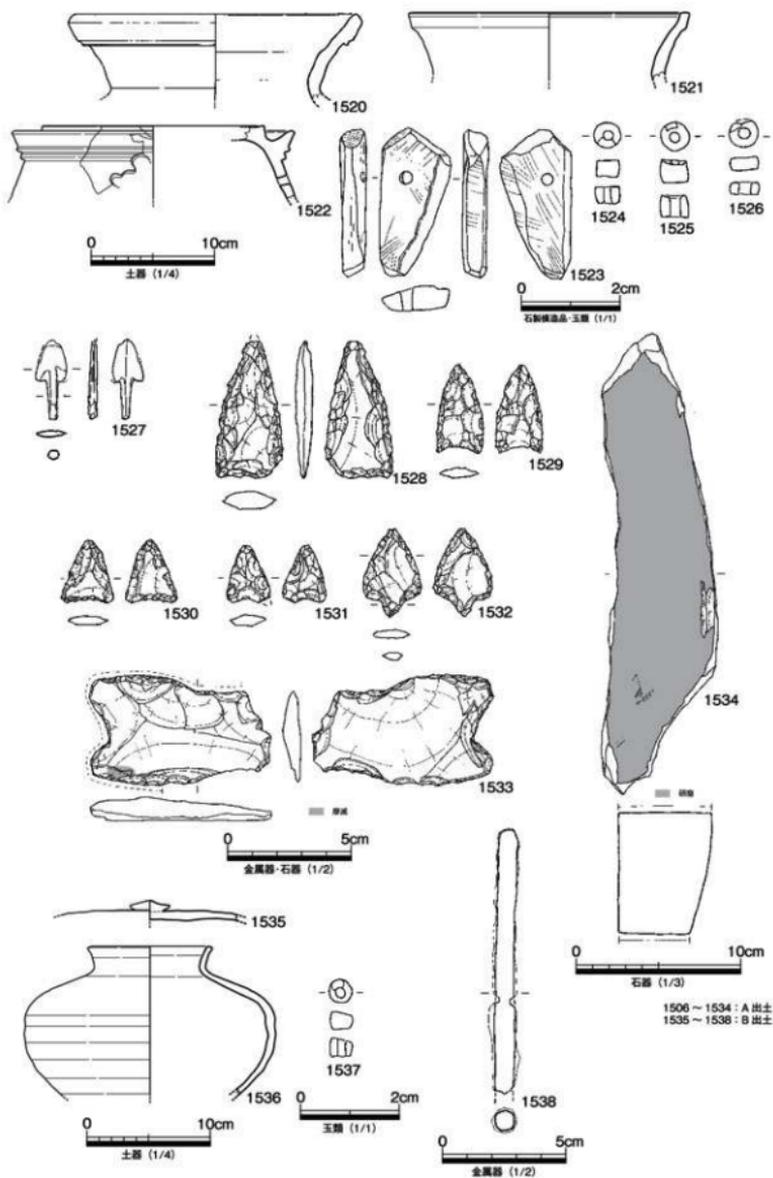


図 214 SD06・SD0807・SD23 の上部堆積層 (4)

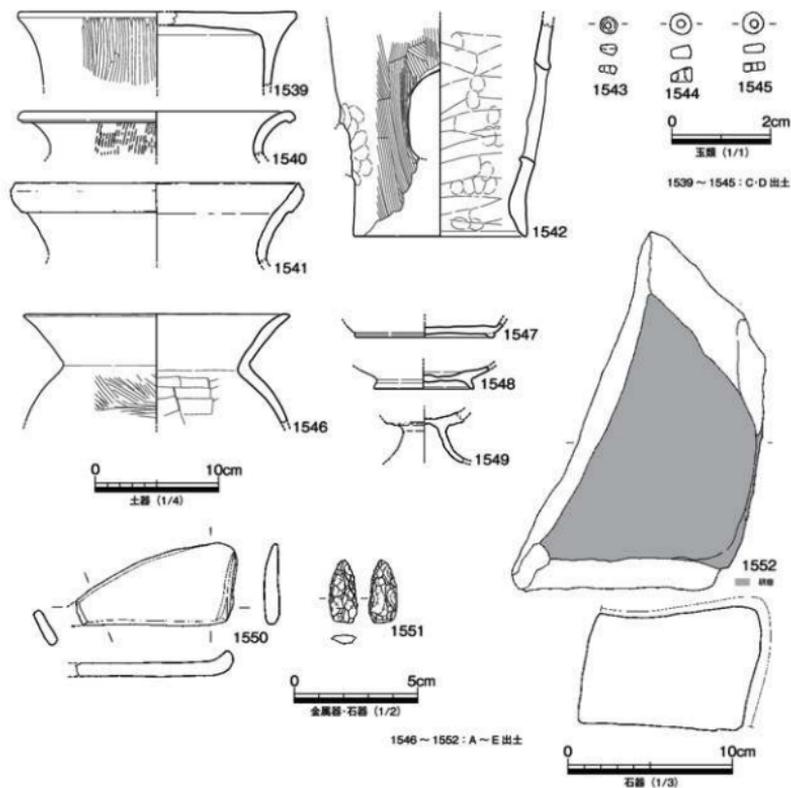


図 215 SD06・SD0807・SD23 の上部堆積層 (5)

10世紀、土師器碗(1495)は13世紀に属する。このように、13世紀の土師器や平安時代の土師器杯などが出土したことから、SX1409は中世のものと考えられる。

#### SD06・SD0807・SD23の上部堆積層(図211～215)

7-7区から7-8区にかけて検出されたSD06・SD0807・SD23の上部に堆積する土層である。発掘調査時にこれらの遺構埋土の上部を含む土層を一括して掘り下げたため、ここではSD06・SD0807・SD23の上部に堆積する土層として報告を行う。7-8区では盛土・表土の下に灰色シルト層を中心とする土層が堆積していた。これらの土層の下端の標高は228mで、周辺と比較すると低く(図5・211)、その下部には黒褐色粘質シルト層が堆積していた。この土層は7-8区だけではなく、第28次調査の調査区全体に広がる土層である。7-8区に先立って調査が行われた7-1区・7-2区では黒褐色粘質シルト層の堆積は0.05m程度と薄いのが、7-8区南東部ではこの層の厚さは0.15～0.2mであった(図211)。7-8区の調査ではまず黒褐色粘質シルト層の上面で精査をし、淡灰色～灰色土を埋土とする遺構の検出を行った。これらの

遺構の調査終了後、一面に広がる黒褐色粘質シルト層を0.05 m程度掘り下げ、精査を行ったところ、黒褐色砂質シルト混じり粘質シルト層の広がりを確認した。この広がりとは図211に示した範囲である。A～Eの小区を設定してこの土層を0.1～0.15 m掘り下げたところ、多量の土器片が出土し、SD23・SD06・SD0807の明確な平面形が確認でき、これらの溝の調査を行った。なお、7-8区の調査開始直後は下部に弥生時代に埋没する河川が存在することを予測していなかったが、調査中、7-8区に広がる黒褐色粘質シルト層は下部にある河川SR01埋土の上層で、この層の上部から黒褐色砂質シルト混じり粘質シルト層の堆積が始まるのがわかってきた。調査終了後に再度検討を行い、黒褐色砂質シルト混じり黒褐色粘質シルト層はSR01埋土上層の黒褐色粘質シルト層が堆積したあとで掘り込まれたもので、「旧練兵場遺跡Ⅲ」で報告されたG区SD0005から連続するSD23の埋土の可能性が高いと考えた。だが、発掘調査時に十分な検証を行っていないので、黒褐色砂質シルト混じり黒褐色粘質シルト層から出土した遺物はSD23だけではなく、SD06やSD0807の遺物も含む可能性があるため、ここではこれらの遺物をSD06・SD0807・SD23の上部堆積層として報告する。なお、Eと設定した小区の下部の遺構はSD23だけであることから、Eから出土した遺物はSD23から出土したものと考え、SD23⑦の上層から出土した遺物として報告する。以下、取り上げ区画ごとに遺物の報告をする。

1506～1534は最も北西部のAから出土した遺物である。1506は8～9世紀の土師器杯で、内外面に赤彩がある。1508は中世の土鍋である。1510は製塩土器で口縁部に叩き目がみられる。1513・1514は須恵器杯、1515～1521は須恵器甕である。1522は須恵器円面硯である。1523は結晶片岩製の石製品で、穿孔がある。石器を再加工したものであろう。1524～1526は滑石製の白玉である。1527は銅鏃で、中央に稜線がある。1535～1538はBから出土した遺物である。1537はガラス製の小玉である。深い青色である。1539～1545はC・Dから出土した遺物である。1542は土師器で、種類不明である。上部を欠損するが、下部は円筒壺輪のように筒状で、側面には窓状の大きな円孔があり、把手の剥離痕がある。1543はガラス製の小玉、1544・1545は滑石製の白玉である。1546～1552はA～Eのいずれかから出土したもので、詳細な出土位置は不明である。1550は鉄鎌である。端部が曲がる。以上のようにSD06・SD0807・SD23上部堆積層としてここで報告した遺物は鉄釘(1538)のように中世に属すると考えられるのがみられるが、大部分は古墳時代後期(陶邑須恵器編年TK217型式)から奈良時代のもので、G区SD0005(「旧練兵場遺跡Ⅲ」)の報告遺物とはほぼ同時期のものである。

#### SD23 (図216～226)

7-8区で検出された溝である。調査時の遺構名もSD23である。SD23は南東から湾曲して北西(N0～50°W)に向かう溝である。7-9区南東端でSD03とSD19に分岐する。また、SD23は7-8区の東に接する7-7区で検出されたSD0704から連続する。SD23とSD0704は、同一溝であるが、ここでは別名で報告する。SD23は7-8区南東部では土坑SX02、溝SD0807と重複する。いずれも最終埋没はSD23のほうが後である。7-8区南東部は7-8区の中ではSD23の上流側に当たる。この付近ではSD23は幅8.7 mと広いが、7-8区の中央部では急に幅を狭め、7-8区の北西端では幅1.5 mとなる。7-8区南東部では断面形は円弧状ではなく、階段状となり、南部(7-7区側から見て左側)は深さ0.3 mと浅く、北部(7-7区側から見て右側)は深さ0.5 mと深い。また、7-8区中央部の幅が狭くなっている部分から北に7 mほどの間では、溝の下部は径1.0～3.0 mの土坑が連結したような状態となる。この部分では最も深い底面までは深さ0.5 m、上部に盛り上がっている部分では深さ0.2 mとなる。また、SD23は7世紀の土坑SX02と土坑状の南端部分で重複していたが、SD23のほうがSX02よりも埋没が新しいことが確認

された。

遺物は整理箱 25 箱と多量に出土した。図 221 で示すとおり、北西から南東に向かって①～⑦の小地区に分けて遺物を取り上げた。ここでは出土地点ごとに報告する。遺物の出土量は⑥・⑦が最も多い。1553・1554 は SD23 の最北部の①、1555～1563 は③、1564～1577 は⑤、1578～1591 は⑥、1592～1596 は⑤または⑥、1597～1643 は⑦の上層、1644～1656 は⑦の下層から出土した。1657～1659 は SD23 から出土したが、詳細な位置は不明である。1555 は台付壺である。丁寧にヘラミガキされる。1572 は耳環で、銅芯金張である。1588 はふいごの羽口である。先端付近の小破片である。外面には灰がガラス化して着着する。内側の残存部分は少しだけであるが、橙色である。1630・1631 はガラス製の小玉で、1630 は緑色、1631 は青色である。1632～1637 は滑石製の白玉である。1644 は弥生土器壺の体部片である。弧帯文がヘラ描きされる。1651 は結晶片岩製の勾玉である。断面形は扁平である。1652・1653 は滑石製の白玉である。これらの遺物の時期をみると、①～⑥から出土した遺物は弥生時代または古墳時代後期（陶邑須恵器編年 TK209～TK217 型式）のものであるが、⑦上層では古墳時代後期（陶邑須恵器編年 TK209～TK217 型式）のものも少量あるが、大半は 8 世紀に属するものである。また、⑦下層では弥生時代、古墳時代後期、8 世紀の遺物を含む。「旧練兵場遺跡Ⅲ」で報告された SD0005 も古墳時代後期から 8 世紀の遺物を含む。⑦からは G 区 SD0005 と同様 8 世紀の須恵器・土器が多量に出土しているが、④・⑤・⑥では 8 世紀の遺物はみられず、古墳時代後期のものばかりである。

なお、7-8 区は東接する 7-7 区よりも先に調査を行ったが、平成 14・15 年度に実施した第 22・23 次調査で検出された G 区 SD0005 から連続する溝と考えると SD23 の調査を行った。7-8 区調査終了後に調査を行った 7-7 区でも、調査区南部で検出された遺構を G 区 SD0005 の一部と考え、1 条の溝（SD0704、調査時の遺構名は SD04）として調査した。しかし、調査終了後、各調査区の遺構を検討した結果、7-7 区の南東部に隣接する第 22・23 次調査区では南東から北西方向に平行して走る 2 本の溝 SD3004・SD4002 が検出されており（「旧練兵場遺跡Ⅲ」）、これらの溝の延長線上に SD0704 と SD06 があることから、SD0704 は SD3004・SD06 は SD4002 の延長溝の可能性が高いことがわかった（図 248）。また、SD06・SD0807・SD23 の上部堆積層の検討や、SD23 の出土土器の検討から、SD23 南東部の幅広の部分は G 区 SD0005 に連続し、この溝は SD23 の幅広の部分で収束している可能性が高いことがわかった。このように、SD0704・SD23 は G 区 SD0005 の北部に当たるとともに、SD3004 から延長する溝が重複する可能性が高く、SD23 の幅広の部分で G 区 SD0005 から続く溝は収束し、幅狭の部分は SD3004 の延長の溝である可能性が高い。幅広の部分と幅狭の部分とは遺物に時期差がみられ、G 区 SD0005 から続く幅広の部分は 8 世紀、SD3004 の延長の溝と考えられる幅狭の部分は 7 世紀に埋没すると考えられる。

#### SD0704（図 216～218・227～230）

7-7 区南部で検出された溝である。調査時の遺構名は SD04 である。東西（W-E）に走る。SD0704 は第 28 次調査の 7-7 区では最大幅 2.8 m、最大深さ 0.6 m である。西部は先述した SD23 と連続し、南部は「旧練兵場遺跡Ⅲ」で報告された G 区 SD0005 と連続する。SD23 の報告で先述したとおり、SD0704 は「旧練兵場遺跡Ⅲ」で報告した SD3004 から延長する溝と G 区 SD0005 が重複する可能性が高いことがわかった。図 217 の c-c'、d-d' の断面図をみると底面は二段掘りになっており、北部が深い。北部の凹みに堆積する土層（c-c' では 9 層、d-d' では 4 層）の上部には南部から連続する堆積層があることから、北部の凹みは SD3004（「旧練兵場遺跡Ⅲ」）から連続する溝で、その上部は G 区 SD0005 から連続する溝であると考えられる。遺物は弥生土器・土器・須恵器などが整理箱 20 箱程度出土した。遺物は⑧～⑩

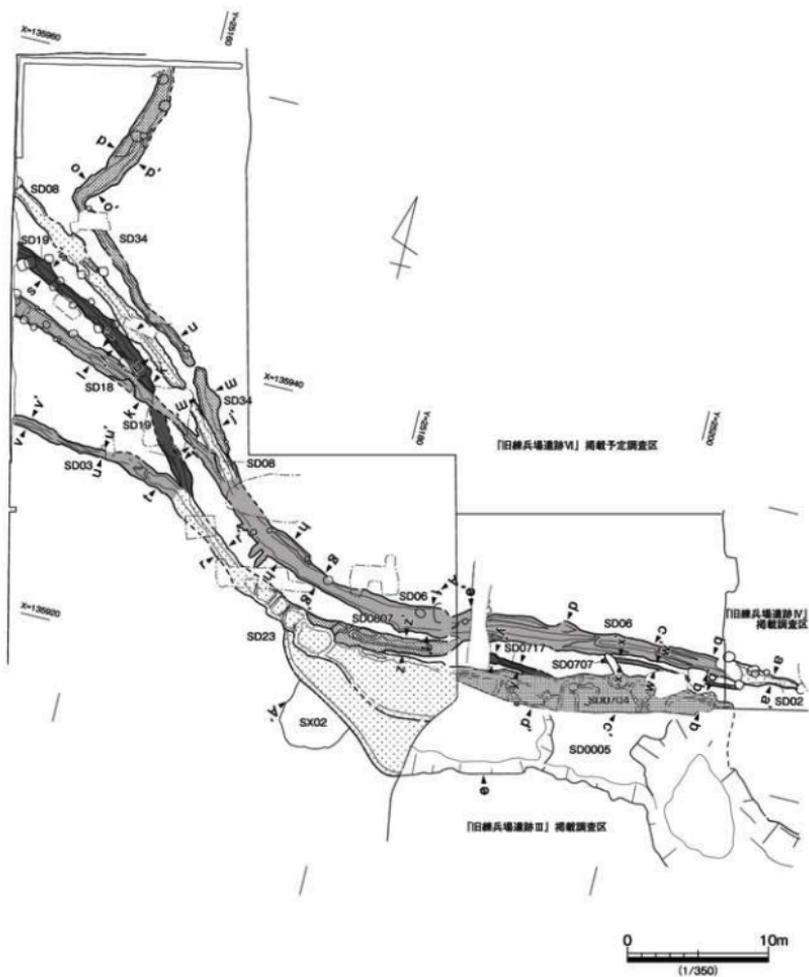


図 216 SD03・SD06・SD08・SD18・SD19・SD23・SD34・SD0704・SD0707・SD0717・SD0807

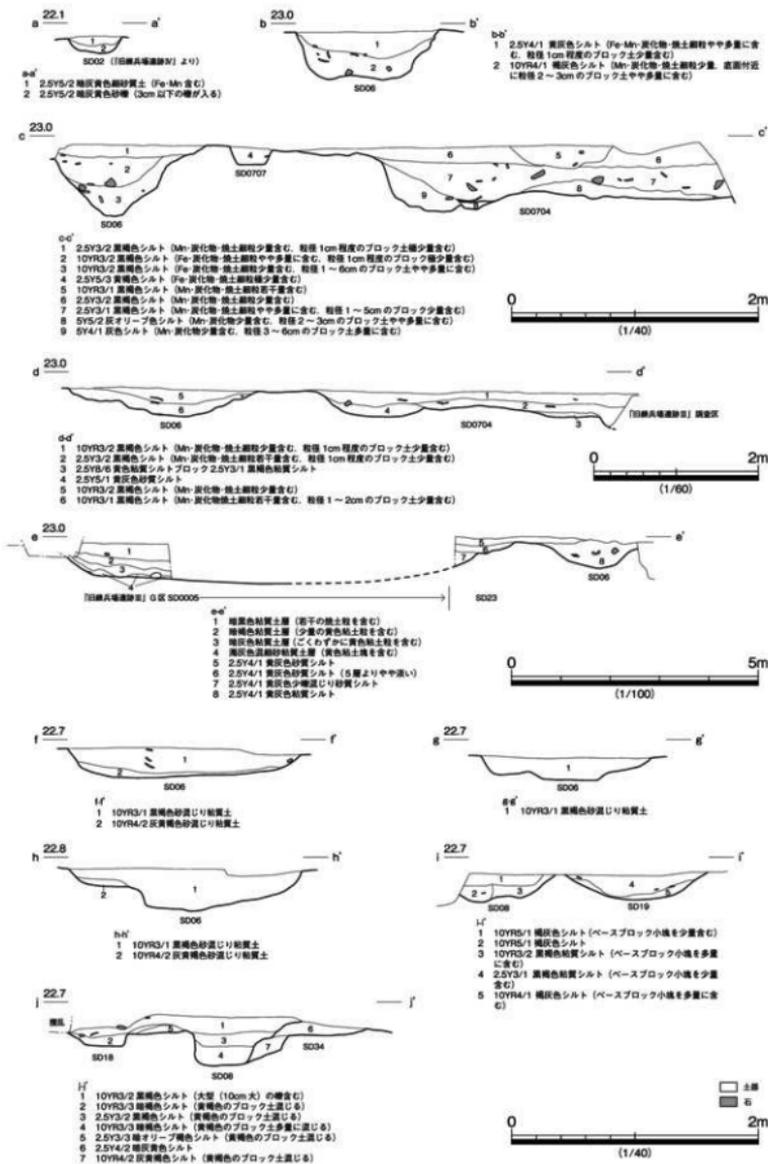


図 217 SD02・SD06・SD08・SD18・SD19・SD23・SD34・SD0704・SD0707

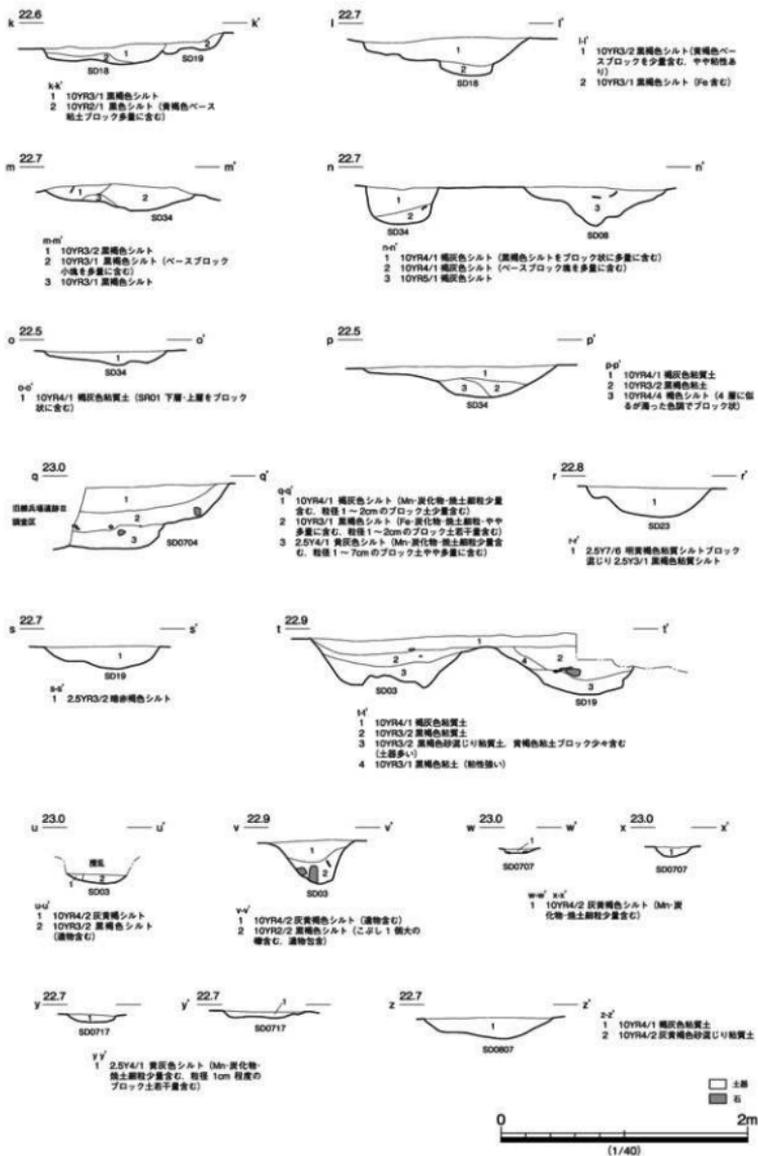


図 218 SD03・SD08・SD18・SD19・SD23・SD34・SD0704・SD0717・SD0807

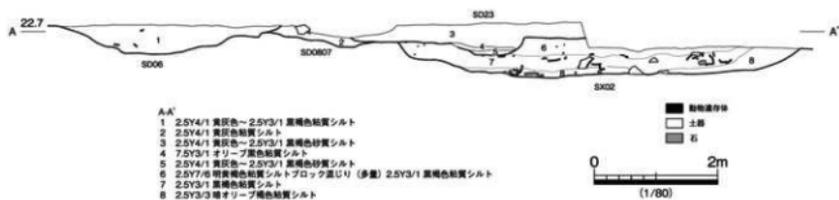


図 219 SD06・SD23・SD007・SX02

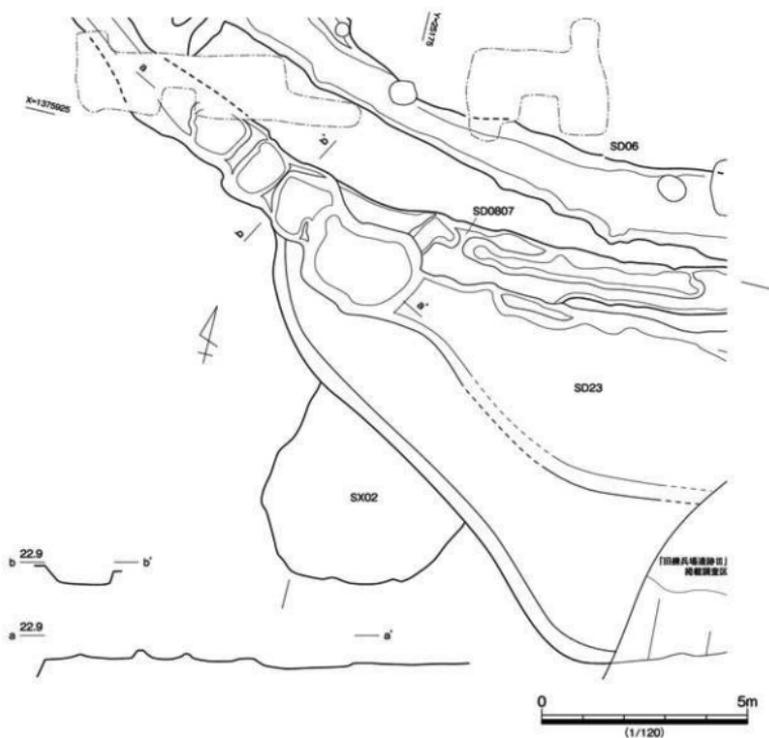


図 220 SD06・SD23(7-8 区南東部)

Y=25200

Y=25180

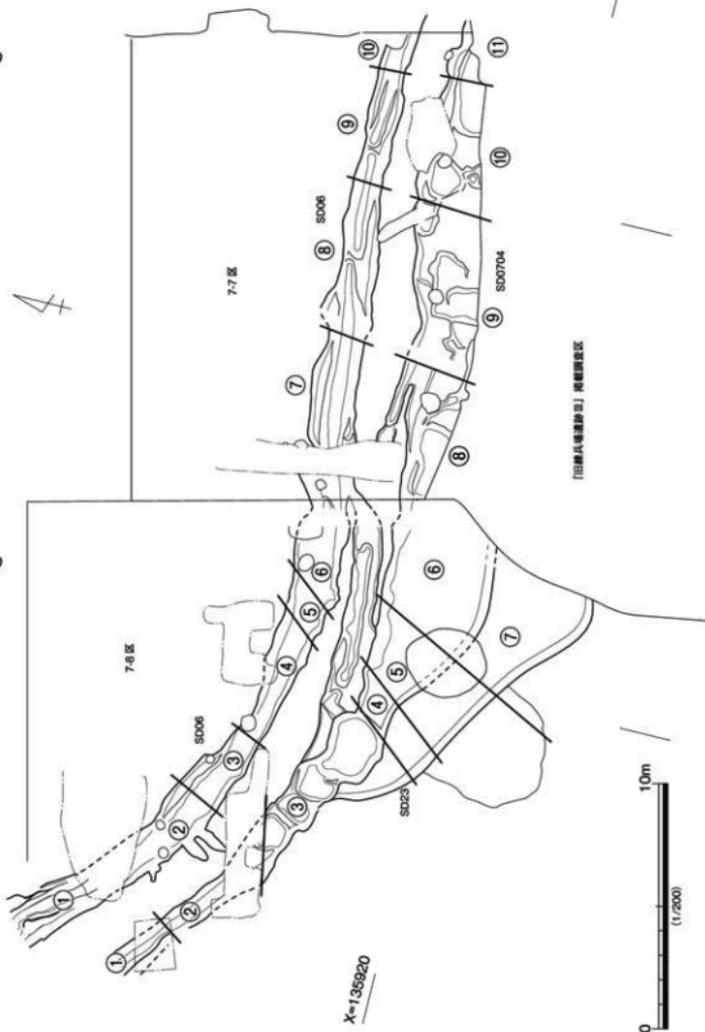


図 221 SD06・SD23

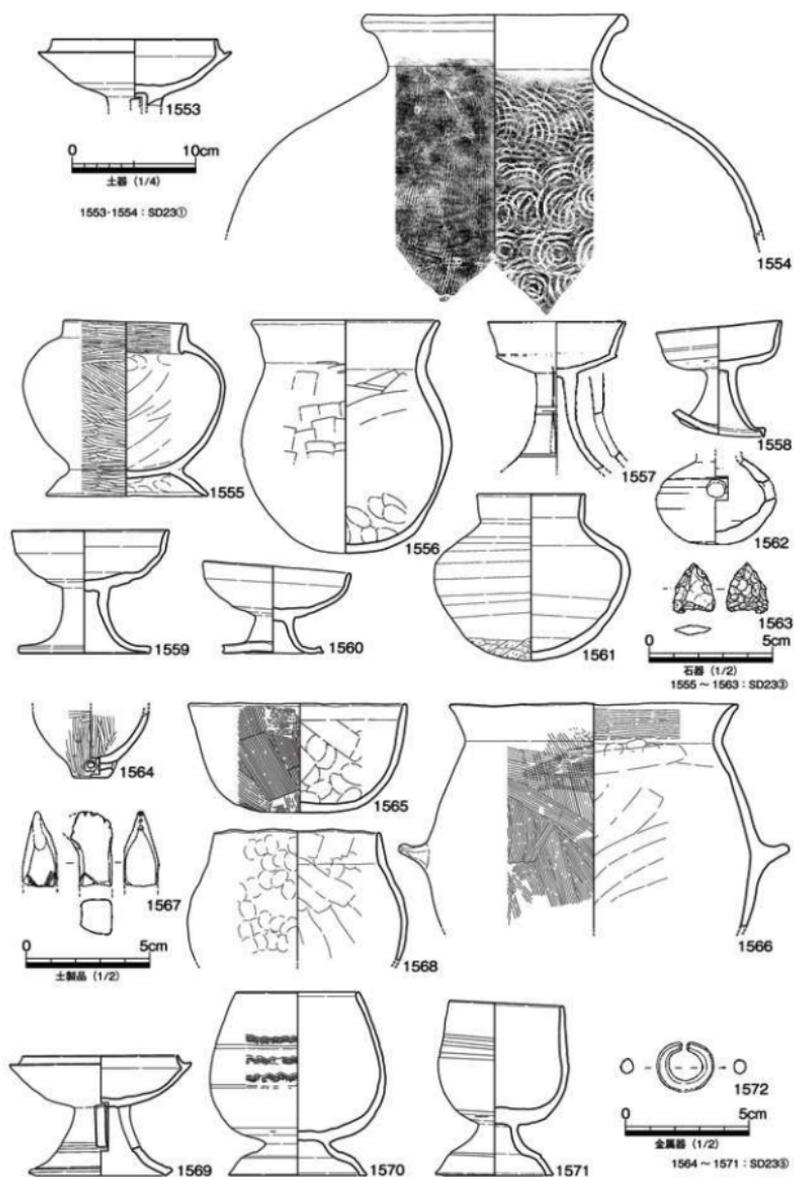


図 222 SD23(1)

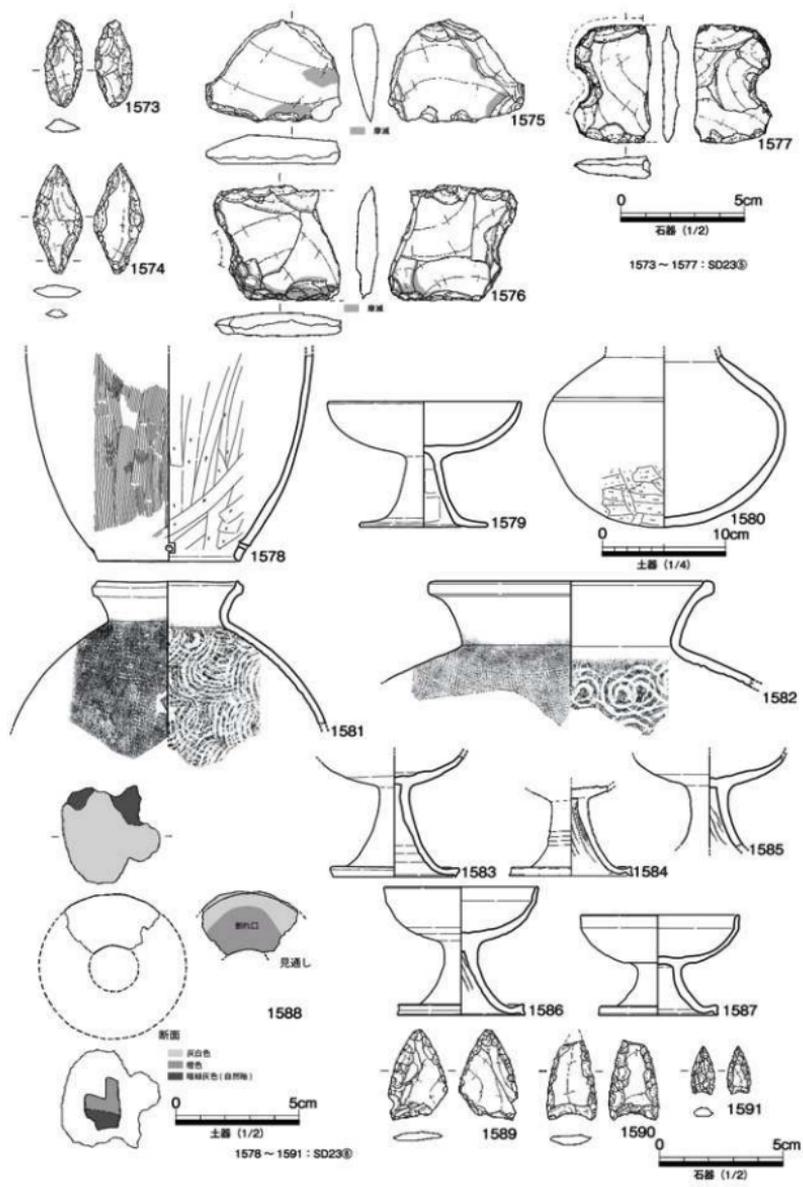


図 223 SD23(2)

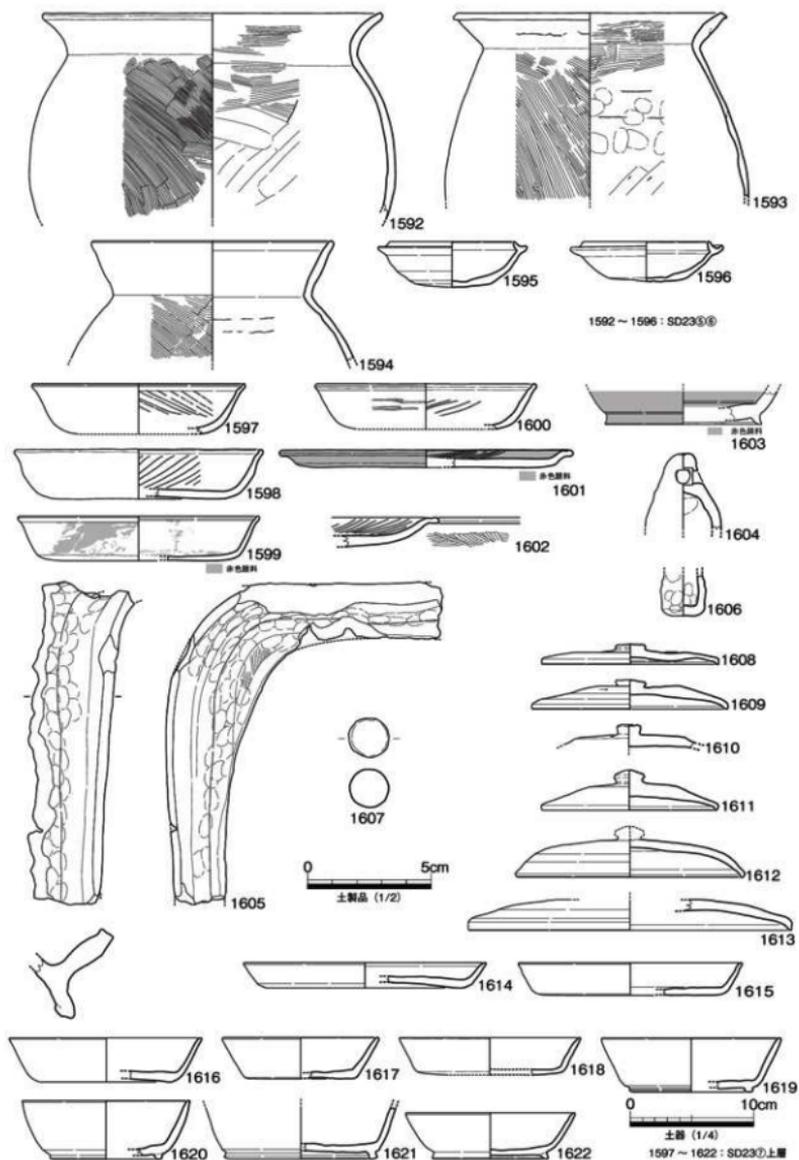


図 224 SD23(3)

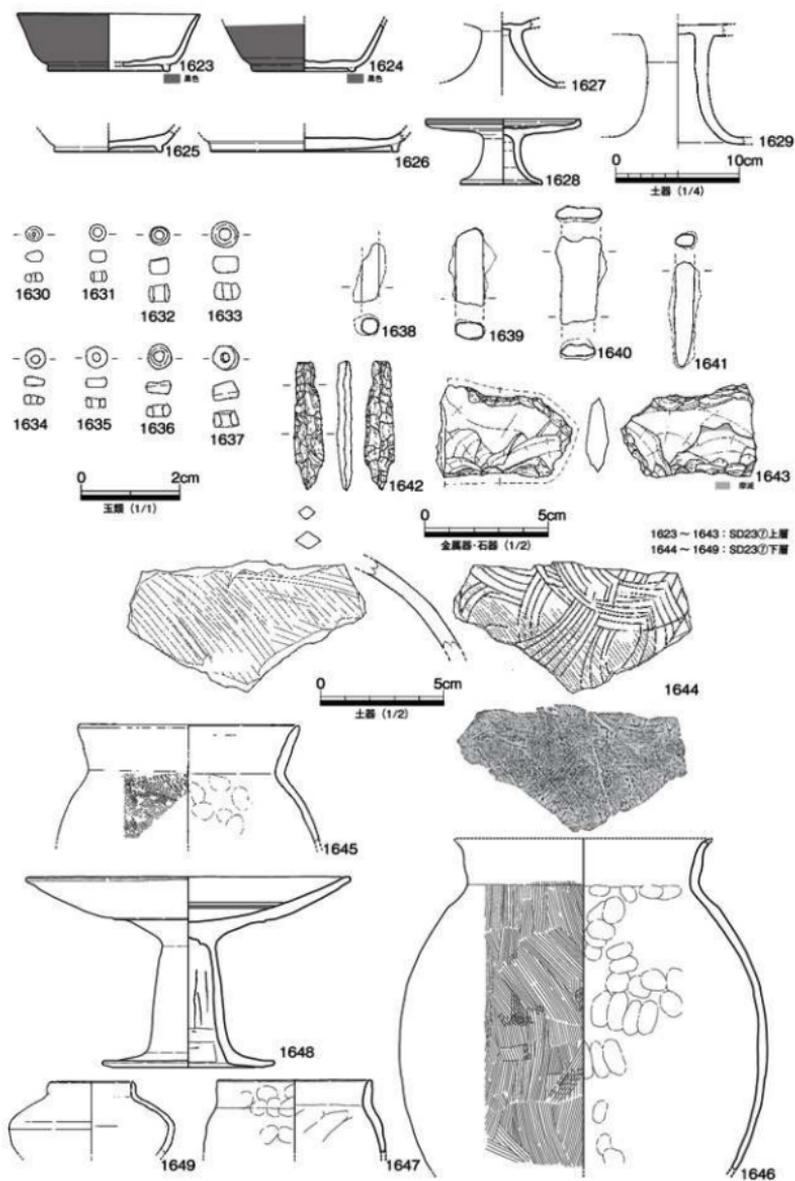


图 225 SD23(4)

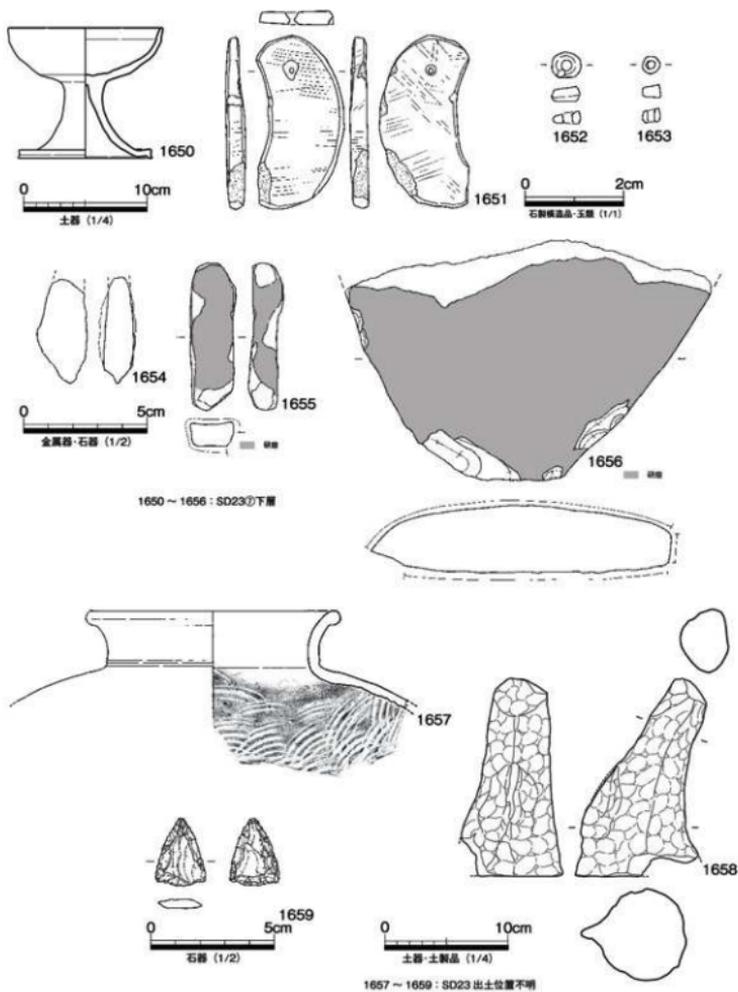


図 226 SD23(5)

の4区画に分けて取り上げた。1660・1661は最も西部の⑧上層、1662・1663は⑧中層、1664・1665は⑧下層から出土した。1666～1672は⑧から出土したが、層位は不明である。また、1673～1675は⑨上層、1676～1684は⑨中層、1685～1692は⑨下層、1693は⑩上層、1694～1706は⑩中層、1707～1710は⑩下層から出土した。1711～1713はSD0704からの出土であるが、詳細な出土位置は不明である。1673は弥生土器壺の体部片で、線刻による絵画がみられる。1673は厚さ1cmで、外面に横方向のヘラミガキ、内面には指押さえ、ナデ調整が施されており、大型壺の体部上半の破片であると考えられる。土器の色調は淡黄褐色を呈し、胎土に径0.5～1mmの白色砂粒や径2～3mmの花崗岩粒をやや多量に含む。類似する胎土をもつ土器片は旧練兵場遺跡から多量に出土していることから、周辺で作られたものと考えられる。土器焼成前に屋根・柱・部屋がヘラ描きされる。屋根は台形を呈し、寄棟造で、縦横方向の格子がある。屋根の頂点とその下部には一重の渦巻き（下向き）の屋根飾りがある。柱は1本線で表されている。柱の下部は欠損しており、不明である。柱の上部には部屋があり、部屋の壁には斜格子がみられる。1694も弥生土器壺の頸部で、線刻による文様が描かれる。1712は安山岩製の磨石である。表面には赤色顔料（ベンガラ）が付着する。下部には弥生時代に埋没する河川SR01があることから、これらの弥生時代の遺物は本来SR01の埋土に含まれていた可能性が高い。なお、SD0704から出土した土器の中で最も多いのは古墳時代後期（陶邑須恵器編年TK217型式）のものであるが、8世紀の遺物も少量出土したことから、最終埋没は8世紀と考えられる。

#### SD0707 (図216～218・231)

7-7区南東部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD07である。SD06とSD0704に挟まれ、東から西に向かって(E-W)走る。検出長は9.5m、幅0.25～0.3m、深さ0.05～0.1mである。遺物は弥生土器・土師器・須恵器片などが少量出土した。1716は滑石製の白玉である。出土した須恵器は陶邑須恵器編年TK43～TK209型式に属するが、SD0707と平行することから、同溝とほぼ同時期の7世紀前葉から中葉のものである可能性が高い。

#### SD03 (図216・218・232・233)

7-9区北東端から7-13区で検出された溝である。調査時の遺構名は7-9区ではSD03、7-13区でもSD03である。SD03は7-8区で検出された溝SD23から連続する溝で、7-9区北東端でSD19とともに分岐し、SD19の南を、西方向(W5°N)に走る。SD03の東部(図216 t t' 断面付近)では溝の底面中央が高まりがあることから、この付近では2条の溝になっていた可能性が高い。SD03は幅1.4m、深さ0.3～0.4m、西部では幅0.8m、深さ0.4mと小規模になる。遺物は土器・須恵器片などが整理箱1箱程度出土した。1717～1719は7-9区部分の上層、1720は7-9区部分の中層、1721～1723は7-9区部分の下層から出土した。1724～1728は7-9区部分から出土したが、層位は不明である。また、1729～1738は7-13区部分から出土した。1717は吉備系土師器椀で、13世紀のものである。1718は緑釉陶器碗である。貼り付け高台で、10世紀の東海系のものである。1719は滑石製の白玉である。これらの遺物の大部分は古墳時代後期(TK217型式)のものであるが、このように7-9区の上層からは10世紀、13世紀の遺物も出土した。上層から出土していることから、これらは埋土の上部に残った凹みに堆積した遺物で、SD03は7世紀前葉から中葉に機能していた溝と考えられる。

#### SD19 (図216～218・234)

7-9区北東端から7-13区で検出された溝である。調査時の遺構名は7-9区ではSD02、7-13区ではSD19である。SD19は7-8区から北西方向に走る溝SD23から7-9区北東端でSD03とともに分岐し、SD03の北

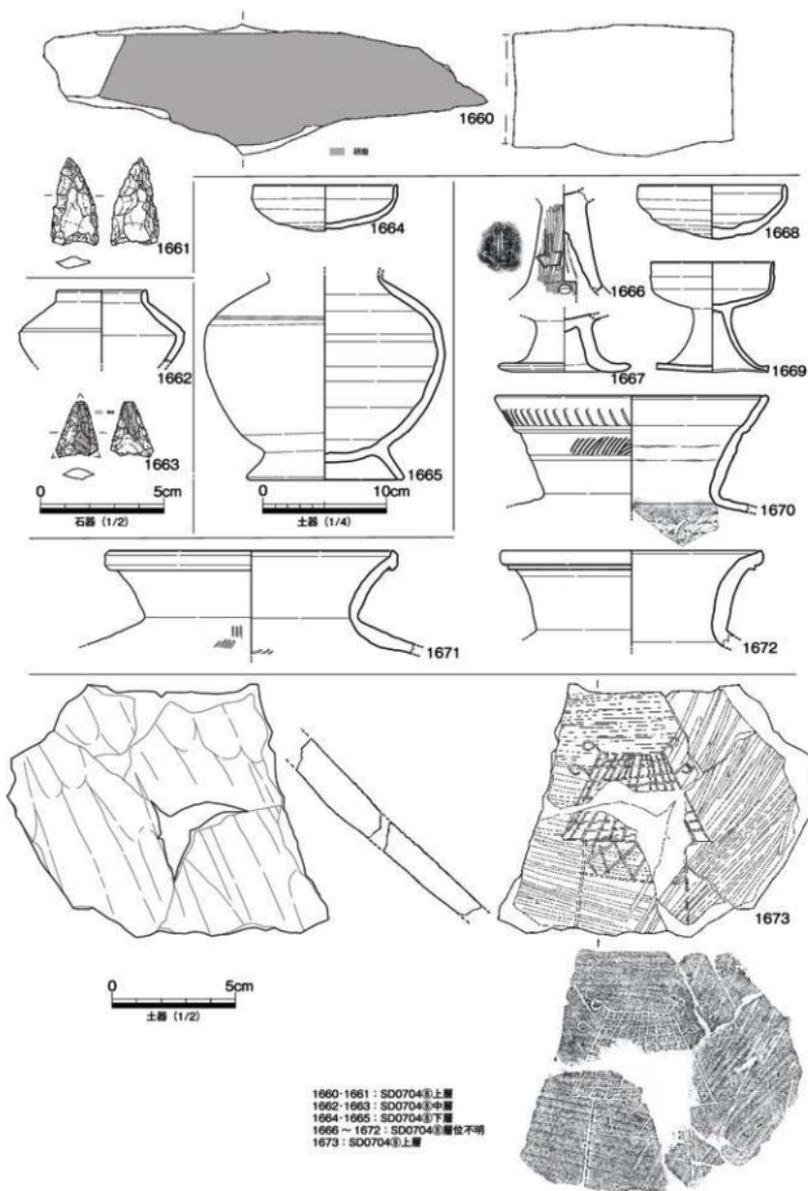


図 227 SD0704(1)

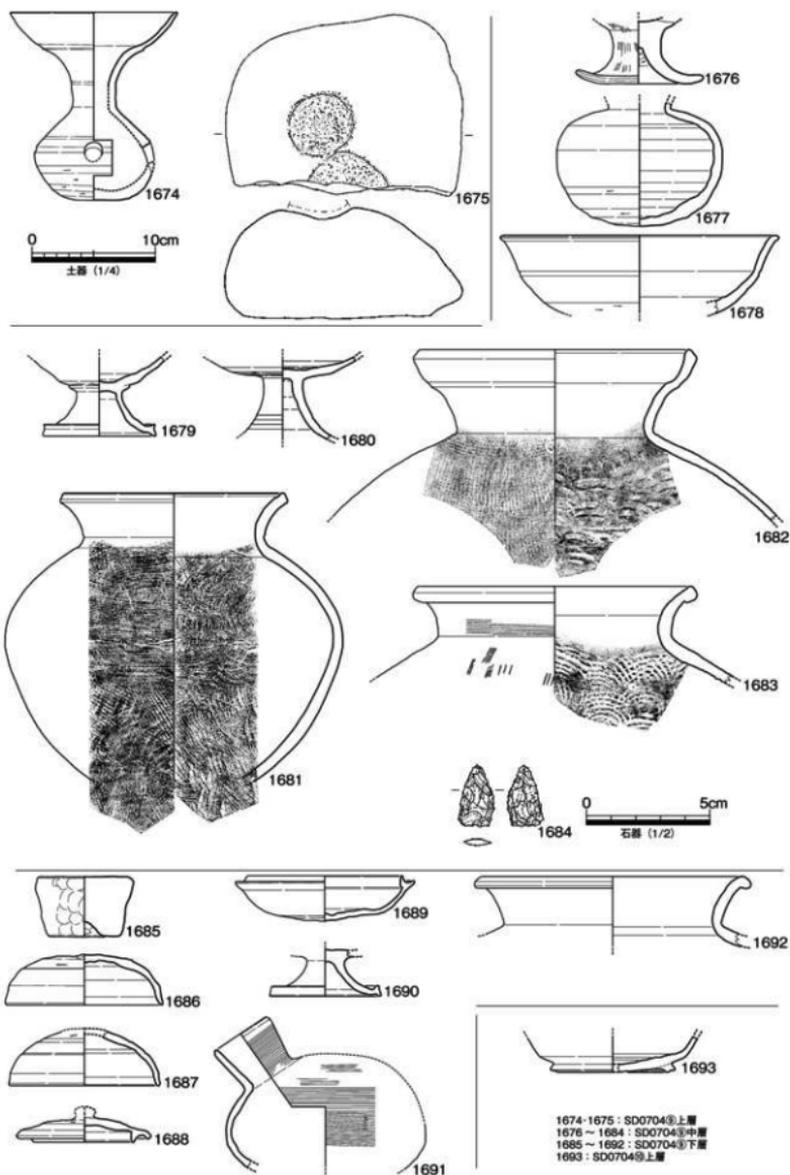


図 228 SD0704(2)

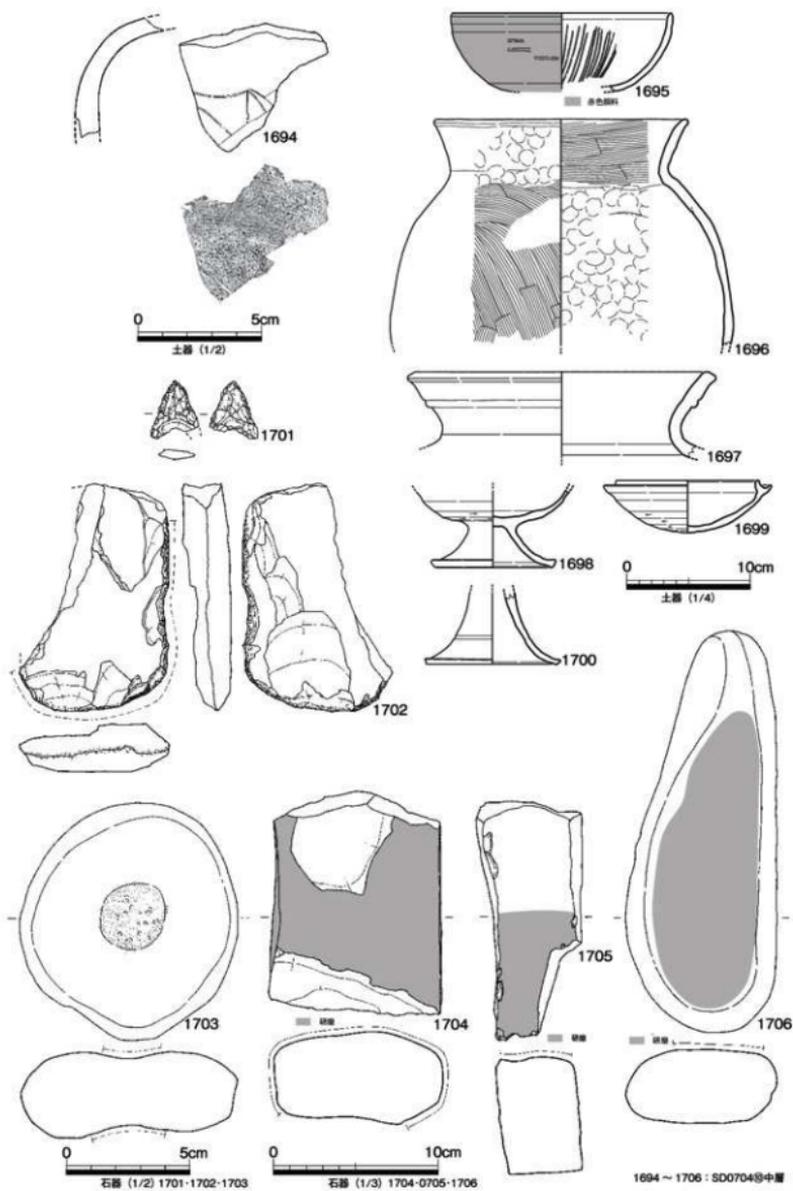
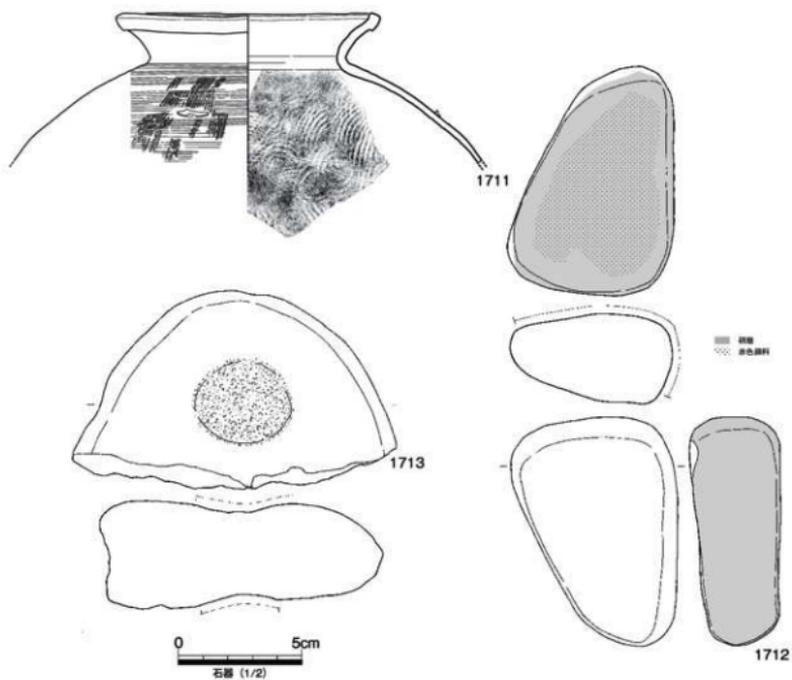
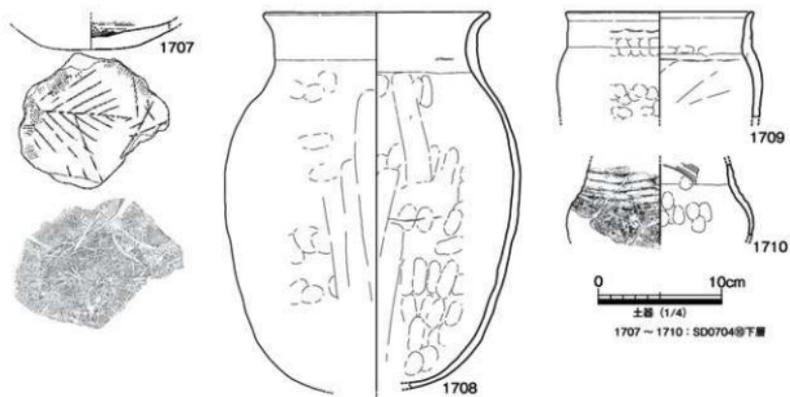


図 229 SD0704(3)



1712 : SD0704 出土位置不明 上層  
 1713 : SD0704 出土位置不明 中層

図 230 SD0704(4)

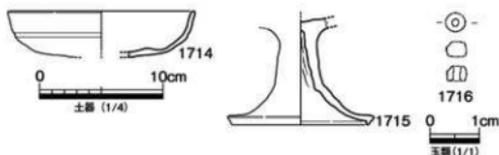


図 231 SD0707

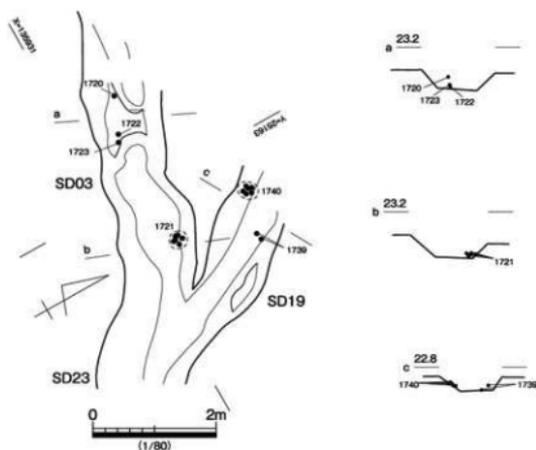


図 232 SD03・SD19

方を、北西方向 (N55° W) に走る。7-13 区南部では攪乱によって一部が削平され、また、SD18 と重複し、削平される。SD19 は検出長 20m、幅 0.8 ～ 1.2m、深さ 0.2 ～ 0.5m である。遺物は土器・須恵器などが整理箱 2 箱程度出土した。1752・1753 は鉄製の鎌である。これらの遺物は古墳時代後期 (陶器須恵器編年 TK209 ～ TK217 型式) に属することから、SD19 は古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD0717 (図 216・218・235)

7-7 区南部で検出された。調査時の遺構名は SD17 である。古墳時代後期から奈良時代の溝 SD0704 から分岐する溝で、西に向かって (W3° N) 走る。東部は幅 0.3m、深さ 0.1m であるが、西部では幅 0.55m、深さ 0.05m と幅広になり、浅くなる。遺物は土器・須恵器など整理箱半分程度出土した。弥生土器も含むが、古墳時代後期のものが大部分を占めるので、SD0717 は古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD06 (図 216・217・219～221・236～242)

7-7 区から 7-8 区にかけて検出された溝である。調査時の遺構名も SD06 である。溝の東部は「旧練兵場遺跡Ⅳ」で報告された溝 SD02 である。7-7 区では弥生時代終末期に埋没する SH01 を削平し、SD0704 に平行して、西に向かって (W5° S) 走る。7-8 区に入ると、SD23 に平行して北西方向 (N60 ～ 70° W) に走る。7-13 区の南東端で SD18・SD08・SD34 の 3 条の溝に分岐する。また、7-7 区と 7-8 区の境界付近で SD06 から SD0807 が分岐する。SD06 は検出長 40m、幅 1.0 ～ 1.8m、深さ 0.2 ～ 0.6m である。埋

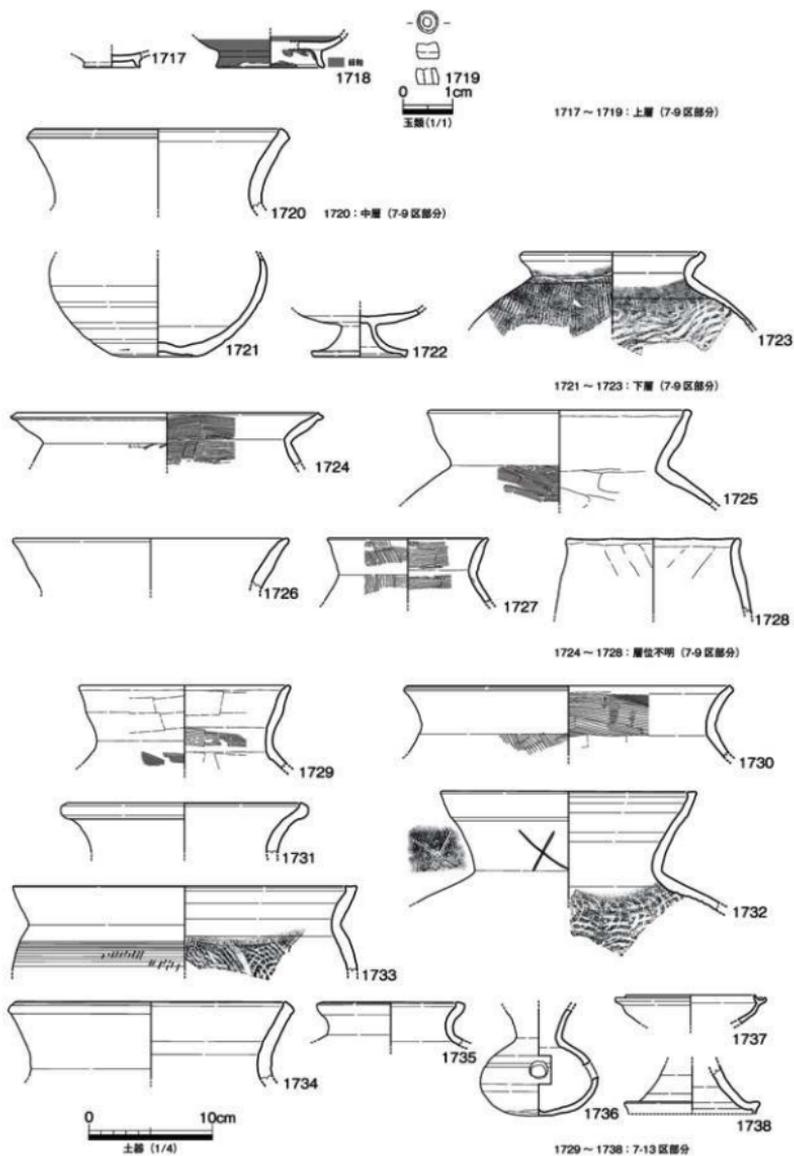


図 233 SD03

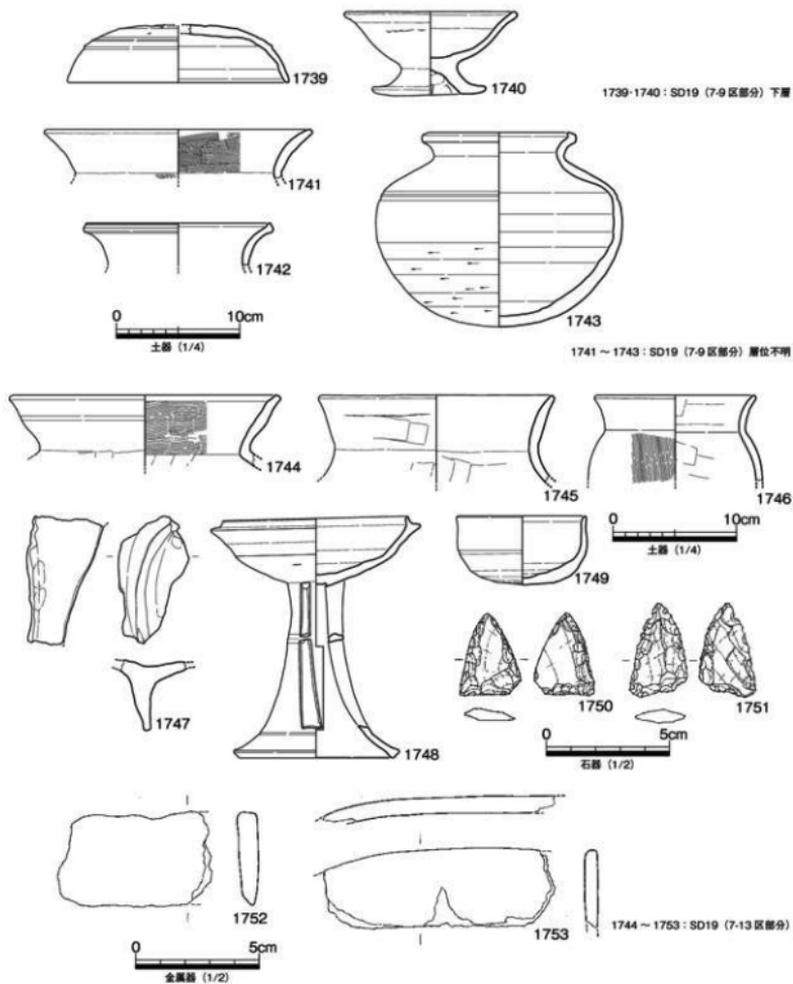


図 234 SD19

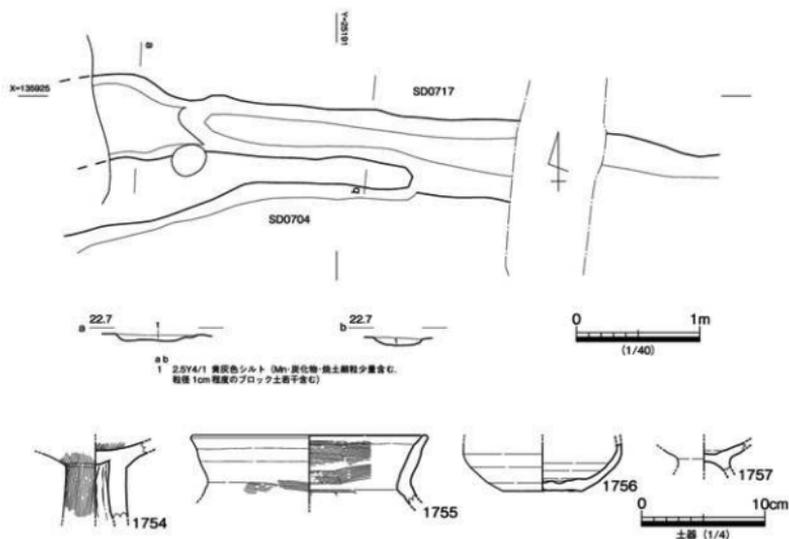


図 235 SD0717

土は粘質土で、砂礫の堆積はみられない。遺物は土器・須恵器などが整理箱 30 箱程度出土した。遺物は 10 区画に分けて取り上げた。1758・1759 は最も北部の①から出土した。1760～1762 は②、1763～1765 は③、1766～1770 は④、1771～1781 は⑤、1782～1798 は⑥、1799～1807 は①～⑥から出土したが、詳細な位置は不明である。また、1808～1817 は⑦上層・中層、1818～1824 は⑦下層、1825～1830 は⑧上層、1831～1840 は⑧中層、1841・1842 は⑧下層、1843～1845 は⑨上層、1846 は⑨中層、1847・1848 は⑨下層、1849～1851 は⑩中層、1852・1853 は⑩下層から出土した。1854～1856 は⑦～⑩から出土したが、詳細な位置は不明である。1807 は滑石製の白玉である。1823・1824 は鉄製の鎌である。1823 の基部は湾曲する。1828 はふいごの羽口の先端で、土製で、色調は橙色である。1839 は安山岩製の石剣である。1841・1848 は赤色顔料精製に係る遺物で、1841 は石臼、1848 は石杵である。両者は 7 m ほど離れて出土した。1841 は断面形四角形で、側面には凹みがある。凹み内は摩滅しておらず、敲打痕があり、赤色顔料（ベンガラ）が付着する。また、1848 は L 字状で、下面は摩滅し、下面の一部とその上部には赤色顔料（水銀朱）が付着する。このように、SD06 は弥生時代終末期に埋没する竪穴建物 7-7 区 SH01 や弥生時代に埋没する河川 SR01 を削平していることから、弥生時代の遺物も含むが、大部分の遺物は古墳時代後期（陶器須恵器編年 TK217 型式）に属することから、SD06 は古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD18 (図 216～218・243)

7-13 区で検出された溝である。調査時の遺構名も SD18 である。7-13 区南東端で SD06 から分岐する。途中で建物基礎による擾乱で削平される。また、SD23 から分岐する溝 SD19 と重複する。SD18 の埋没があとである。SD18 は検出長 17 m、幅 1.0～1.3 m、深さ 0.2～0.4 m である。埋土は粘質土で、砂礫

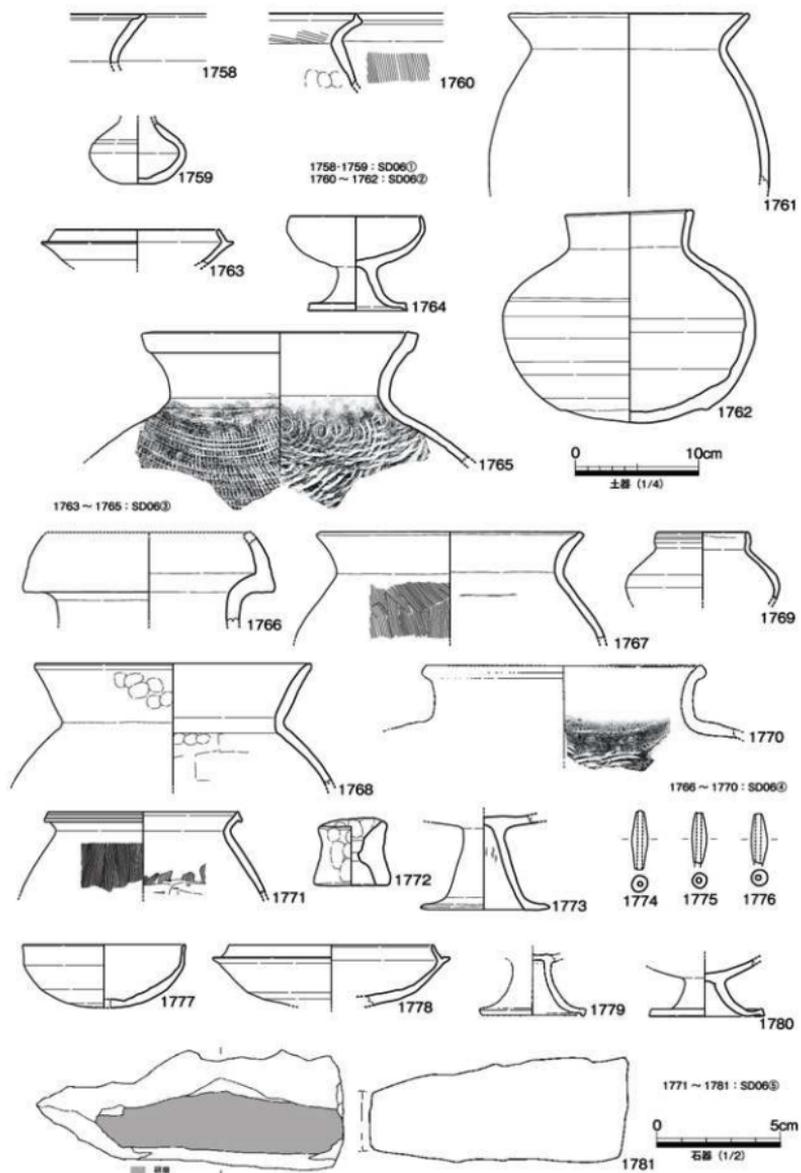


図 236 SD06(1)

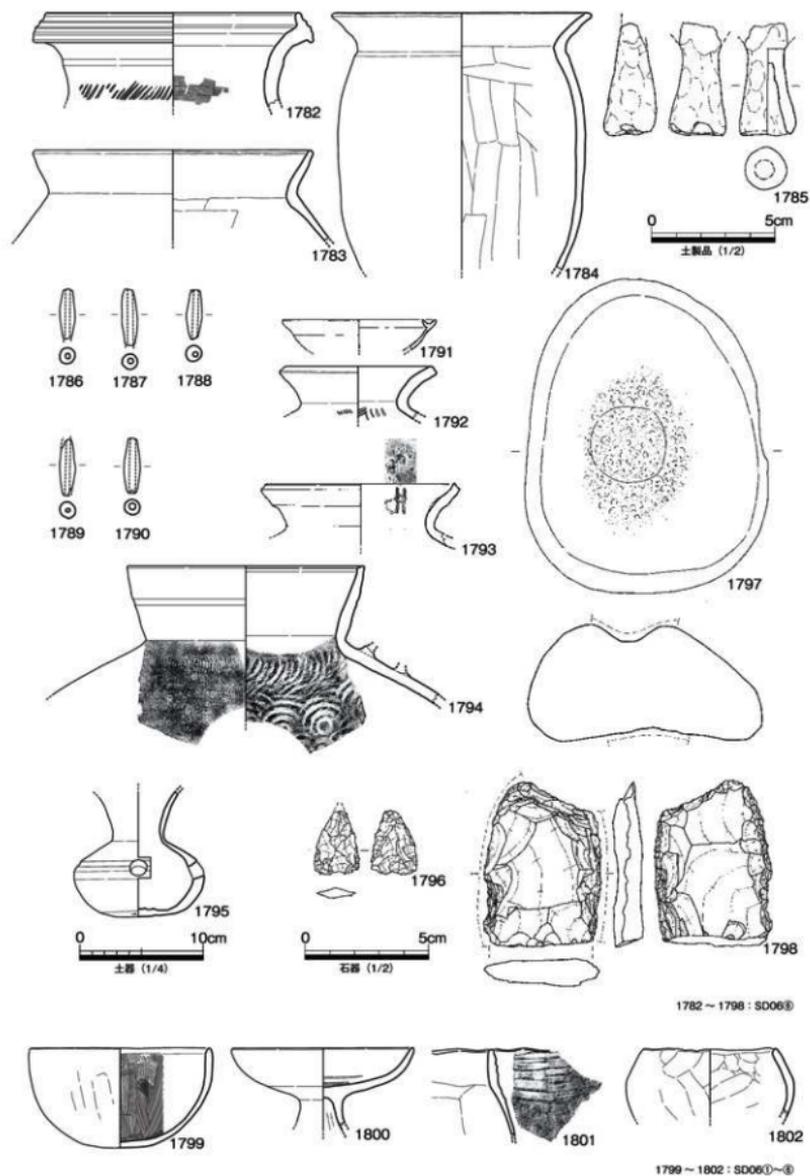


図 237 SD06(2)

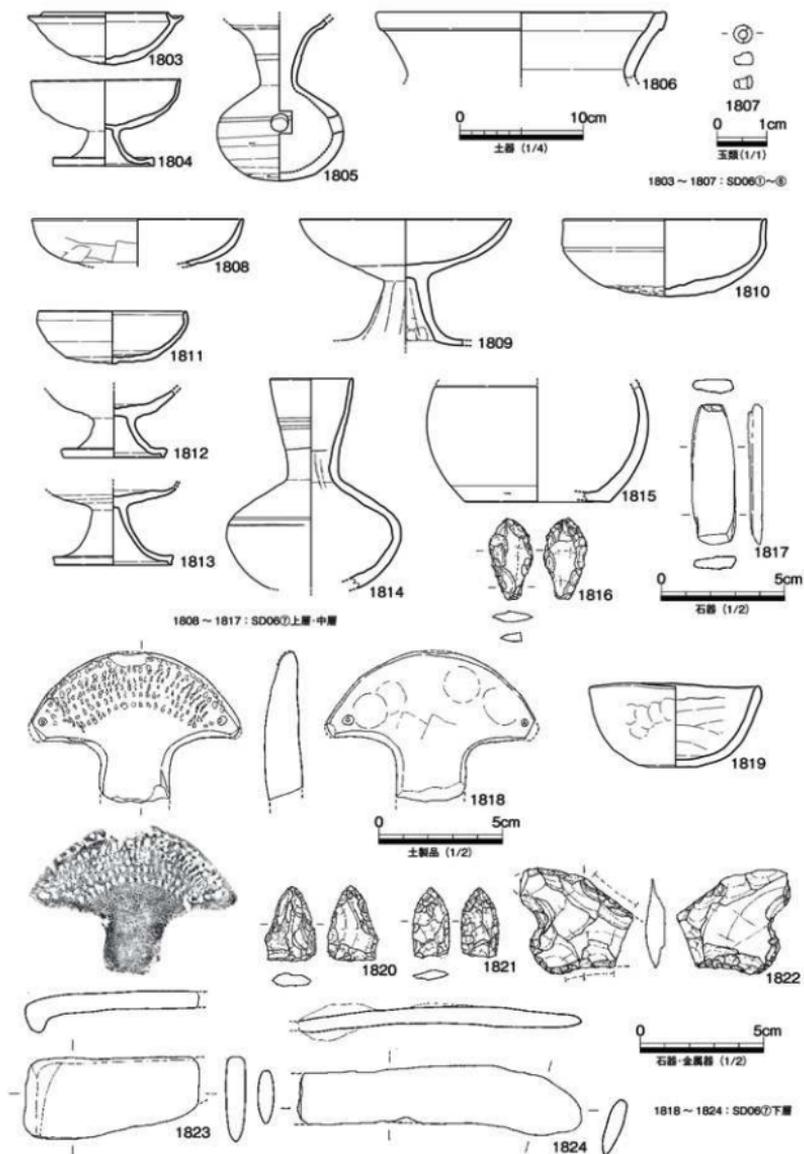


图 238 SD06(3)

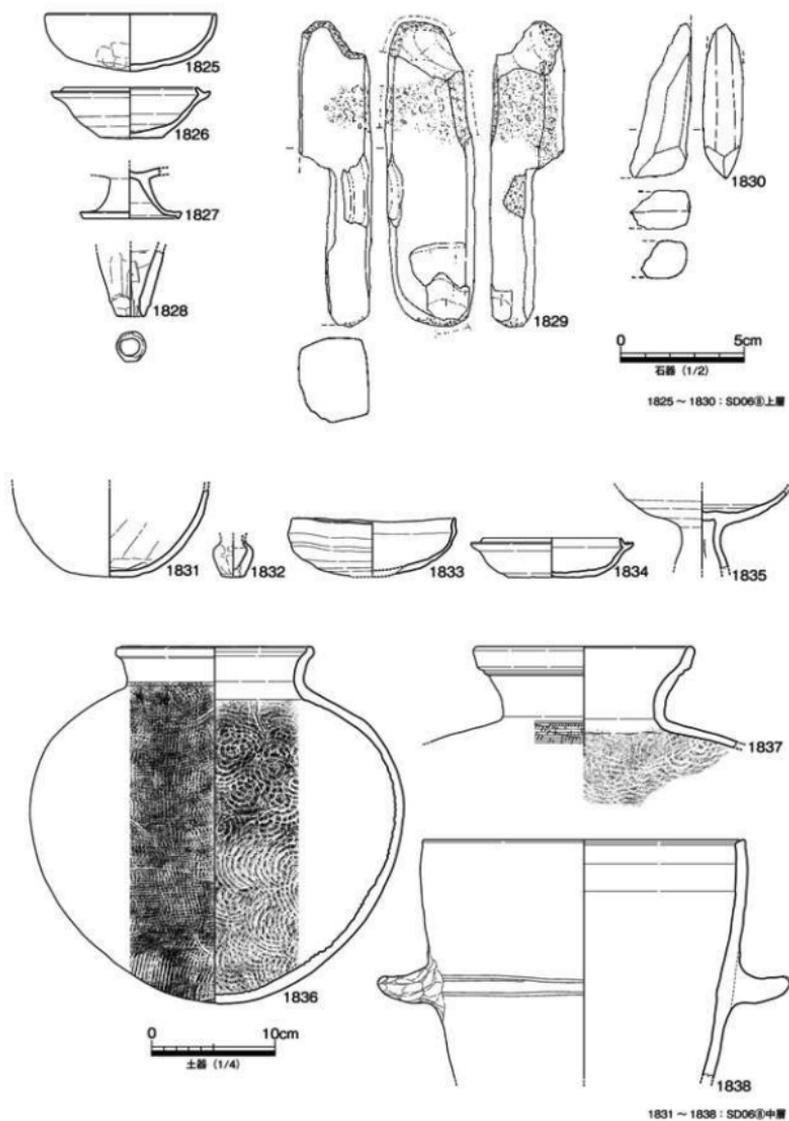


図 239 SD06(4)

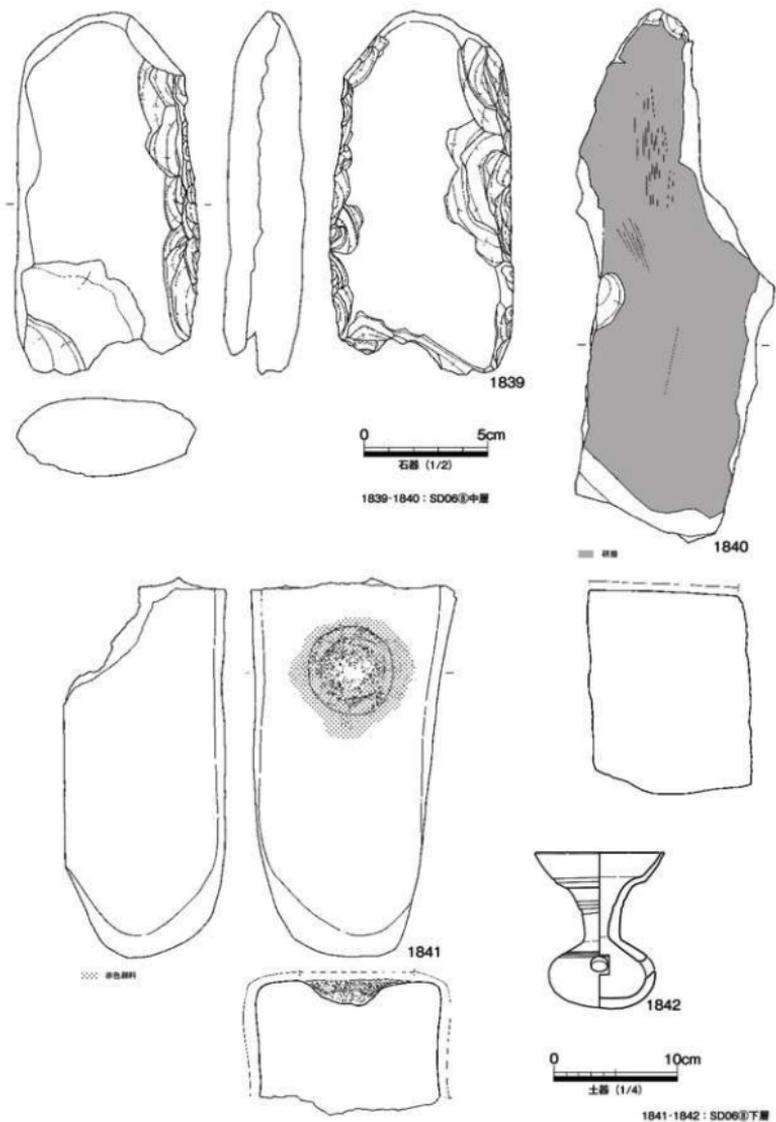


図 240 SD06(5)



1843

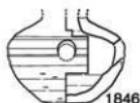


1844



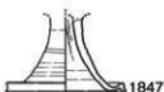
1845

1843 ~ 1845 : SD06③上層

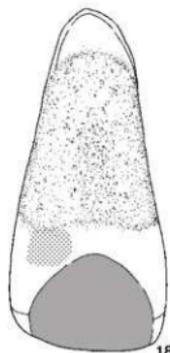
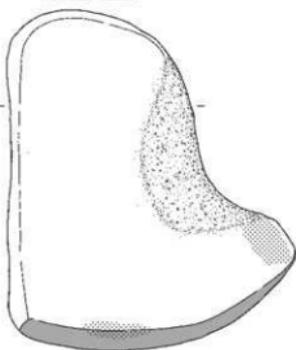
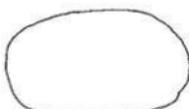


1846

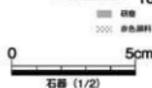
1846 : SD06③中層



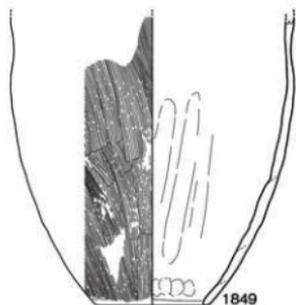
1847



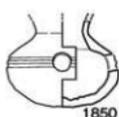
1848



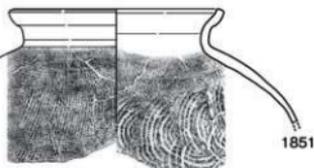
1847-1848 : SD06③下層



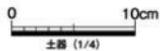
1849



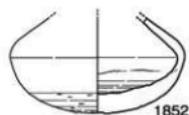
1850



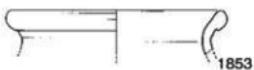
1851



1849 ~ 1851 : SD06③中層



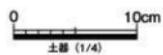
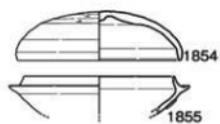
1852



1853

1852-1853 : SD06③下層

図 241 SD06(6)



1854 ~ 1856 : SD06(7)~⑧

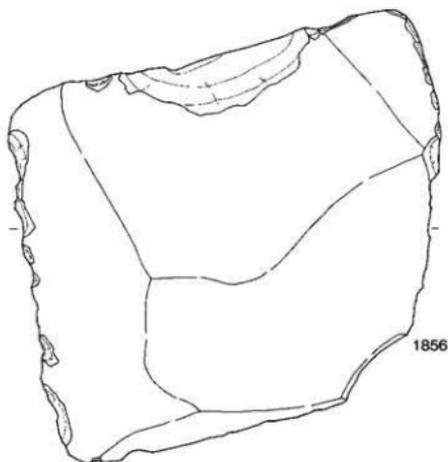
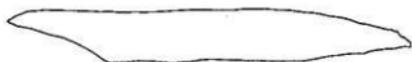
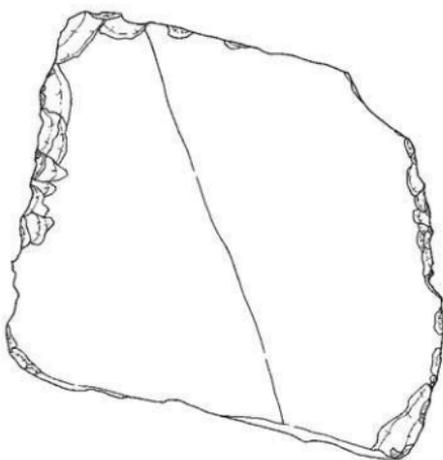


図 242 SD06(7)

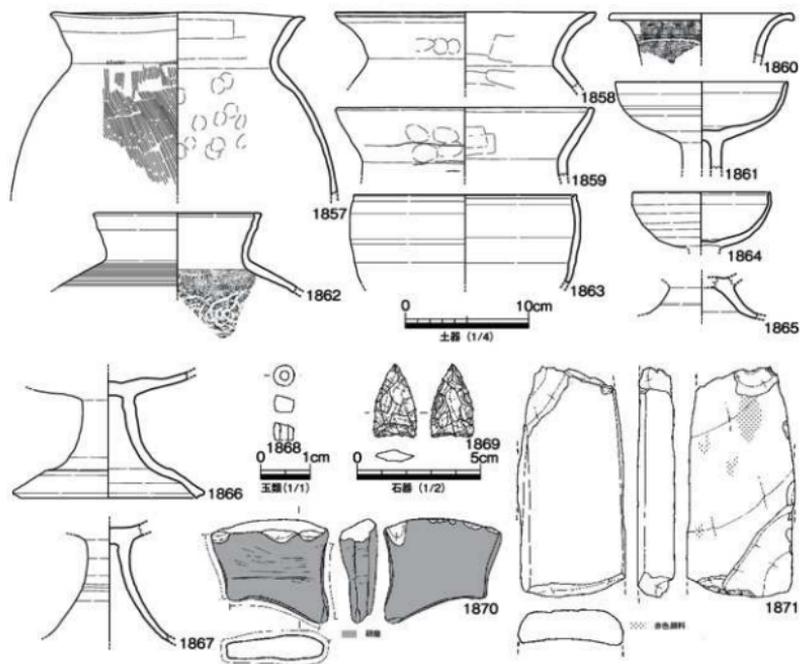


図 243 SD18

の堆積はみられない。遺物は土器・須恵器などが整理箱 1 箱程度出土した。1871 は磨製石斧の一部である。結晶片岩製で、割れ面の一部には赤色顔料（ベンガラ）が付着する。これらの遺物の中には弥生土器も含むが、大部分は古墳時代後期（陶邑須恵器編年 TK217 型式）に属することから、SD18 も古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD08 (図 216 ~ 218・244)

7-13 区で検出された溝である。調査時の遺構名は SD08 である。7-13 区南東端で、SD06 から分岐する溝である。SD08 は途中で建物基礎による攪乱で一部削平されるが、北西方向 (N40° W) に走る。SD08 の南端で SD06 から分岐する溝 SD34 と重複するが、最終埋没は SD08 のほうがあとである。SD08 は検出長 26 m、幅 1.0 ~ 1.2 m、深さ 0.3 m である。遺物は土器・須恵器片が整理箱 2 箱程度出土した。1872 ~ 1875 は上層、1876 は中層から出土した。1877 ~ 1888 の層位は不明である。上層から出土した 1873・1875 はいずれも 8 世紀のものであるが、8 世紀の遺物はこの 2 点だけであることから、上部の凹みに混入していたものと考えられる。SD08 の出土遺物の中には弥生時代のものみられるが、大部分は古墳時代後期（陶邑須恵器編年 TK217 型式）に属することから、SD08 も古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD34 (図 216 ~ 218・245 ~ 247)

7-13 区から 7-14 区にかけて検出された溝である。調査時の遺構名は 7-13 区では SD01、7-14 区では

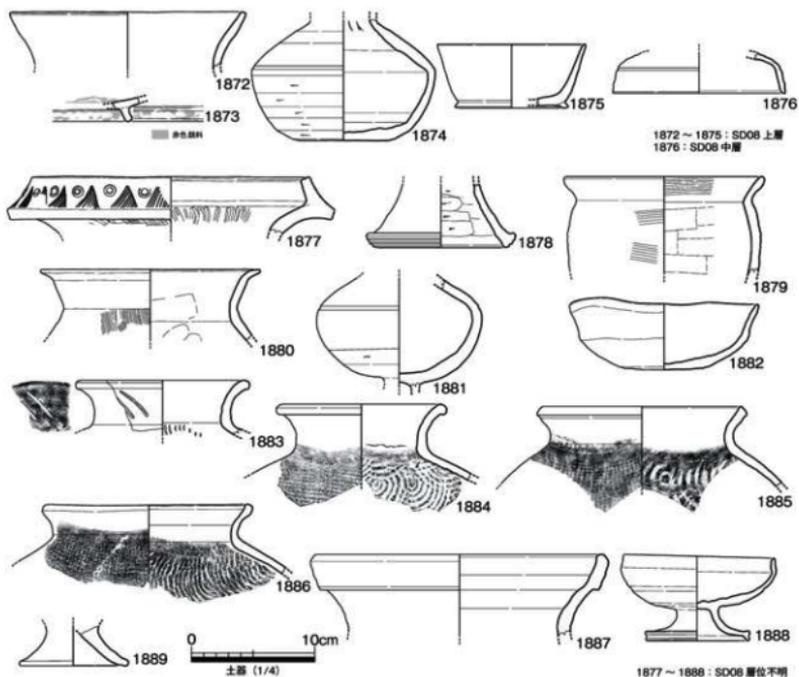


図 244 SD08

SD34である。SD34はSD06から分岐する溝である。同じくSD06から分岐する溝はSD08、SD18がある。これらの溝の中で中央に位置するSD08が最後に埋設する。また、7-14区北端では溝SD1410・SD1440と重複するが、両溝よりも古い。7-13区ではSD34では北西方向(N50°W)に走り、幅0.8m、深さ0.3m程度で、断面形はU字形である。7-14区に入るとL字状に屈曲し、北東方向(N20°E)に走る。この付近では、幅1.5～1.8m、深さ0.1～0.2m、断面形は浅い皿状となる。遺物は土器・須恵器などが整理箱6箱程度出土した。北(①)と南(②)に分けて報告する。1890～1910は①から、1911～1920は②から出土した。1892は弥生土器壺片で、線刻による文様がみられる。数条の縦線・横線・斜線がある。小破片のため、何を表したのかは不明であるが、建物の一部かもしれない。1912は須恵器蓋で、8世紀のものである。これらの遺物は弥生時代や奈良時代の遺物も含むが、大部分は古墳時代後期(陶器須恵器編年TK209～TK217型式)の遺物であることから、SD34は古墳時代後期のものと考えられる。

#### SD0807 (図 211～216・218・219)

7-7区西部から7-8区で検出された溝である。調査時の遺構名はSD07である。7-7区西端でSD06から分岐して西方に走り、7-8区中央部でSD23と重複する。SD23のほうが埋没は新しい。幅1.0～1.5m、深さ0.2mである。底面付近には多量の土器小片・小礫が堆積していた。遺物は土器・須恵器片が整理箱

X=135940

W=10000

X=135940

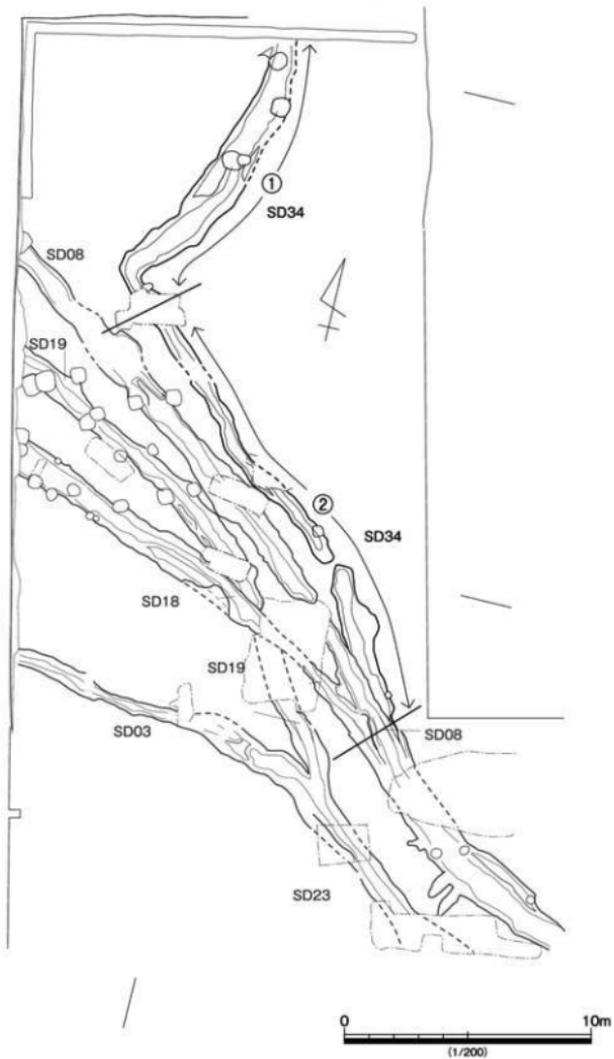


圖 245 SD34(1)

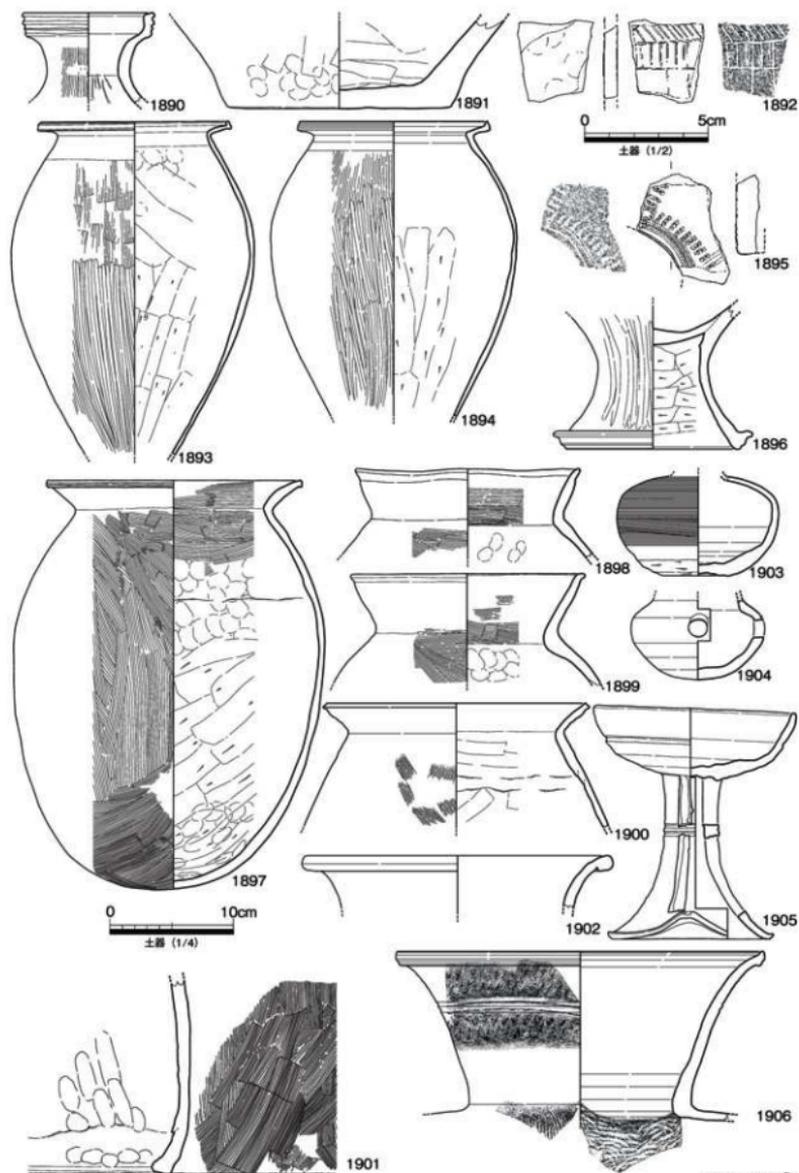


图 246 SD34(2)

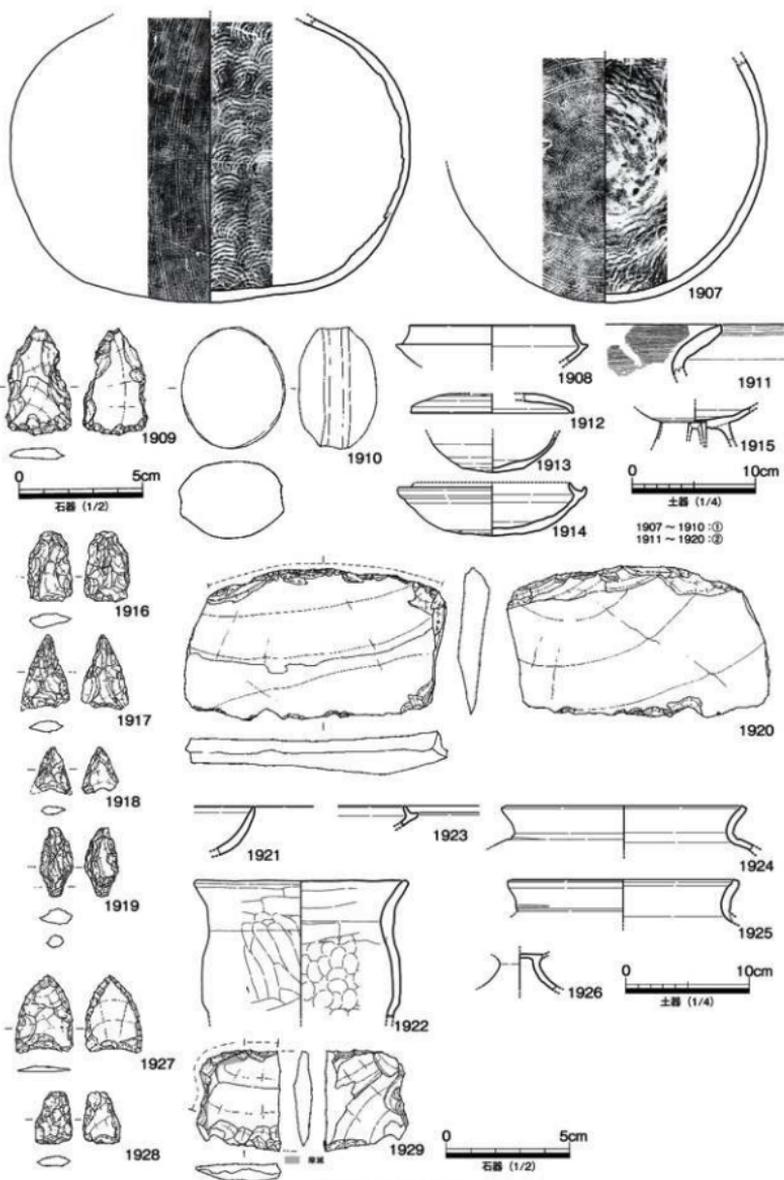


图 247 SD34(3)

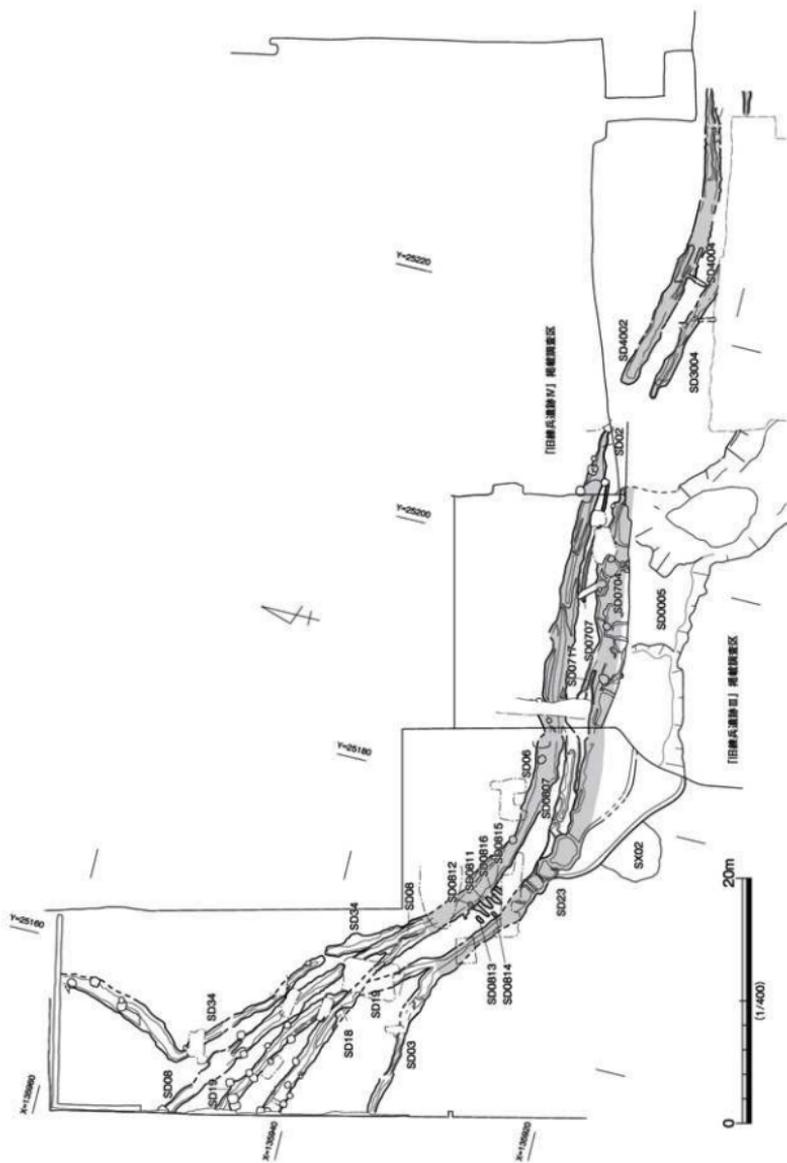


図 248 SD0811・SD0812・SD0813・SD0814・SD0815・SD0816(1)

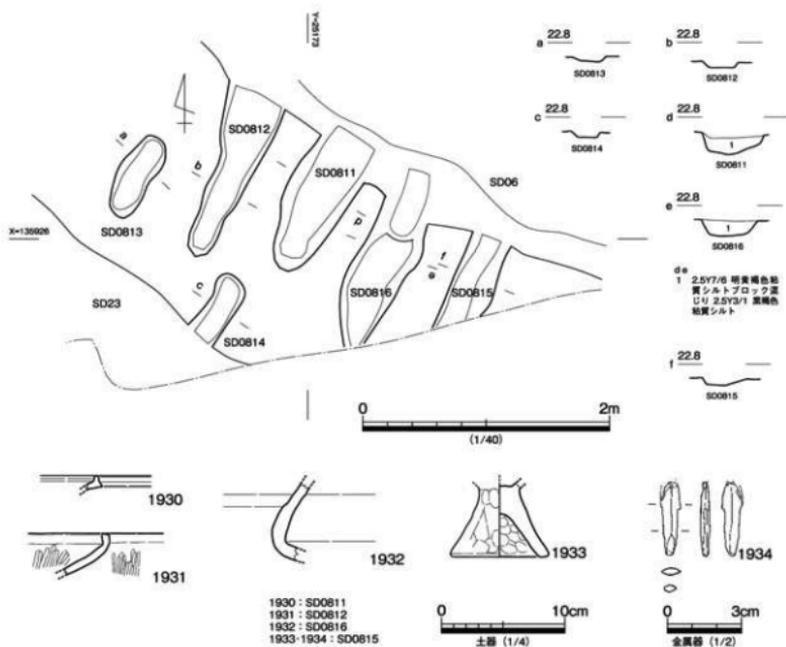


図 249 SD0811・SD0812・SD0813・SD0814・SD0815・SD0816(2)

1 箱程度出土した。弥生土器も含まれていたが、大部分の遺物は古墳時代後期（陶器須恵器編年 TK217 型式）に属することから、SD0807 は古墳時代後期のものと考えられる。

**SD0811・SD0812・SD0813・SD0814・SD0815・SD0816 (図 248・249)**

7-8 区 SD23 と SD06 に挟まれた場所で検出された溝群である。これらの溝はいずれも SD23 と SD06 に直交し、長さ 0.6 ~ 1.4 m、幅 0.2 ~ 0.5 m である。深さ 0.05 ~ 0.2 m で、底面は凸凹である。本書 7-7 区の南東部で検出された SD3004 と SD4002（『旧練兵場遺跡Ⅲ』で報告）は本書掲載の SD0704・SD23 と SD06 に連続すると考えられるが、両溝は 70 m にわたって 1.5 ~ 2.0 m 離れてほぼ平行に走る。7-7 区の一部や 7-8 区の北部、両溝の間を走る SD0807 の埋土には土器・須恵器の小破片や小礫が堆積していた。SD0811・SD0812・SD0813・SD0814・SD0815・SD0816 から弥生時代、古墳時代後期の土器・須恵器などの小破片が出土した。1934 は鋼鐵である。先端は欠損する。両溝は 70 m にわたって平行に走ることから、両溝に挟まれた幅 1.5 ~ 2.0 m の部分は道路状遺構で、これらの溝群は道路状遺構に伴う関連遺構の可能性が考えられる。

7. 河川

**SR01 (図 250 ~ 270)**







図 252 SR01(3)

SR01は本書で報告する調査区のはほぼ中央、7-7・7-8・7-13・7-14区で検出された河川跡である。SR01は「旧練兵場遺跡Ⅱ」でSR02・SR01、「旧練兵場遺跡Ⅲ」でJ区SR4002・J区SR4001、「旧練兵場遺跡Ⅳ」でもSR01と報告された河川と連続する。第28次調査によって「旧練兵場遺跡Ⅱ」で報告された河川と「旧練兵場遺跡Ⅲ」で報告された河川は連続することがわかった。

SR01は「旧練兵場遺跡Ⅲ」に掲載された調査区の北端では幅7.0m、断面形は浅い皿状で、深さ0.3mである。この河川は「旧練兵場遺跡Ⅳ」でもSR01と報告された。同書で報告された7-6・7-4・7-5・7-3区では南から北西に向かって走り、幅5～9m、断面形は浅い皿状で、深さ0.5～0.7m、底面の標高は22.3～22.6mである。北西に向かったSR01は北接する第19次調査区（「旧練兵場遺跡Ⅱ」でもSR01）に入り、南向きに蛇行して、第28次調査7-10・7-11区（「旧練兵場遺跡Ⅵ」に掲載予定）に入り、本書掲載調査区である第28次調査7-7区・7-8区・7-13区・7-14区を通して、普通寺市教育委員会が平成11年度に老人ホーム建設に伴って調査した第17次調査区の北東部を通り、再び第19次調査区の北部に入る。第19次調査区の北部で検出された河川は両河川の関係が不明であったため、南部で検出された河川とは別名で、SR02と報告されている。なお、SR01の南部は「旧練兵場遺跡Ⅲ」の調査区に連続するが、同書ではSD4001・4002等の溝は灌漑水路の可能性が高いとし、これらの溝は河川SD0007・SR4001に接続していると報告されている。

本書に掲載する第28次調査区では、SR01はV字状に蛇行する。本書掲載調査区では検出長85m、幅8～13m、断面形は浅い皿状で、深さ0.6～0.7mである。埋土は下層・中層・上層・最上層の4層に大別できる。下層は厚さ0.2～0.3mの黒褐色粘質シルトで、弥生時代前期から中期後半の土器を含む。中層は厚さ0.3～0.5mのいぶい黄褐色粘質シルトで、弥生時代中期後半の土器を含む。SR01は中層の堆積で埋土の堆積はほぼ終了するが、凹みが後世まで残り、凹みには黒褐色粘質シルト（上層）、その上部には7-13・7-14区では褐灰色シルト（最上層）、7-8区では灰白色砂質シルト混じり黒褐色粘質シルト（最上層）が堆積する。なお、7-8区では古墳時代後期から奈良時代の溝SD23やSD06の遺構検出は上層を除去した状態で行ったが、これらの遺構はSR01埋土上層とする黒褐色粘質シルト層の途中あるいは黒褐色粘質シルト層の上面から掘られている可能性が高い。その上部には最上層とする土層が堆

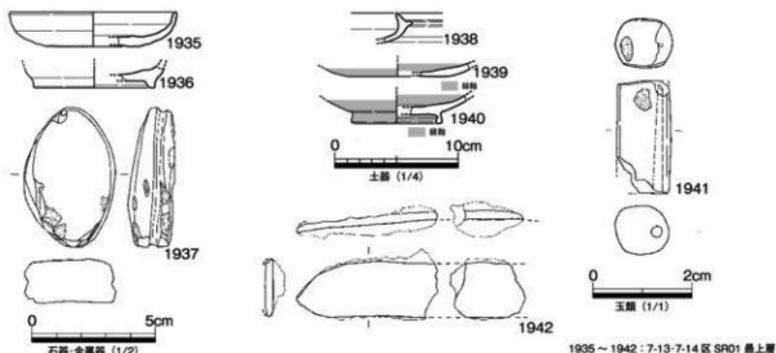


図 253 SR01(4)

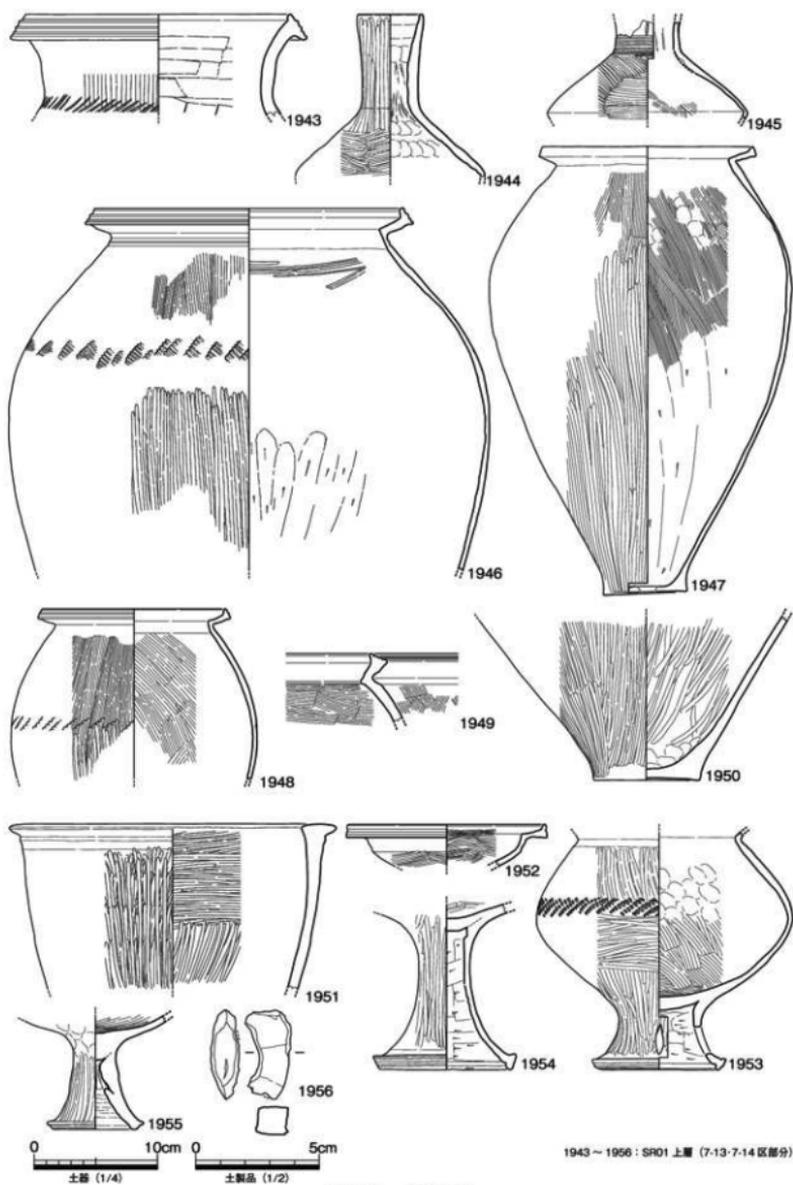


图 254 SR01(5)

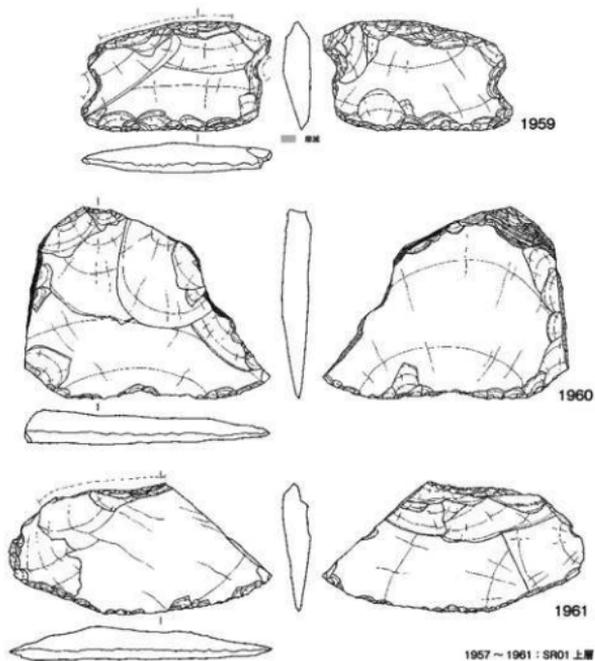
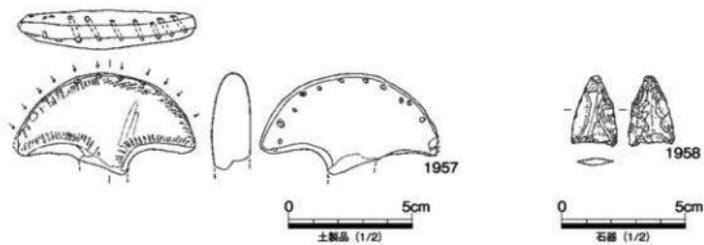


图 255 SR01(6)

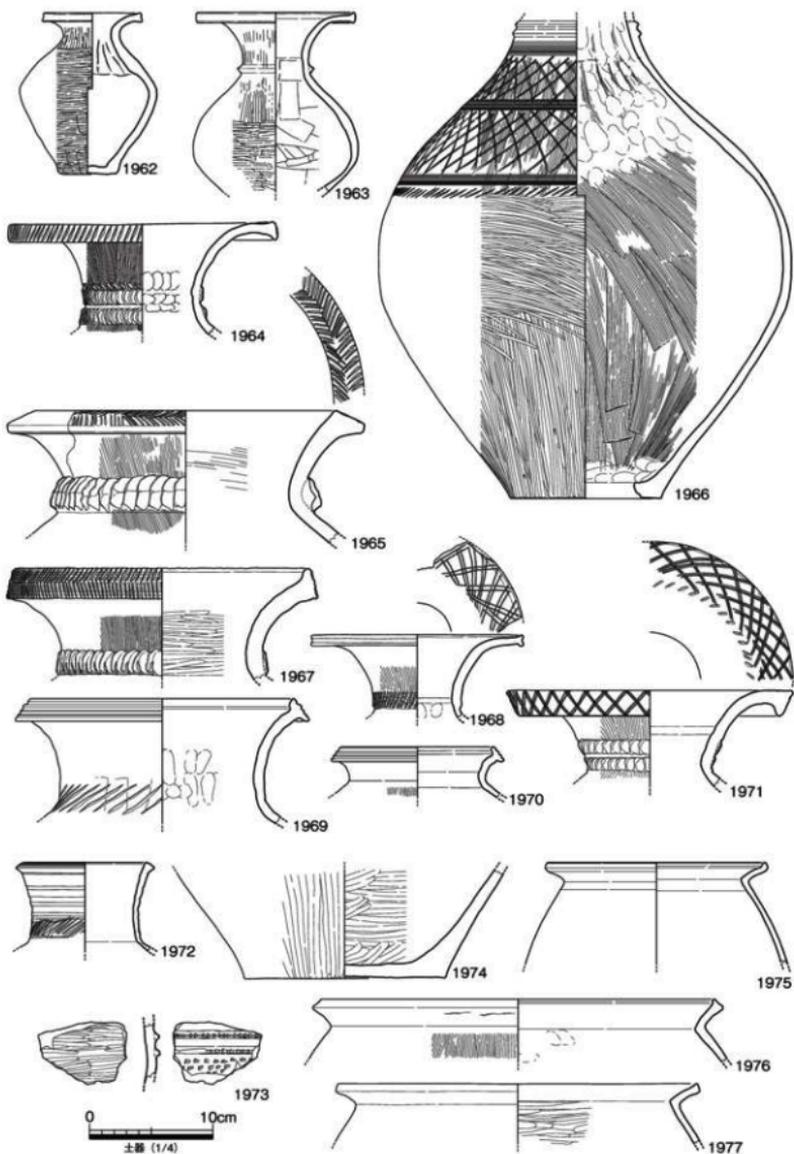


图 256 SR01(7)

1962 ~ 1977 : SR01 中層 (7-13-7-14 区部分)

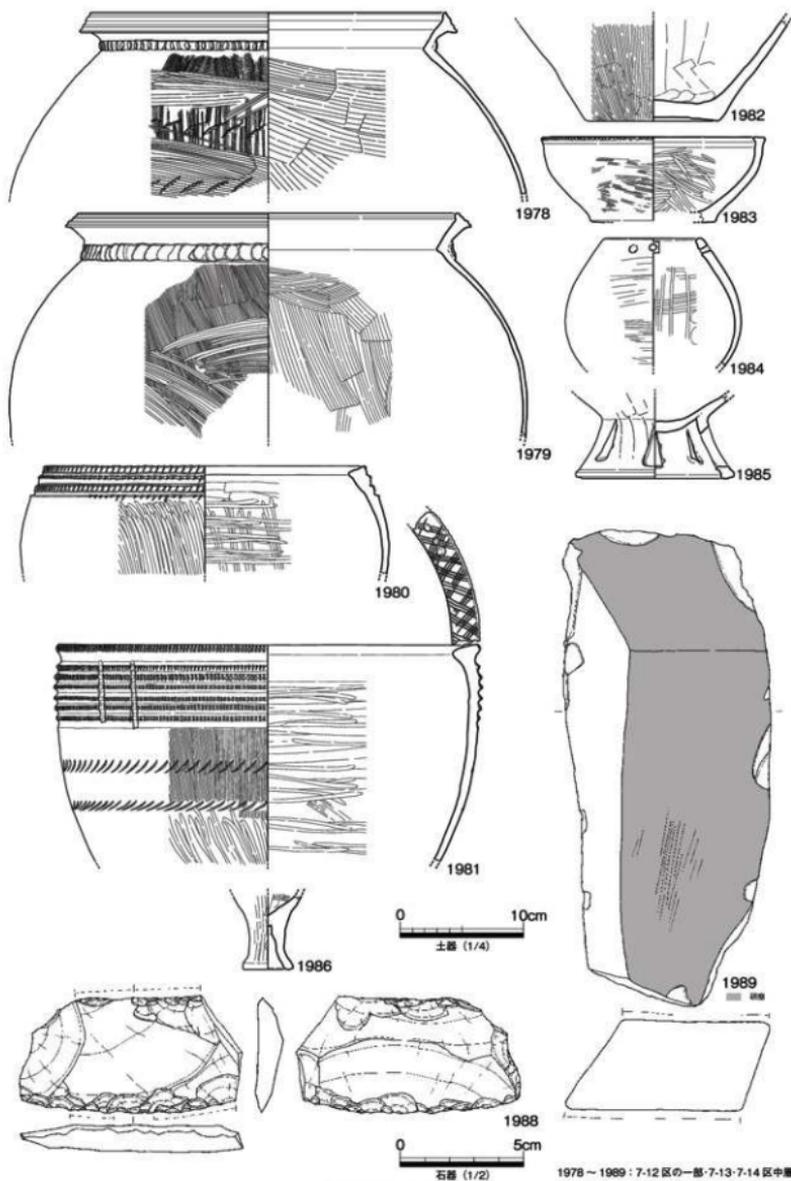


図 257 SR01(8)

1978～1989：7-12区の一部・7-13・7-14区中層

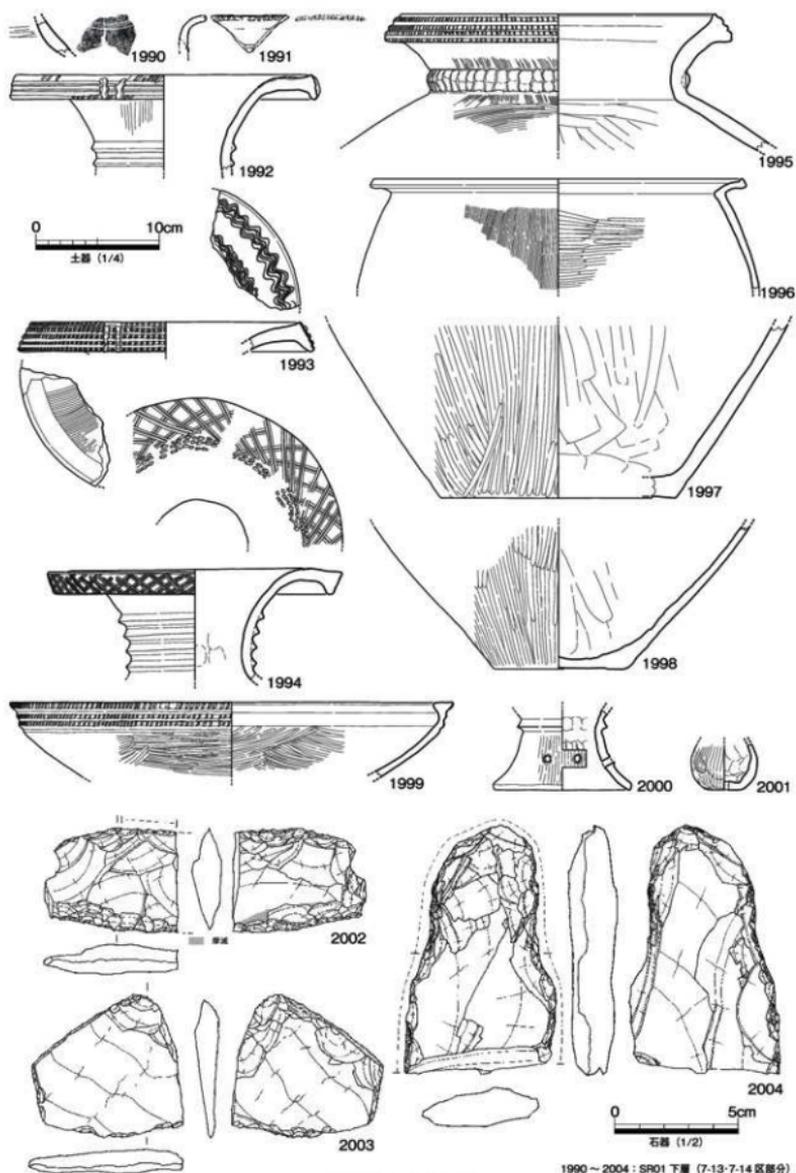


图 258 SR01(9)

1990 ~ 2004 : SR01 下層 (7-13-7-14 区部分)

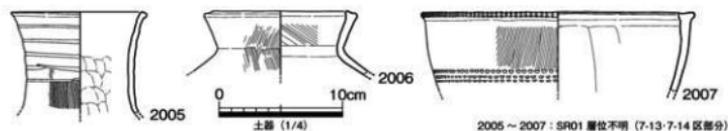


図 259 SR01(10)

積するが、各調査区で土質・土色が異なることから、最上層の堆積時期にはかなり差があると考えられる。また、7-8 区の北東部、上層の下部では土器集積が 2 か所 (SX04・SX05) みられた。調査は 7-7 区では上層・中層・下層の大半を掘削機械、7-8 区では上層を人力、中・下層の大半を機械、7-13・7-14 区では上層・中層の大半を機械で掘り下げた。

SR01 からの出土遺物は 7-13・7-14 区では 23 箱程度、7-8 区では整理箱 15 箱程度、7-7 区では 6 箱程度出土した。1935～1942 は 7-13・7-14 区最上層、1943～1961 は SR01 (7-13・7-14 区部分) 上層、1962～1986・1988・1989 は SR01 (7-12 区・7-13 区・7-14 区部分) 中層、1990～2004 は SR01 (7-13・7-14 区部分) 下層から出土した。2005～2007 は 7-13・7-14 区から出土したが、層位は不明である。2008～2029 は 7-8 区で検出された SR01 上層下部の土器集積 SX04 から出土した遺物で、2030～2035 は土器集積 SX05 から出土した遺物である。また、2060～2114 は SR01 中層上部～上層 (7-8 区部分) で出土した。2115～2128 は SR01 中層 (7-8 区部分)、2129～2156 は SR01 下層 (7-8 区部分) から出土した。2157～2162 は 7-8 区部分で出土したが、層位は不明である。2193 は SR01 最上層 (7-7 区部分)、2163～2183 は SR01 中層 (7-7 区部分)、2184～2192 は SR01 下層 (7-7 区部分)、2194～2197 は SR01 最下層 (7-7 区部分) から出土した。

1939 は緑軸陶器皿、1940 は緑軸陶器碗である。いずれも篠塚で生産された 10 世紀のものと考えられる。1937 は有溝石錘で、側面に溝がある。流紋岩製である。1941 は碧玉製の玉である。下部は欠損する。側面は面取りされる。下部には径 3mm の円孔がみられるが、上部は細くなり、径 1mm となる。また、円孔のある付近は欠損しているが、円孔は途中で止まっており、上部まで突き抜けていないことがわかる。1942 は鉄製の鎌である。1990 は弥生土器壺、1991 は弥生土器甕で、いずれも弥生時代前期のものである。2045 は弥生土器壺の口頸部で、頸部には多条の沈線が施される。胎土は黄色である。吉備地方からの搬入品である。2069・2071 は弥生土器高杯の脚部で、外面には櫛歯直線文が施される。これらも吉備地方からの搬入品である。2083 は土製品である。上部には円孔があり、外面には丁寧な研磨が施される。2139 は弥生土器壺の口頸部である。複合口縁で、口縁部の下部と上部には刻み目が施される。旧練兵場遺跡周辺ではこのような形態の土器はみられないが、岡山県北部に類例が認められる。

最上層から出土した 7-13 区・7-14 区の土器は古墳時代後期から 10 世紀のもので、上層から出土した遺物は弥生時代中期後半から後期前半、中層から出土した遺物は弥生時代中期後半のもので占められる。下層・最下層から出土した遺物は弥生時代前期の土器を少量含むが、弥生時代中期後半のもので占められる。また、7-8 区では中層の埋土上面で弥生時代中期後半の土坑 SP268 が検出されたことから、中期後半までに中層の堆積が終わったことがうかがわれる。なお、上層の堆積層と遺構埋土の区別は難しく、上層の上面あるいは上部から掘り込まれている遺構の検出は上層を掘り下げた段階で行っていることから、上層の堆積時期については再検討の余地がある。このように SR01 の埋没は弥生時代中期から始まり、

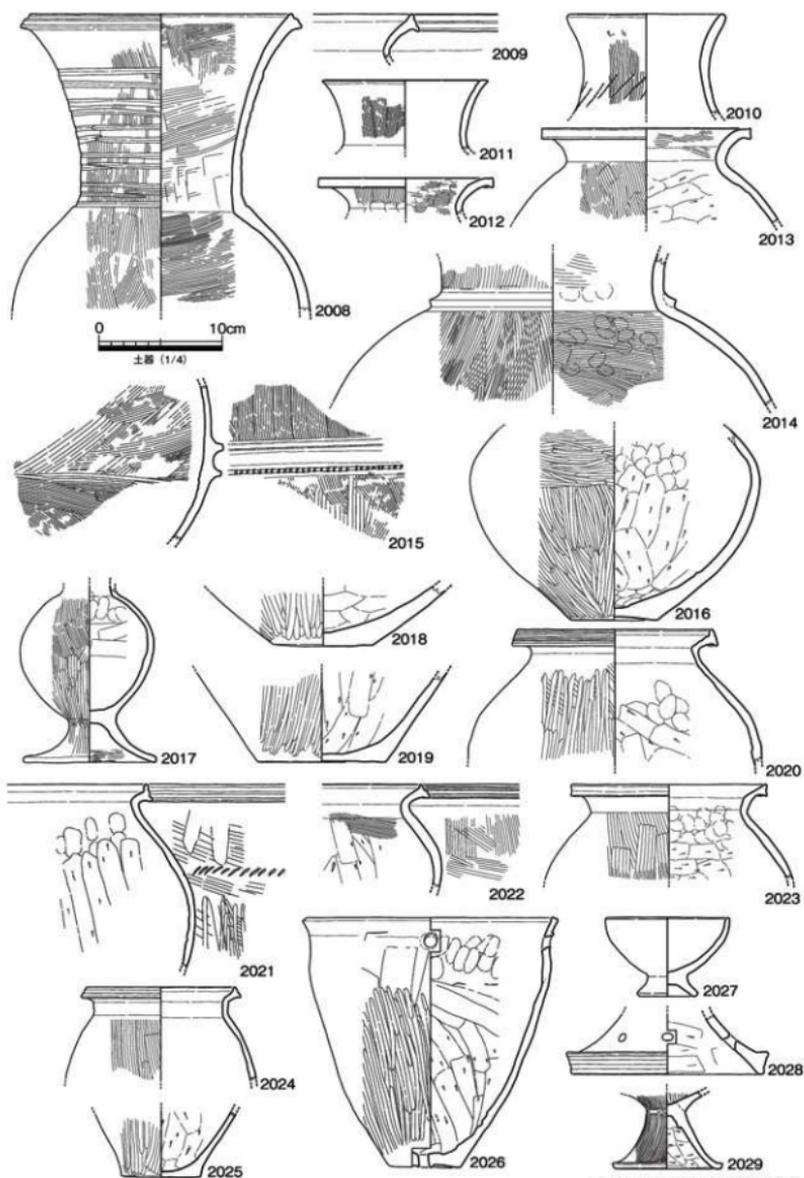


图 260 SR01(11)

2008 ~ 2029 : SR01 (7-8区 SX04 部分)

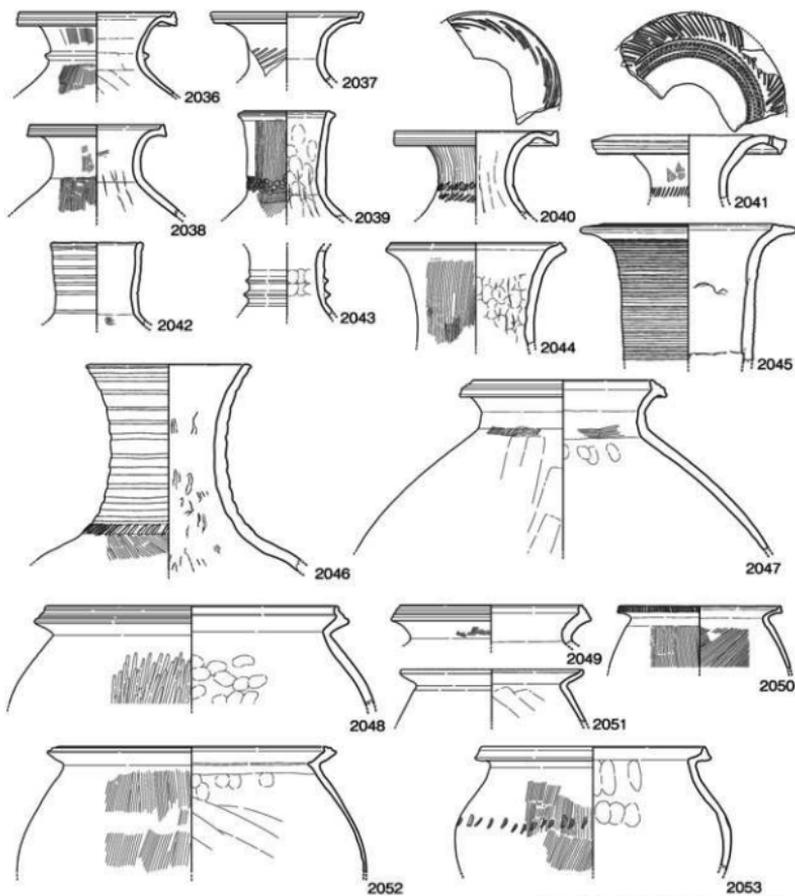
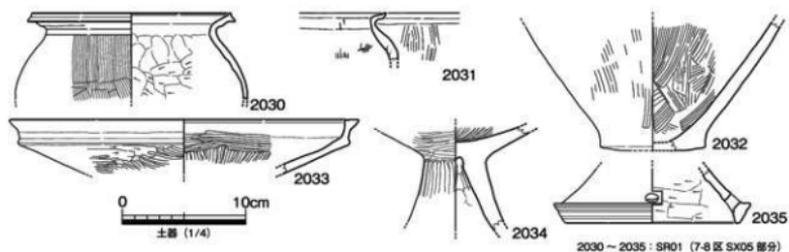
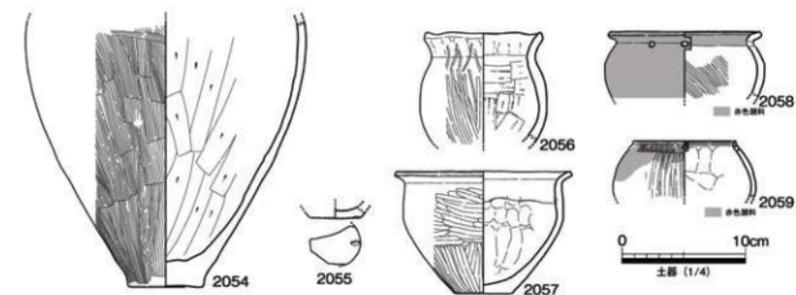
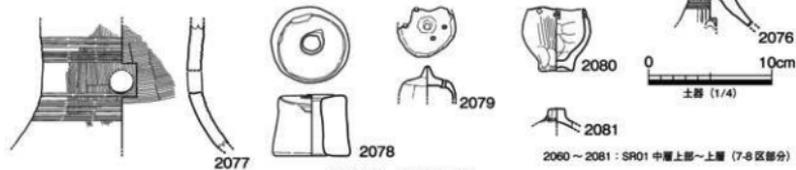
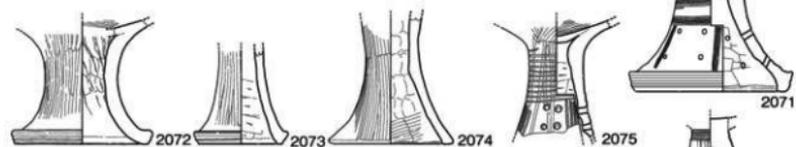
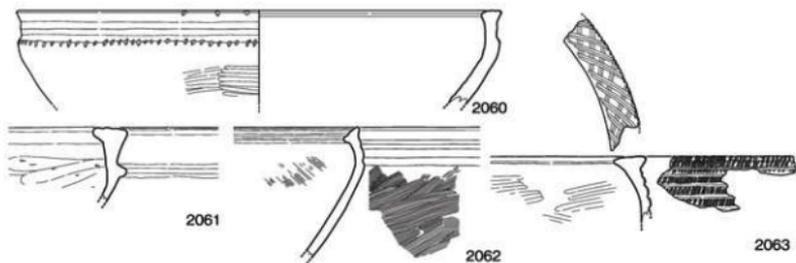


图 261 SR01(12)



2054 ~ 2059 : SR01 層位不明 (7-13-7-14 区部分)



2060 ~ 2081 : SR01 中層上部~上層 (7-8 区部分)

图 262 SR01(13)

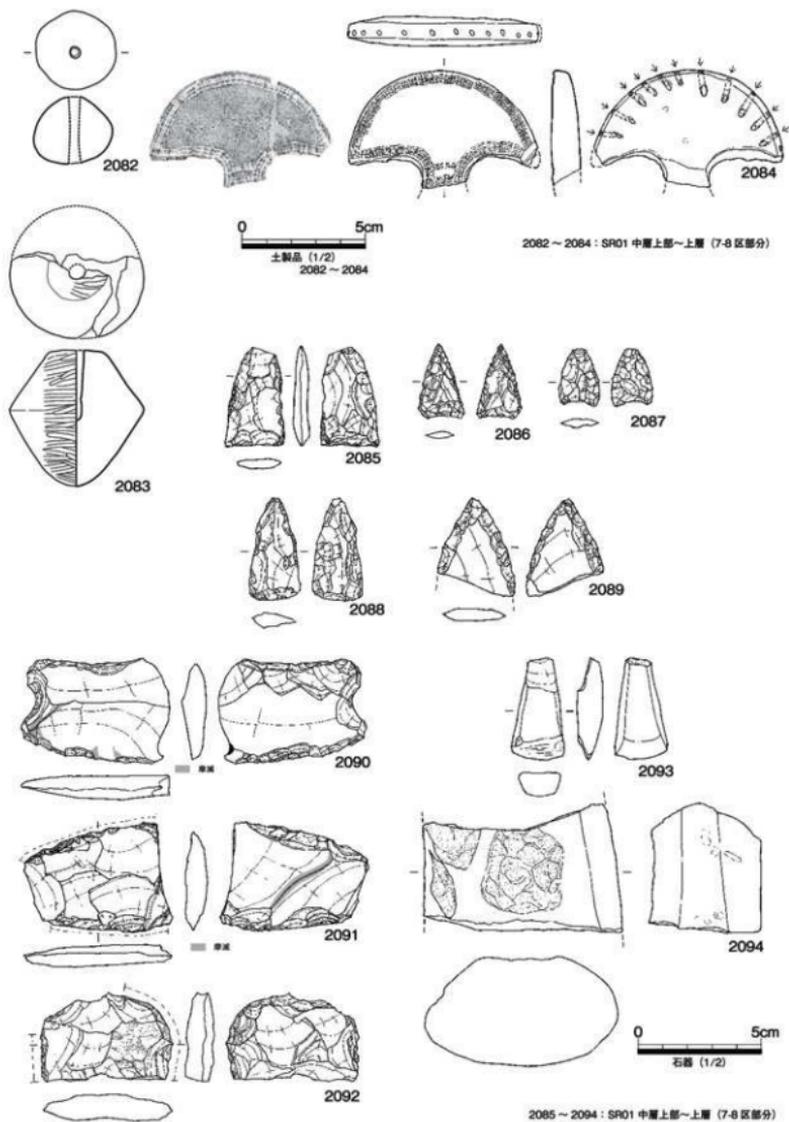


図 263 SR01(14)

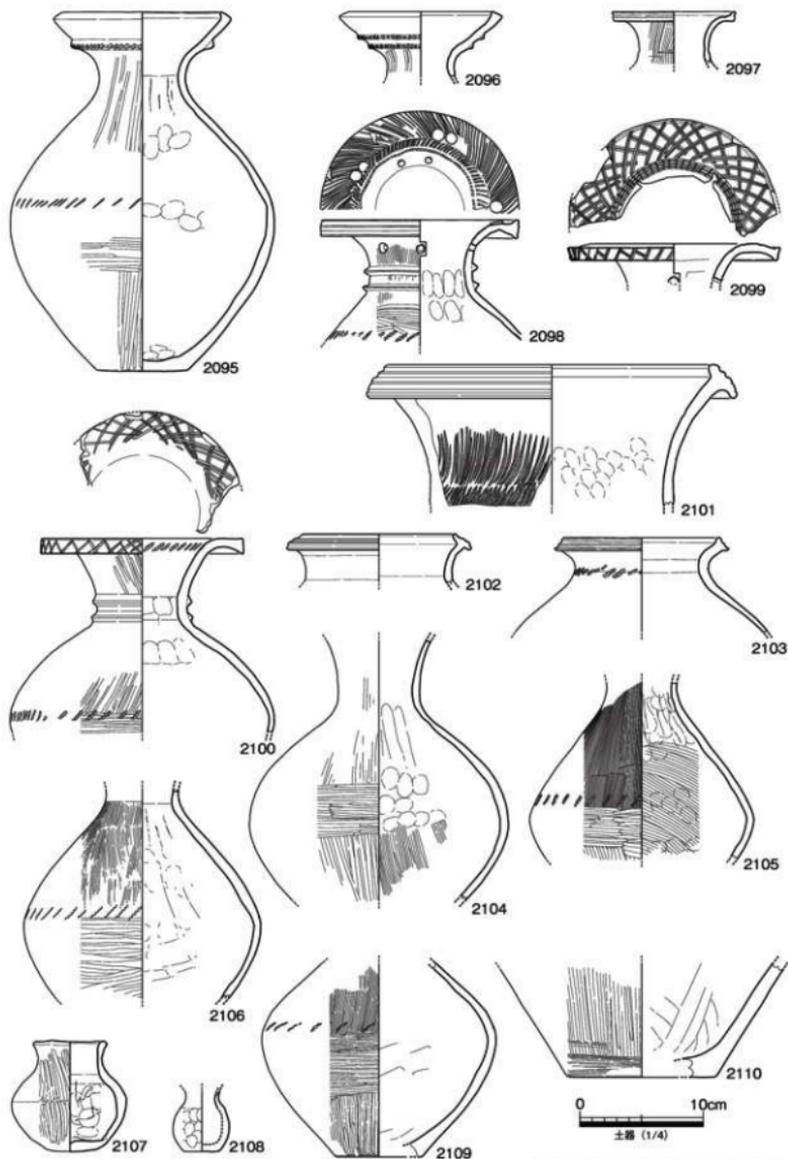
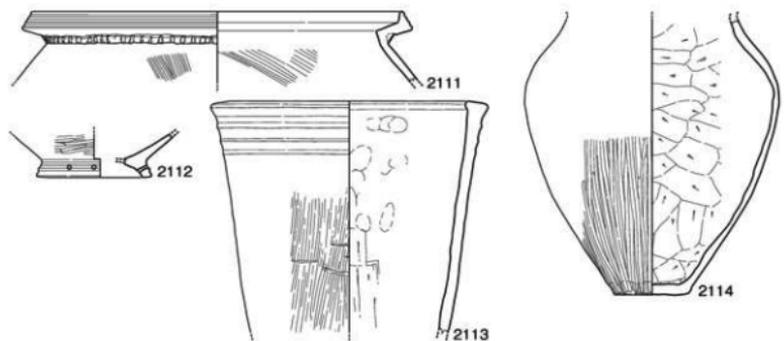
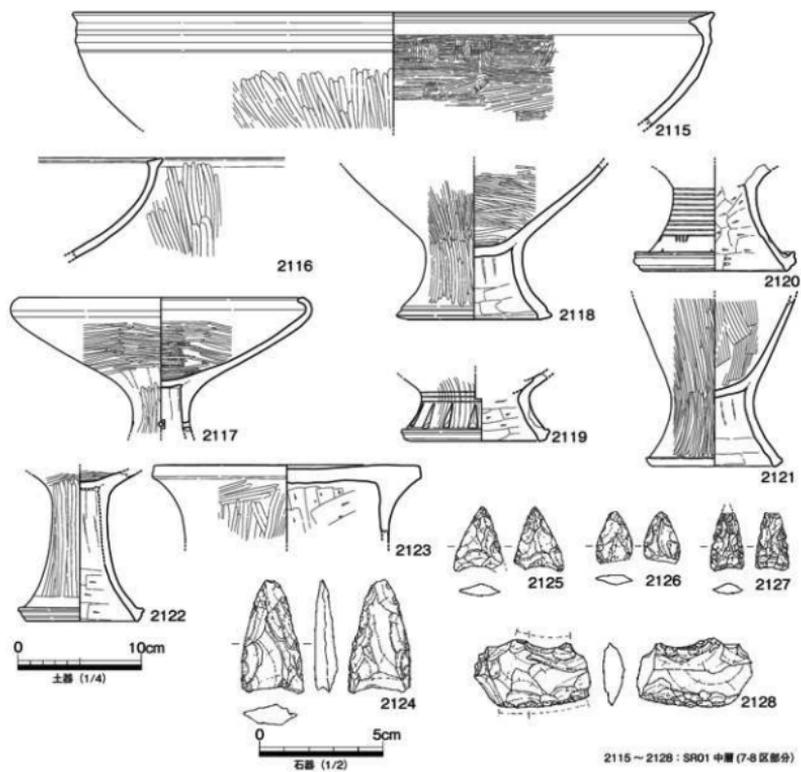


图 264 SR01(15)

2095 ~ 2110 : SR01 中層上部 ~ 上層 (7-8 区部分)



2111 ~ 2114 : SR01 中層上部~上層 (7-8区部分)



2115 ~ 2128 : SR01 中層 (7-8区部分)

図 265 SR01(16)

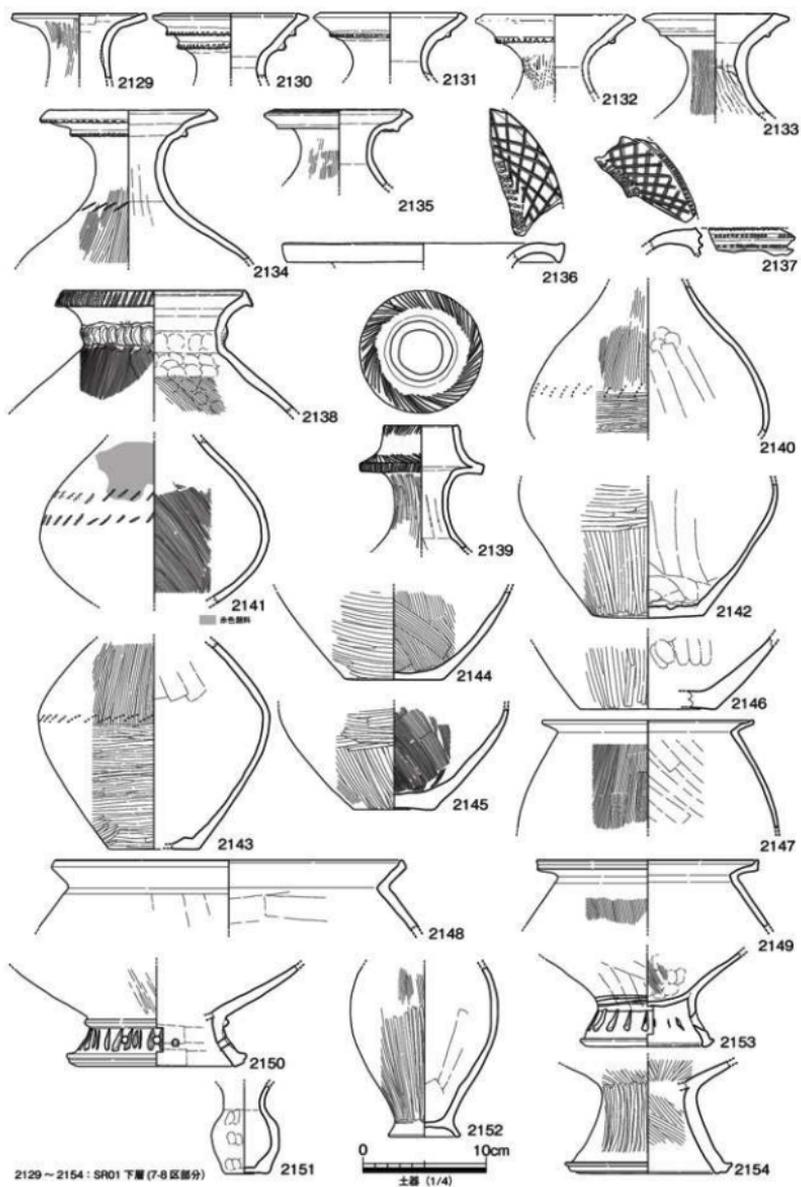


图 266 SR01(17)

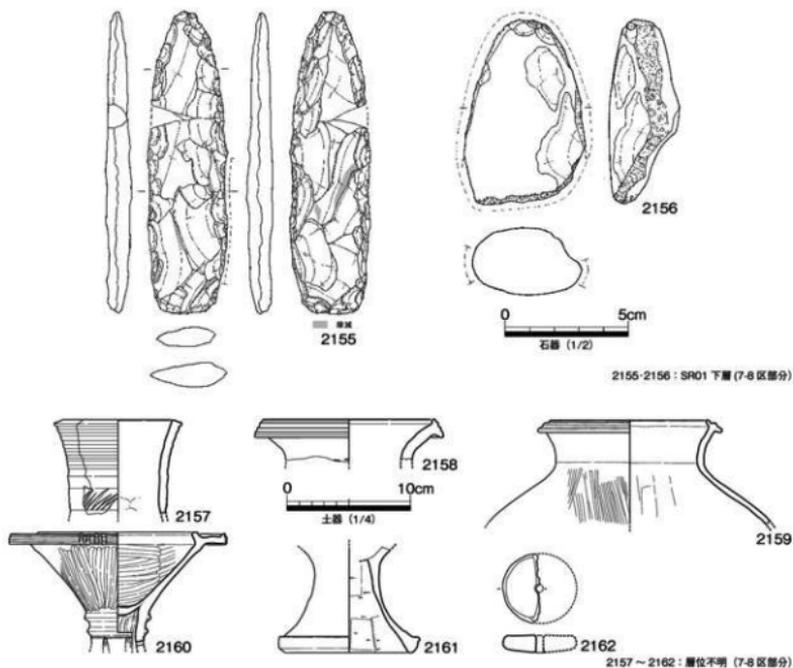


図 267 SR01(18)

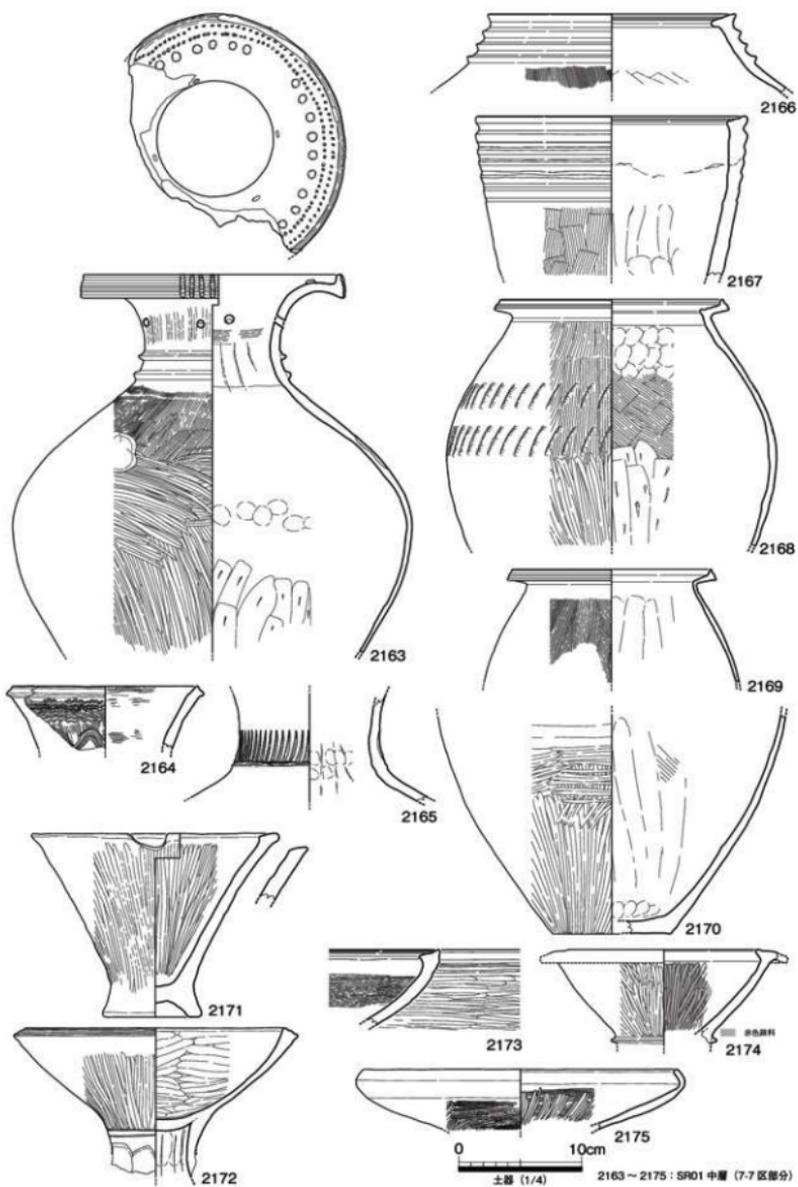
大部分は弥生時代後期前半までに埋没したが、一部の凹みが古代まで残ったものと考えられる。

#### 8. 遺構に伴わない遺物 (図 271 ~ 276)

遺構に伴わない遺物を調査区ごとに報告する。2198 ~ 2221 は 7-2 区から出土した。2202・2203 は土師器杯で赤色顔料が付着する。8 世紀のものである。2204 は 12 世紀後半の土師器小皿、2206 は 13 世紀前半の十瓶山産の須恵器碗、2205 は 12 世紀の黒色土器碗、2209 は 12 世紀末から 13 世紀初頭の十瓶山産のこね鉢である。2211・2212 は 13 世紀の十瓶山産の碗である。2215 は 13 世紀の吉備系土師器碗である。2213 は中国製青磁の口縁部片、2214 は中国産青磁碗の破片で、体部に鎬蓮弁がみられる。13 ~ 14 世紀のものである。2216 は中国産青磁碗の底部片で、底部内面に櫛目がある。同安窯製で、12 ~ 13 世紀のものである。2221 はガラス製の小玉である。

2222 ~ 2248 は 7-7 区で出土した遺物である。2223 は弥生土器で、鋸歯文と刻み目がヘラ描きで表現される。2223 は弥生土器壺で外面には赤彩があり、ヘラ描きがみられる。2224 は弥生時代後期初頭の高杯で、赤彩がある。吉備からの搬入品である。2231・2232 は 8 世紀の土師器皿で、2231 は赤彩（ペンガラ）がある。2246 はガラス製の管玉、2247 はガラス製の小玉、2248 は滑石製の白玉である。

2249 ~ 2300 は 7-8 区で出土した遺物である。2251 は弥生土器高杯で赤彩がある。弥生後期前半のも



2163 ~ 2175 : SR01 中層 (7-7 区部分)

图 268 SR01(19)

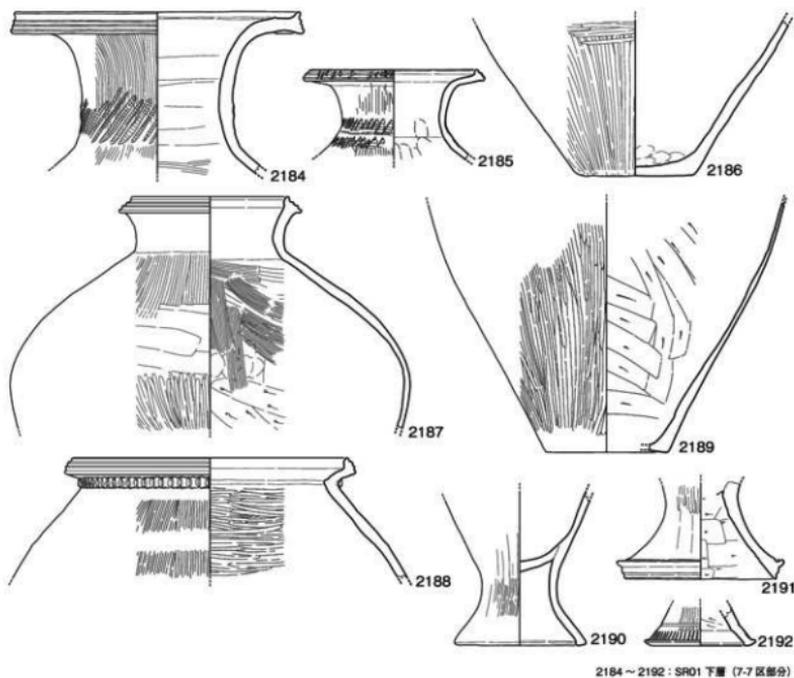
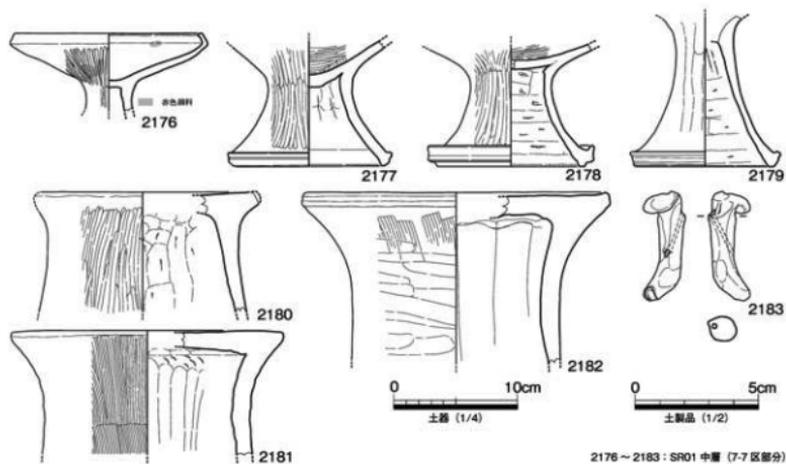


图 269 SR01(20)

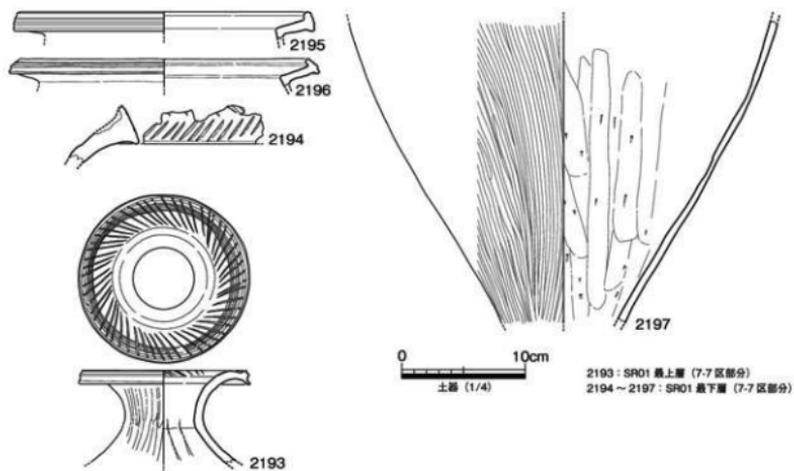


図 270 SR01(21)

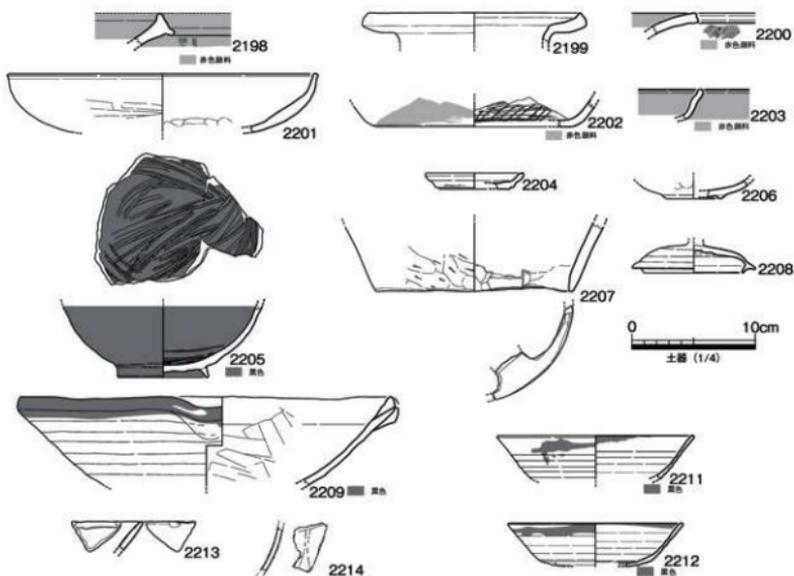


図 271 7-2区遺構に伴わない遺物

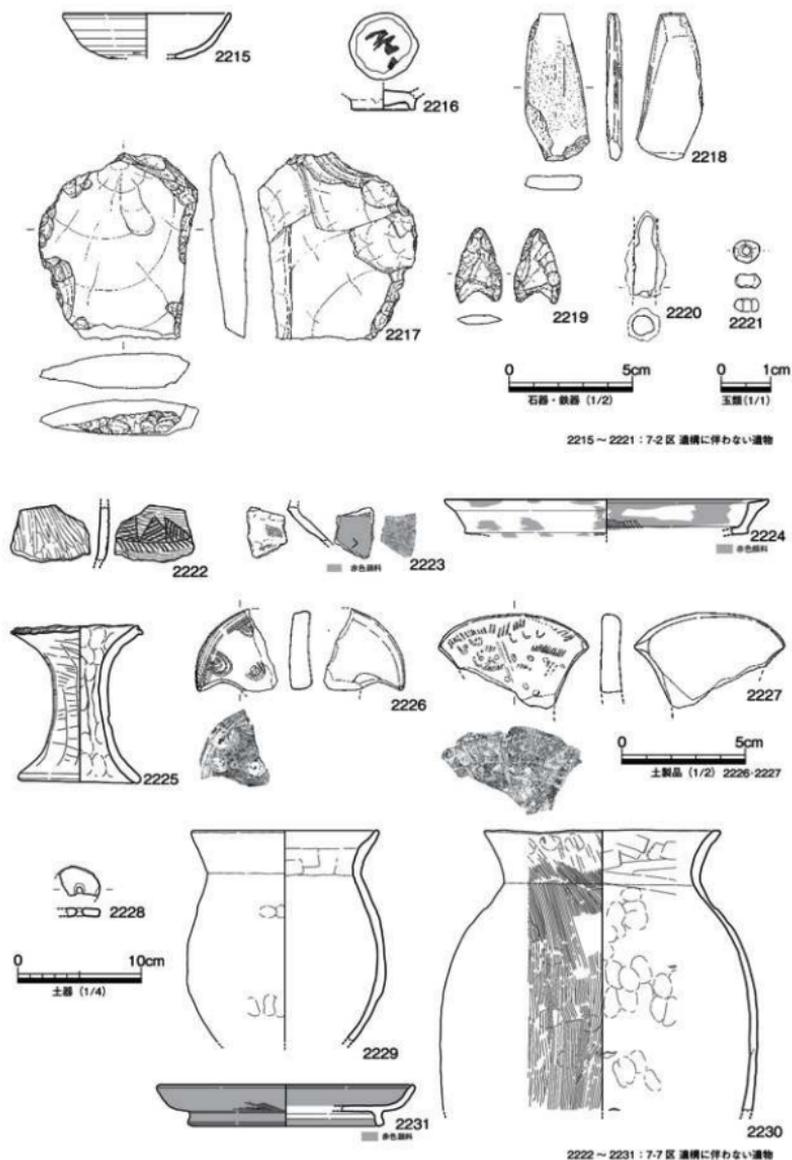


図 272 7-2区・7-7区遺構に伴わない遺物

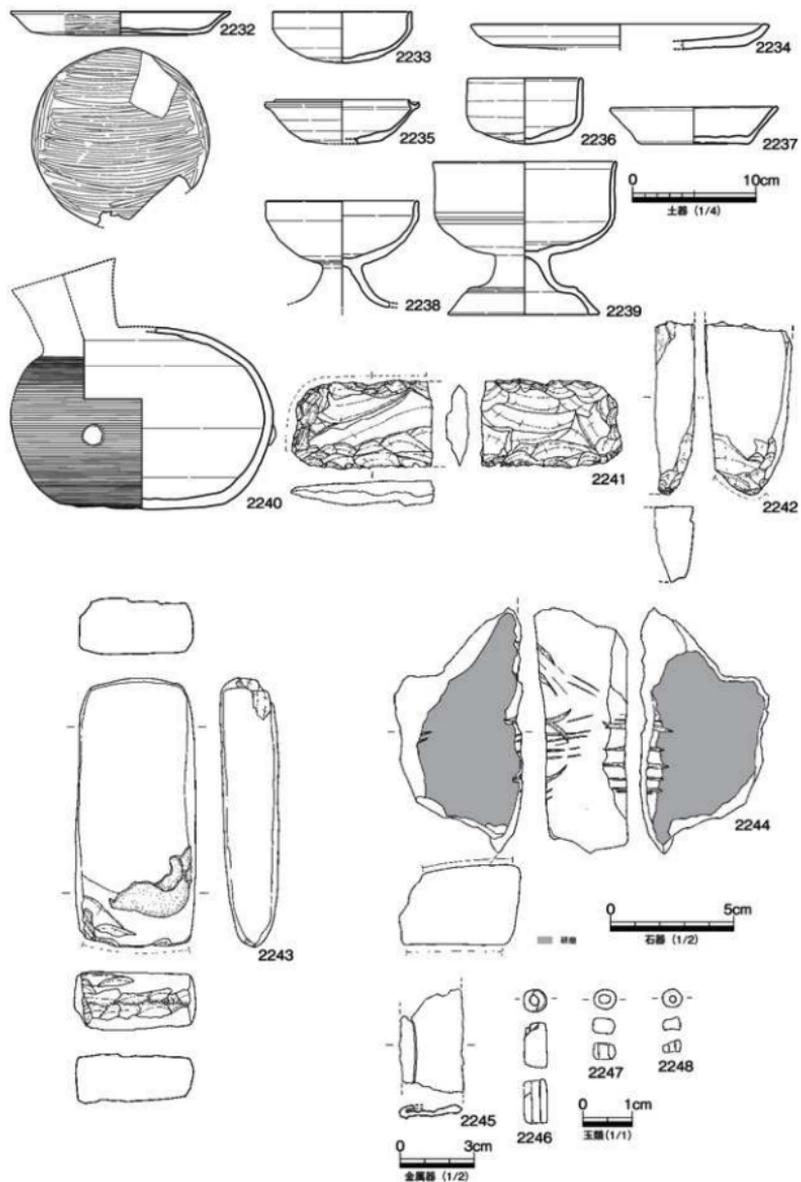


図 273 7-7 区遺構に伴わない遺物

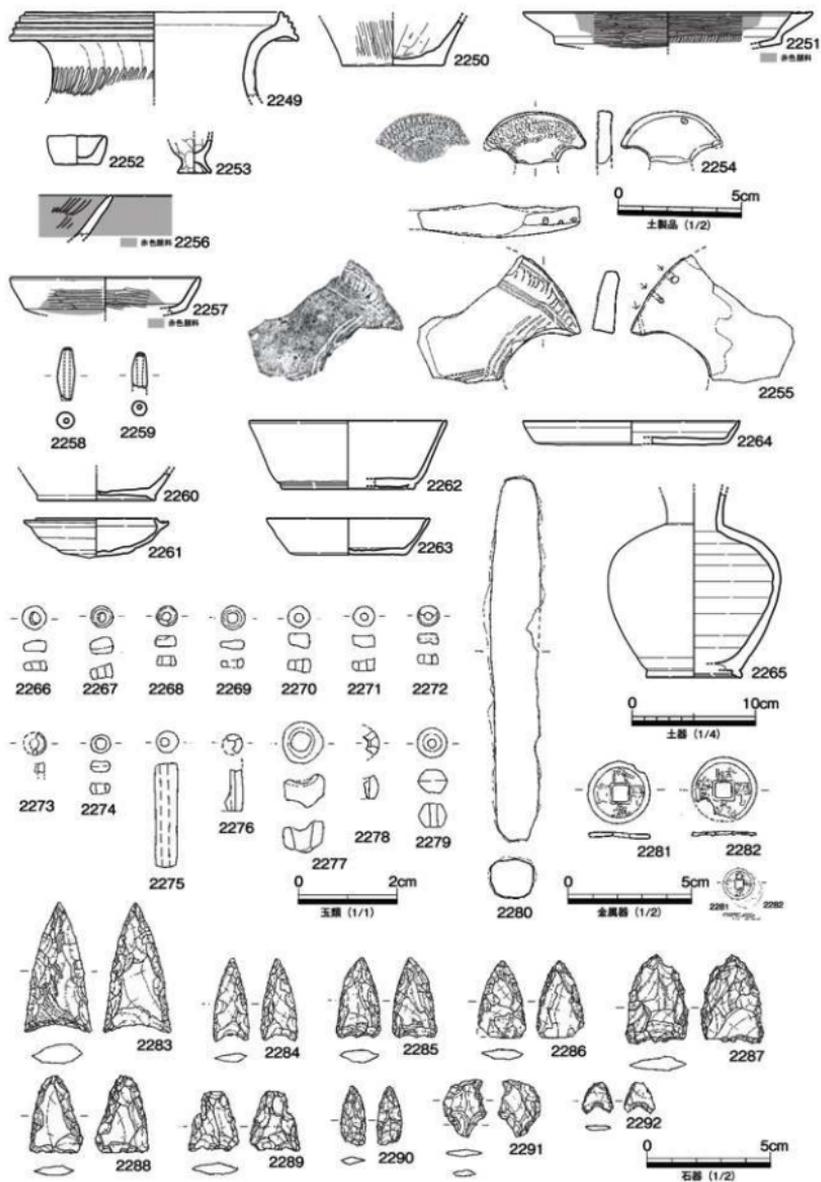


図 274 7-8 区・7-9 区遺構に伴わない遺物 (1)

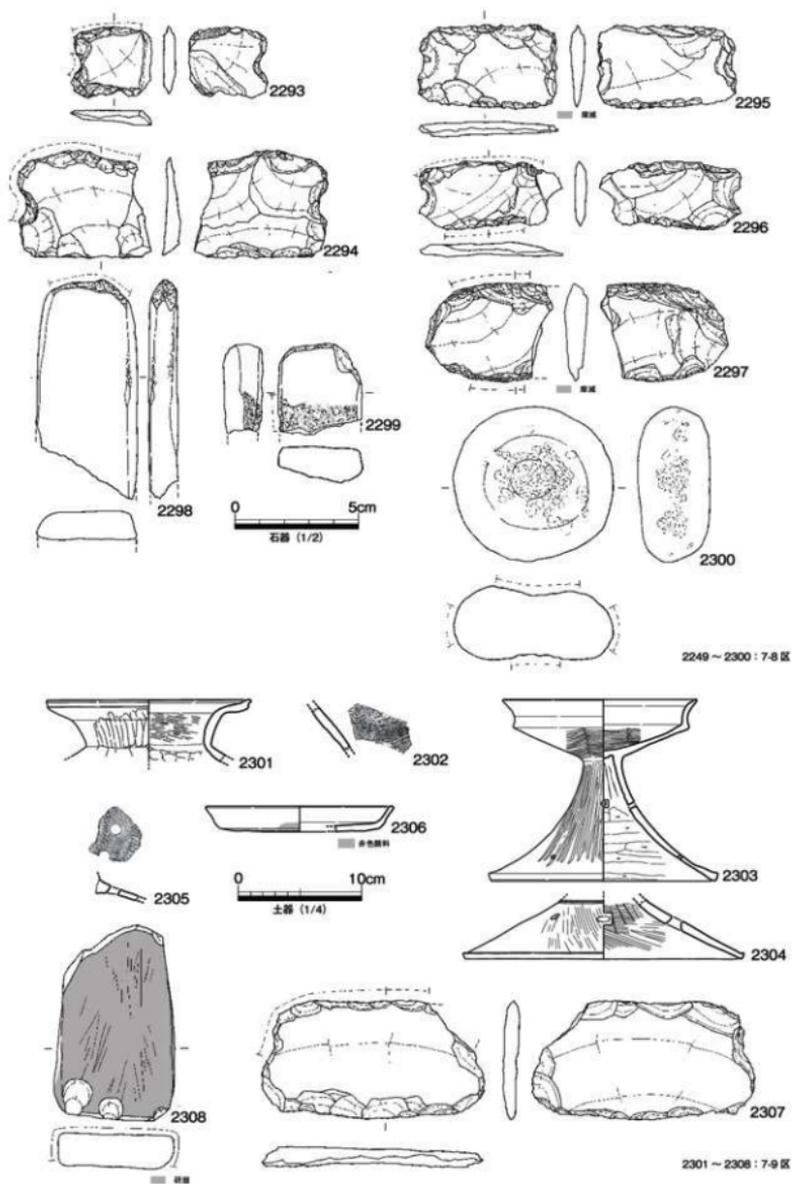


図 275 7-8 区・7-9 区遺構に伴わない遺物 (2)

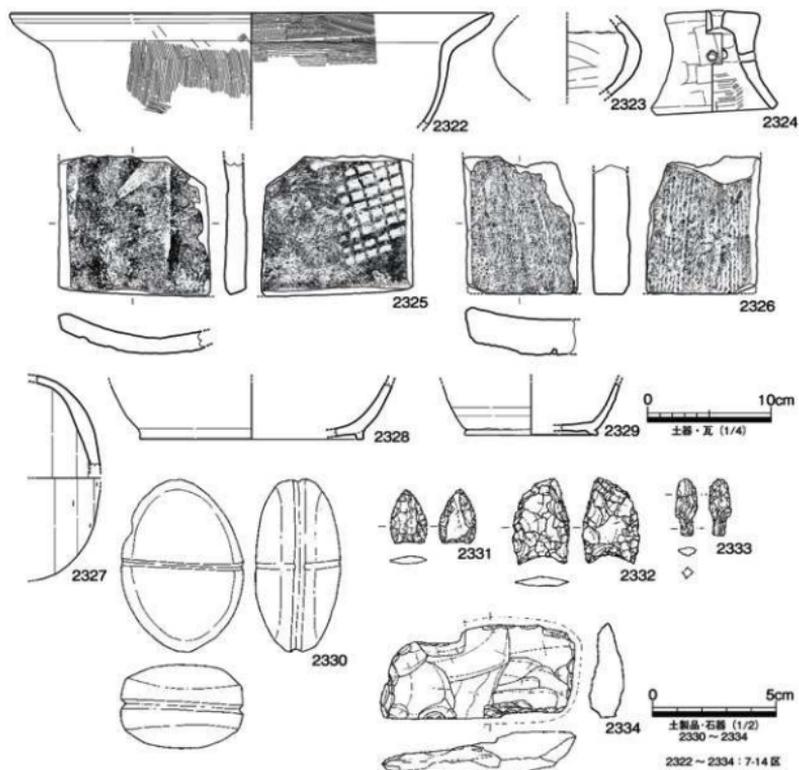
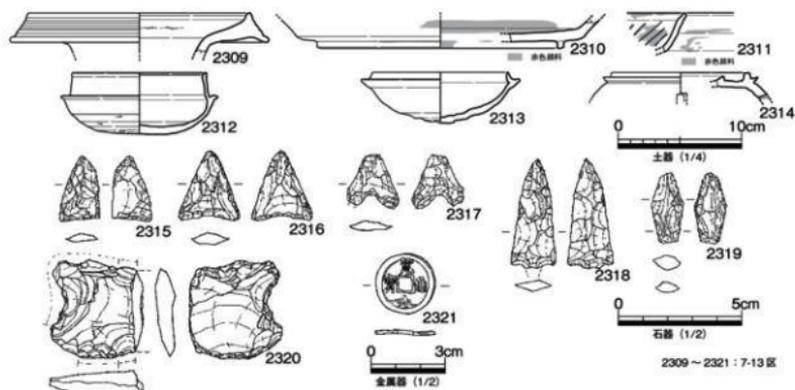


図 276 7-13 区・7-14 区遺構に伴わない遺物

ので、吉備からの搬入品と考えられる。2281・2282は銅銭である。2枚が貼りついた状態で出土した。接着面には僅かながら布が残っている。保存処理作業中に2枚をはずし、それぞれ別個に実測し、掲載した。表面には泥や錆が多量に付着していたが、エックス線写真を撮影すると「隆平永宝」という字がみえた。「隆平永宝」は796年に日本で鑄造・発行された皇朝十二銭のひとつである。

2301～2308は7-9区から出土した。2307は結晶片岩製の打製石包丁である。側面には抉りがある。2306は土師器皿で、外面に赤彩がある。

2309～2321は7-13区、2322～2334は7-14区から出土した。2310・2311は土師器杯で、赤彩がある。2310の赤色顔料はベンガラである。2314は須恵器円面硯である。2322は土師器甕で、12世紀のものである。2330は有溝石錘で、砂岩製である。2334は結晶片岩製の石包丁未製品である。研磨された面がみられることから、本来は石斧であったが、破損等のため石包丁に作り変えようとした製作途中のものであろう。

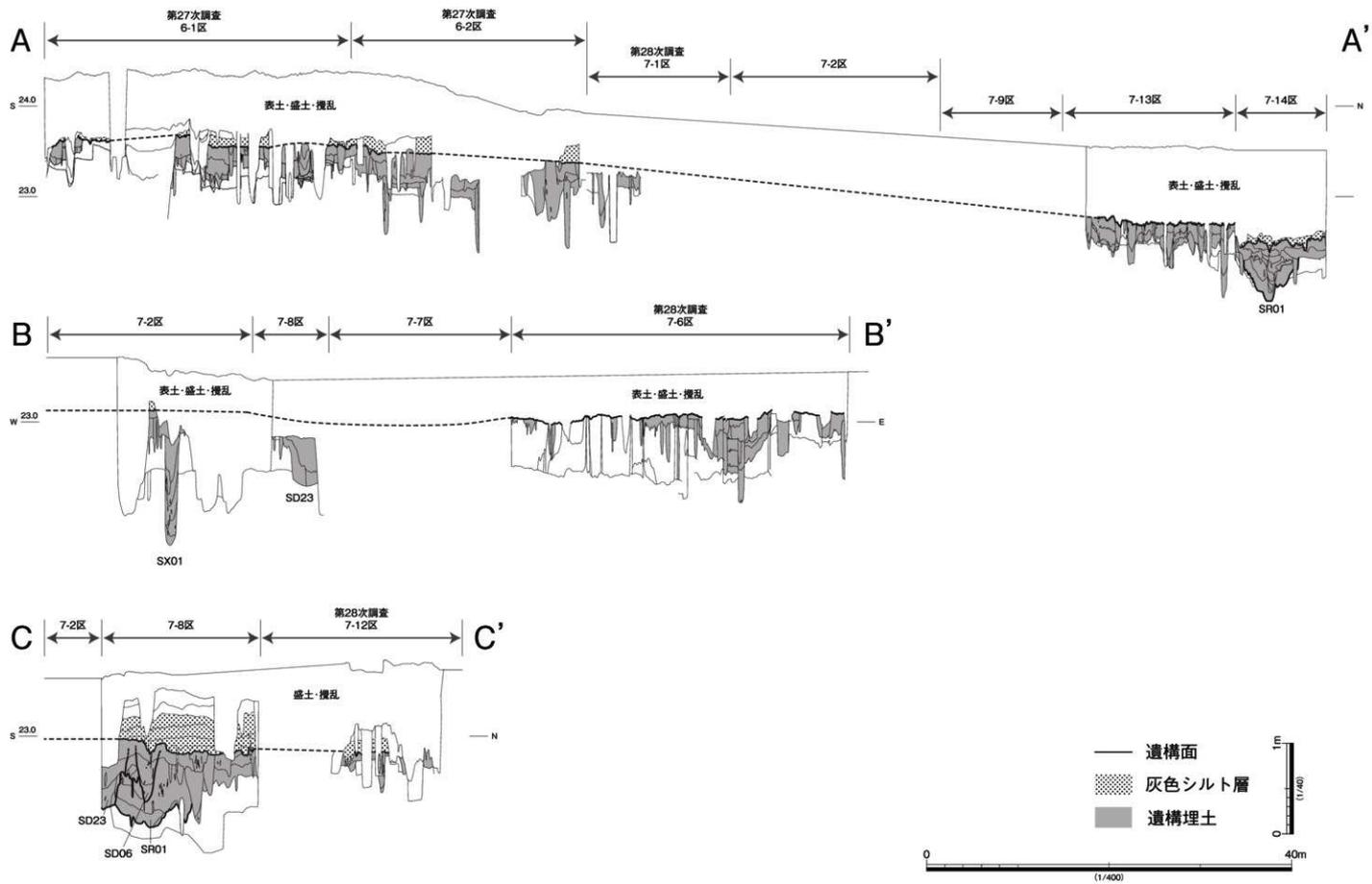


図5 土層堆積図



图 6 7-2区-7-7~9区-7-13区-7-14区道路平面图

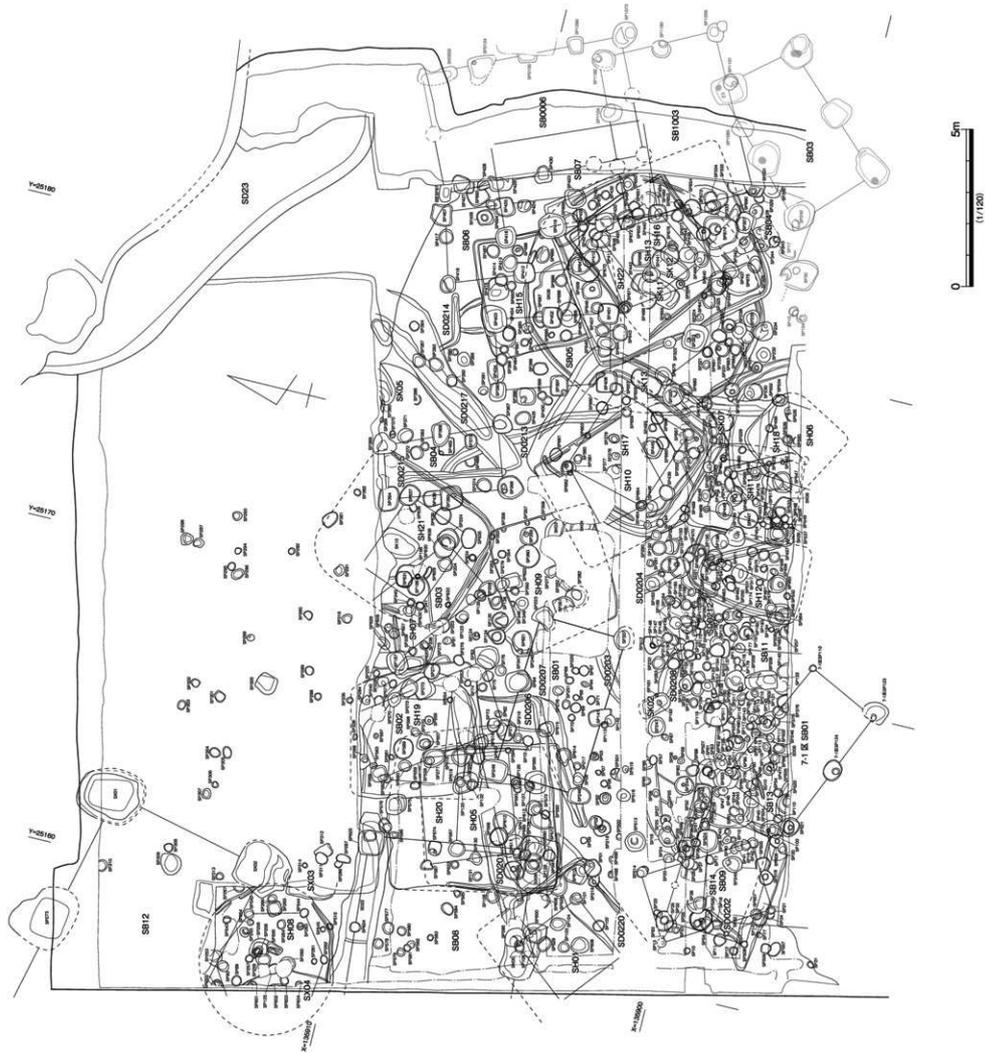


图 7-2 区道精平面图



图 10 7-8 区总平图

